

奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

緊縛女体ポルトレート



1961

3月号

奇譚クラブ

3

定価 百五十円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



限定版特別号、第一弾！

『緊縛フォトアラベスク』

略号（あらべすく） 特價 五百円

△収載内容△二十六項目、写真七十七葉

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1、鏡……………愛川悦子 | 14、奔放な肢体……………大塚啓子 |
| 2、銘花二輪……………花坂道子 | 15、鏡台と腰巻……………花坂道子 |
| 3、鉄鎖……………大塚啓子 | 16、腰巻と鏡台……………花坂道子 |
| 4、蹄観……………大塚啓子 | 17、奇妙な休憩……………絹川文代 |
| 5、庭園にて……………絹川文代 | 18、田代悠子表情集（二）……………絹川文代 |
| 6、謎の微笑……………田中芳代 | 19、脱がされた高手小手……………愛川悦子 |
| 7、田中悠子表情集（一）……………田代悠子 | 20、亀甲縛り……………愛川悦子 |
| 8、誇る脚線美……………田代悠子 | 21、吊責折檻……………村井知可子 |
| 9、この足どうかしら……………田代悠子 | 22、立木縛り……………村井知可子 |
| 10、裏と表と……………愛川悦子 | 23、豊 醇……………愛川悦子 |
| 11、落陽の丘……………愛川悦子 | 24、乱れ髪三景……………大塚啓子 |
| 12、ポリウムの花園……………大塚啓子 | 25、椅子と絨緞……………愛川悦子 |
| 13、緊縛美の綾……………大塚啓子 | 26、姐上の美鯉……………絹川文代 |

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。
（限定版特別号は一切書店売りを致しませんから、直接発行所宛お申込み願います）

美人モデルのかとし出す緊縛美

しばられたオシナばかりの集大成

限定版特別号、第二弾！

『緊縛写真と緊縛画集』

略号（緊縛） 特價 五百円

★ 四馬孝緊縛画集 ★ （二十五枚）

- | | |
|-----------------|---------------|
| 女体耐久テスト…………… | 女の掟…………… |
| 素晴しき会食…………… | 三醜女の逆恨み…………… |
| オシメカパーと赤ん坊…………… | 遠慮はいらねえぜ…………… |
| 白いいけにえ…………… | 女体の荷物…………… |
| アクロバットの訓練…………… | トランク詰の裸女…………… |
| 女学生の嫉妬…………… | 吊し責めの美女…………… |
| 女体は美しき玩具…………… | 浴場の悦楽…………… |
| 人間燭台の実験…………… | 鞭の御馳走…………… |
| 物置小屋の怪…………… | 淫虐な美容師…………… |
| 生埋めの私刑…………… | 狂気の復讐…………… |
| 奴隷という責め…………… | ヤキを入れてやる…………… |
| 水責めにあう美女…………… | 電気責めテスト…………… |
| 回転する女体…………… | |

★ 素晴らしき写真集 ★ （八十四葉）

- | | |
|------------------|-----------------|
| 序曲「手吊」のポーズ…………… | さあどうでもして…………… |
| 第二楽章逆手吊と足吊…………… | 陳列された女体…………… |
| 緊縛感のクローズアップ…………… | 忘れられぬ豊満美…………… |
| 拘束女体の経過…………… | 黒蛇地獄…………… |
| 股間縛り競艶…………… | 女のふんどし…………… |
| 麗わしき系列…………… | 女のサポーター…………… |
| 狂った果実…………… | 吊り人形の哀歎…………… |
| 晒し者なんだわ…………… | 断然これは凄い…………… |
| 腰巻の乱舞曲…………… | 女囚第十四号罷り通る…………… |
| 女の歎び八態…………… | |



第一口絵

美と幻想の構図 四馬孝・画
 ビール瓶と洗面器 長いゴム管と洗器
 湯気と可憐な娘 妖嬈と可憐な娘
 ジヤジャ馬車道の夢 素晴らしい荷物
 女の方が惨憺だ 戦慄の触手か?

拳銃を持つ女 (この女性の魅力はどこから?)

第二口絵

マゾ画題 潮れい子・画
 グラマール・ハイティーン お嬢さん師範代
 書生マバ人間馬 離れい子・画

サド・マゾ絵画館 泉奇館の歓迎パーティー
 少年愛麗シリーズ 某国憲兵の取調を受ける日本少年
 目次裏 川柳「モデル撮影風景」 佐保忍作 潮れい子画

緊縛女体ポートレート 構成・杉原虹児



グラビヤ・フォト・セクション

逆エビの像 モデル 朝川文代
 驚愕の像 モデル 花本京子
 南国女の像 モデル 朝川文代
 露骨の像 モデル 梨花悠紀子
 笑肌の像 モデル 植茂良子
 割かれるものの像 モデル 朝川文代
 腰風に揺れる像 モデル 桜川聖子
 被裏の像 モデル 四方清美
 珠玉の像 モデル 大塚啓子
 艶麗の像 モデル 前本妙子
 疑獄の像 モデル 朝川文代
 哀指の像 モデル 朝川文代

奇く時評 最近号を読んで 寺井紀夫 60
 ノン・フィクション 新妻は望んでいた 南方佳男 64
 奇譚三十九夜物語(第三夜) 辻村 隆 74
 運載第三次元小説 奴隷密売株式会社影の国 雪便 76
 ある告白から 奇くが運んで来た女 近藤 一 86
 運載小説「宇宙のどこかで」 佐治 麻造 106
 新連載小説「狩獵者」 佐度 槐 124
 中国戦艦秘史 堀河王嗜虐録 塔婆十郎 138
 映画通信 最近の盛り映画から 東山映史 151

通信 女性の乗馬に関連して 龍 良人 71
 切腹という自殺形式の美 森 猛雄 84
 愛 澤 通 信 藤沢 久 122
 秀麗の持っているもの 藤山秀雄 132
 金色マニアの願い 岡本 敦 136
 女装の醍醐味 矢島健一 174
 裸女血斗のイメージ 室井英山 204
 随想「奇くを読んで」など 文津部三郎 206
 ゴムの感触とおムツ 関根 彰 216
 ハンティ・マニアの言葉 中西郁雄 226
 犬願望の男より 高田芳朗 227

蛙腹物語 羽村京子 152
 新稿 ある夢想家の手帖から 沼 正三 164
 女主人(ドミナ)との対話 谷田 勲 176
 運大人悪業記より「地霊の国」 土路草一 180
 尻打ち(スパンク)について 麻生 保 198
 マゾ氏街をゆく 西田 仁 210
 白痴(ばか)いじめ 辻村 隆 218
 鑑賞用緊縛女性 麻生 保 228
 時評 麻生保氏の生活と意見 麻生 保 234
 読者通信 234

こうしたらよい。ポーズよと

寒さには案外

川柳
モデル
撮影風景
佐保忍作
淹れい子虫

痛いとは

言葉に

なら

初め

縛り

嫌よと
ヌード
では



モデル言

強い
白
肌

西陽さす

障子のかげに

カメラ据え

モデルだもこね



この前はこの気持と

告白し



煙草にし

ぬままで

休憩は

ほどか

美と幻想の構図

四馬孝画



ビール瓶と洗面器

長いゴム管と浣腸器



電気鋸を扱う男



妖婦と可憐な娘



ジャジャ馬令嬢の夢





素晴らしい荷物

女の方が惨忍だ



戦慄の触手か？



緊縛女体

ポートレート



構成・杉原虹児

哀憐の像





モデル
前本 妙子





逆エビの像





モデル 絹川 文代



驚
悸
の
像



モデル 花 本 京 子





像の女獲虜



鑑賞用の像



モデル 梨花悠紀子





の 像

加 茂 良 子





哭 肌

モデル







捌かれるものの像

モデル 絹川 文代









微風に揺れる像

モデル 桜井 葉子











被 襲 の 像

モデル 四方 清 美







モデル 大塚 啓子



珠玉の像



像の踊の艶



モデル・前本 妙子



像の苦の似疑





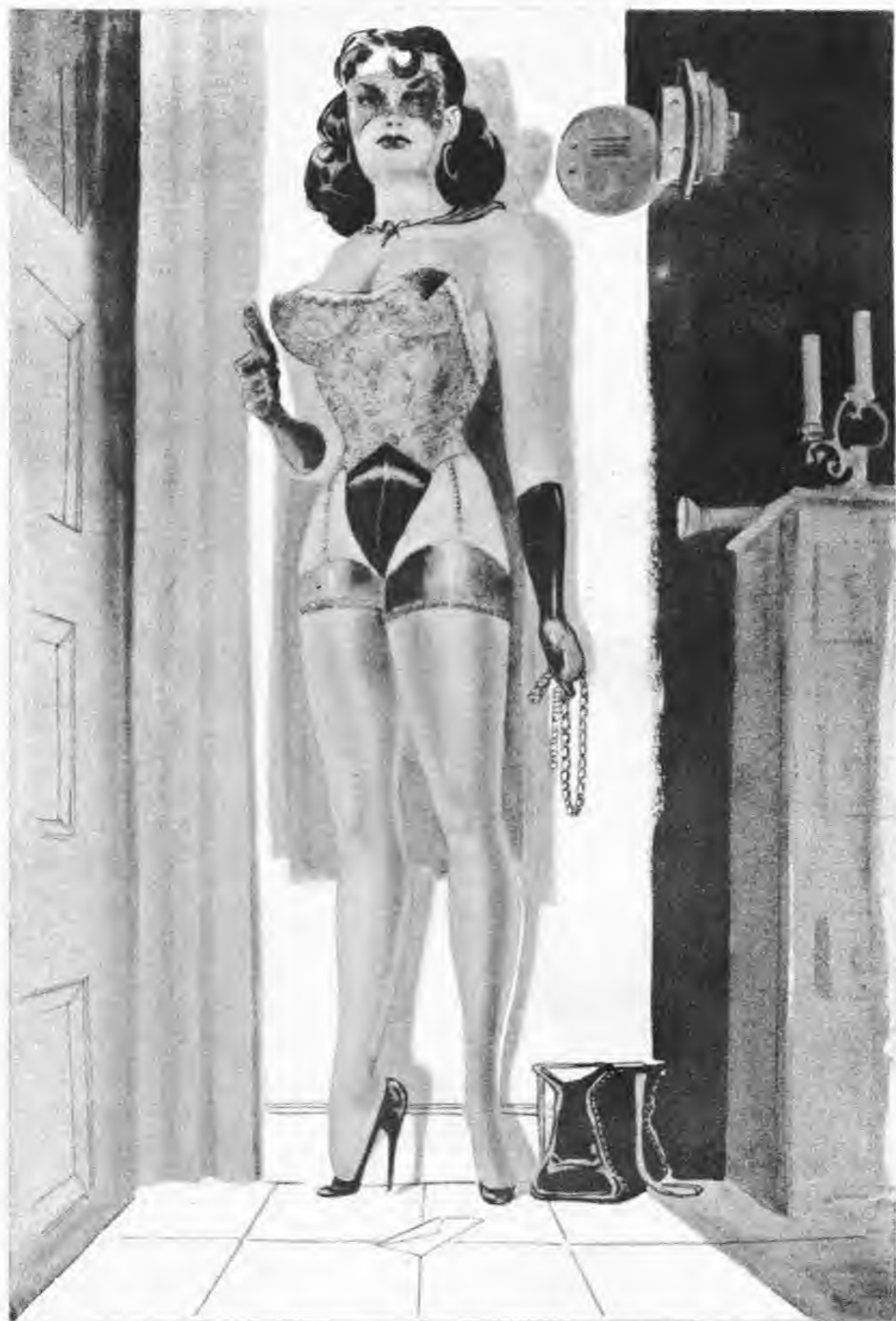
モデル 絹川 文代



哀指の像

モデル 絹川 文代





拳銃を持つ女（この女性の魅力はどこか？）

グラマー・ハイティーン

「年とった俺をそういじめないでくれ」「とか何んとか言って結構喜んでんじやない？ あたいはサービスのつもりなんだけどナ」





書生ッぽ人間馬

「さあ、このままお風呂場まで乗っけて行くのよ、それ、もっと早く、早く」
「でも、板で膝が痛いんだもん」

新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

新装三月増大号

1961年 3月 号

(第15巻 第3号 通刊第151号)





奇ク時評

最近号を読んで

寺井紀夫

奇クも愈々内容が充実して来て、時評をやらなければならぬ段階になった。

新年特大号は、全体的に云って、先ず出色の出来栄である。写真も記事もバラエティに富んでおり、それらの扱い方も、度ぎつさを避ける配慮のあとを見せ乍ら、而も一つ一つの作品は、可成り突っ込みが利いている。

先ずバラエティの点であるが、一体に奇クの読者の好みや希望は多種である。そして、これらの多様の好みを、限られた誌面の中にどう捌くか。私としては、特集号の様な場合は別として、普通号では、多数者優先は当然のこと乍ら、少数者の好みの種類も切り捨てることなく、成る可く多種類を夫々適宜に満足させる様にバラエティをつけることが望ま

しいと思う。その為には、所謂、大作を多く並べてスペースを塞ぐよりも、大作と共に、新年号の様に、短編、小論を数多く網羅する方が、より多くの読者を魅き付けることになっていいと思う。更に所謂、大作と云うものについて私は、実は多少の疑問を持っている訳ではない。と云うのは、世は月刊誌の時代から週刊誌の時代に、又読む時代から見ると時代に移りつつあると云われる時に、所謂大作と云うものが、それ程一般に読まれるものであるかどうか、奇クの読者でそれを好むファンも勿論、いるだろうが、数から云うとそれ程沢山いると云えないのではないかと云う疑問だ。勿論、私もその内容が真に優れたものであるならば、大作の存在意義を否定しな

い。否定しない処か、此の様に目まぐるしい時代なればこそ、尚更どっしりしたものが欲しいとさえ思っている。又奇クが読者の短編や小論だけになってしまったら、同人雑誌と選ぶ所が無くなってしまつて、これも困る。雄大な力作も亦、待望される所だ。ただ、限られた毎月の誌面をどう配分するかと云う段になると、所謂、大作をそのスペースの中に並べ立てるよりも、大作は別冊にするとか、或いは大作を並べるならば、一回の掲載分を少くするとかして、全体的のバラエティは豊富にした方が良くと思う（此の辺、色々意見の岐れる所だろうが）。

それから、バラエティと云つても、その間に自ら軽重の差があることは謂う迄もない。

例えばサドは本命、主流であり、マゾはそれに続き、フェチがその後を追うとか云う風に……。何時だったか、読者通信欄で天泥盛英氏と云う人が、編集者に向って、読者通信欄の中から読者の傾向の割合について分類統計をとって、そのパーセンテージを公表せよと提案していたが（当時その人の狙いは、奇巧の記事にマゾが少いと云うことについての不満の様に見受けられた）、これは、公表は無理だろう。此の種の統計は、恐らく編集者側ではとっておられるだろうが、その結果は編集上の指針とす可きものであって、一般に公開す可き性質のものでは無いと私は思う。

それから、此の種の好みや欲望と云うものは、多種であると同時に、具体的であることが特徴だ。勿論、読者の中には、全体としての雰囲気が入って奇巧を求めると云う人もあるだろうが、大抵の人は、どの記事、或いはどの写真、どの写真とどの写真が気に入ったから求めると云うのではないか。中には、もっと具体的に、どの写真のモデルのどの部分（鼻とか足とかのフェチ的）が気に入ったから求めると云うこともある位に、此の種のファンやマニアの好みと云うものは具体的なことが多い。だから、それに応える

為には、漫然としたり散漫なもの文では効果が挙らないので、飽く迄も、夫々の作品に具体性と突っ込みを持たせて、一つ一つの欲望を的確に捉える様にす可きものと信ずる。

扨て、個々の作品について云うと、写真では、四方嬢の表情が出色だ。同嬢は十二月号のも良かった。同嬢の熱演に比べると、相手の男性氏は頼りない。四方嬢にあれ丈の表情を出させるからには、男性氏もっと迫力的であって然る可し。

例えば「香りある息吹」二葉で、男性氏はただ突っ立っているが、もっと中腰になって脚をフン張るとか、肘を張るとか、力の籠ったリアルな動作はとれないものか。左手にしても、ただ四方嬢のアゴに当てがった丈と云う感じだ。

「一方的」の四方嬢の表情も秀逸だが、何故、此の様な悲鳴を上げなければならぬか——の説明が明らかでない。男の手は、ただ四方嬢の首筋に触れている丈で、加えられたこの所作と結果（大悲鳴）との間の因果関係が明らかでない。

従って、折角の四方嬢の悲鳴が、単に写真を撮るための表情としか見られずそれはそうに違いないが、わざとらしくなってしまうとい

る。或いは、これが「一方的」の所以か。

十二月号の「静かに動くもの」も面白いが、男の右手が、ただ四方嬢の鎖骨の所に添えられている。これも、ノドをグッと押え付けるとか（そうすると四方嬢は思わず口を開いたか）少く共、アゴを抱え込むとか、何かもう少し切実感を持たる様工夫が欲しかった。然し、何れにせよ、物事は初めから完全に行く筈はないので、此の種の着想は一つの新しい意欲的な分野として、今後開拓の価値は十分にある。

大塚嬢は、今迄髪を振り乱したり、泥んこになったり、汚れ役が多かったが、十二月号の「黒髪の用法」が「辺りから、趣向を変えて来た。私は寧ろ、この方が大塚さんに向いているのではないかと思う。汚れ役だけでなく、今後どの様に大塚嬢の眠ったきれいな面を引き出して行くか、これも一つの課題だろう。

絹川文代ベテラン嬢は、既に定評のあるところ。新年号の「レンズの前に」のような少々楽屋裏的の趣向は、従来その大部分を占めていると云ってよい床の間の飾り物的な外所行き写真と違って、一種の「生活」が滲み出て、作品の奥行きをグッと深めるものであり、

今後の動向の一つを示唆するものだ。五葉の中一番終りの転がされたのが良く、これは一頁大にし度い位だ。

それにつけても、私が不思議でならないのは、靜的な出来上り図（完成図）だけで無しに、それに至る迄の動的のプロセスを捉えて撮って欲しいと云う注文や希望が、随分と読者欄やその他にも山積しており、そして、これは勿論、瞬間々々を捉えるのだから仲々困難には相違無いが、曾ての名作、杉嬢の「女が縛られる迄」その他の例もある様に、全く不可能ではないだろうと思われるのに、仲々誌上に実現されないことだ。似た様な完成図二葉載せるよりも、プロセス、完成図各一葉計二葉の方が効果的のことが多いのではないか。アイディアの範囲の拡大と共に、アイデア内での此の種の掘り下げも必要ではないか。間口と共に、奥行きも必要ではないか。十二月号の「表情とアップ」大塚嬢の部にしても、折角二十六葉を費し乍ら、感銘が大して盛り上がらないのは、表情やアイディアそのものにも因るが、二十六葉の中僅かにでも（例えば「或る争いから」の二葉目から三葉目に移る所）、プロセスへの配慮が強く加味されたなら、今少し迫力が得られたのではない

だろうか。ところで、絹川嬢に戻って、「肌にあふれるもの」は美しい写真だ。ただ、こんなにきつく縛られては嘔ぞ痛かっただろう。美しいと云えば、十二月号の絹川嬢の「冷たい休息」は、後世に残る美しい作品だ。

記事に移って、巻頭の市川彦氏の「新アブ街散歩」は、適切な実例を駆使しつつ、手馴れた筆致で余裕綽々論議を進め、説得力もあって、好個の読み物だ。一体に変態と常態とは程度の差だとか、大抵の人はアブ性も持っているとか云う原則論は耳にタコが出来る程聞かされるのだが、私達が知り度いのは、その様な論議も結構だが、更に具体的事実と実例を知り度い。その点、市川氏は適切な実例を挙げ乍ら論議を展開され、読む者をよく首肯させる。例えばその事例として、週刊公論十月四日号の「男性はいつも貴女の“あし”を見る」と云う特集記事について、或る女性「いやらしい……へんたい的だわ」と云い乍ら、あわてたようにチラと眼を自分の足におとし……その挙句に「その週刊誌、私にも読ませてね」と云ったという。「この記事を読んで、女の足を見たがる男性の心理を研究し、いっそう自分の足の美に、磨きをかけるつもりなのだろう。そして、より男性の

心を挑発し、もてあそばうとするにきまっている。それがはっきりした計画でなくとも、無意識のうちに、若い女性はそういう努力をし、ポーズをつくり、行動する。うわべでは“へんたい的だわ”と軽蔑しながら、彼女らは、そして男ももちろん、これらのアブ的記事を読む。読めばおもしろい。心の深奥部をくすぐられ、かきたてられるように気がする。程度の差こそあれ、万人の胸底に、アブ願望の心理がひそんでいるからだ。読者が熱心に読むから、編集者は味をしめて、またつぎの……」と氏は論定する。

ところで、話は一寸脇に外れるが、新年号の読者通信欄に中谷訓氏と云う人が、此の夏以来週刊誌の表紙に女性の素足が随分大きく瀬繁に出る様になったが、これは奇クの影響ではないかと云っているが、成る程若しそうだとすると、市川氏の引用する週刊公論の特集記事も案外、編集者が意識すると否とは別として、又直接であると否とは別として、奇クからヒントが得られたものかも知らない。こうなると、奇クの影響力も怖ろしいみたいなものだ。

市川氏は更に他の実例として一人の友人を挙げ、その友人が市川氏に向って「きみは、

アブだからな、なんとなくキモチわるいよ。ぼくはどうもサドだとか、マゾだとか、変態趣味ってのは、わからねえなア。でも、あの道に一步入ると、また、いいんだってねえ……」などと云うのだが、その友人は奥さんが勤めて一家を支えている関係もあり、食事の仕度、部屋の掃除から、奥さんの下着、パンティの洗濯まで一切やる上、往々奥さんに罵られ乍ら、一向気にしない処か、それらを楽しんでいる。つまり、サド的女性と、マゾ的男性が調和した夫婦の典型みたいなものだそう。その友人が市川氏に向って「ぼくは正常で、マゾもサドもわからないけど——」などと云うのだから思わず苦笑してしまう、と氏は云う。

確かに、アブの要素をチャンと持ち乍ら、それを意識しないで、サドとかマゾとか云うと、何か特別の世界があつて、其処に自分達と違った特別の人種でも棲息しているかの様に思っている多くの所謂「正常人」のことがよく描かれている。

なお、アブ論議としては、牧野正夫、川崎進一両氏の記事もある。奇クが一般書店売りになって、新しい読者層も恐らく急速に増加しつつあることでもあり、此の種の論議は大

いに有意義と謂う可きだろう。ただ、従来時々あった様な、余りに専門的な論叢や、外国文献の丸写し的なものは、他の然る可き専門書にでも譲るとして、奇クでは主として事実を中心に論議を進めたものの方が良いのではないか。その意味で、今回の三氏の記事の如きは何れも適切だった。

新年号には久々に伊藤晴雨氏が「地獄宿」を提げて登場しておられる。伊藤氏が、斯界で誰知らぬ者の無い大先達であり、殊に戦前世の無理解な時代と戦つて来られた功績は大きく評価する可きことは、何人も異論があるまい。

ただ、氏には追隨者も多い代りに、その作風が古風であること、又古風であることはいとしても、髪を振り乱した残酷な無慙絵が多いので、近代的な明るいセンスにマッチしないとして、敬遠する向が多いことも亦事実だ。私なども、氏の業績には敬意を表し乍ら、曾て奇クに氏の「性液」と題する連載物が載った時、私はその挿絵や、殊に「性液」と云う題がイヤで、その大きな活字を見ると気持ちが悪くなつてしまい（文章の中なら何んでもないのだが）、内容を読む処か、「性液」の載っている奇クそのものも捨ててしまい度い

位イヤな気がしたことを茲に告白する。こんなことを書くのは、斯界の大先達に対して失礼千万なことかも知れないが、偽らざる気持はそうだった。

それで、十二月号に伊藤晴雨氏の予告が出た時、私は、明るい美の研究を主眼としている筈の奇クに、今更伊藤氏を引っ張り出さなくとも思つたことだが、幸いにして今度は可成り奇ク向きになっており、題も挿絵も以前に比べれば穏かで、従つて文章も読んでみると仲々面白い。此の程度のものなら、いや、奇クにはもう少し穏かな方が良いかも知れないが、今後の掲載を願うことも良いと思う。何んと云つても伊藤氏には年期と筋金が入っているので、一種の風格があり、余人の及ばない所がある。

辻村隆氏の「奇譚三十九夜物語」の初夜が明けた。これから如何なる珍談、奇譚が展開されるか、毎月読者の期待を唆るに足るだろう。今回の三話の中では、ユーモラスな点で、私は第二話の「理解ある紳士」をとる。

扱て、以上新年号を概観したが、私の見過ごした力作、秀作もあったことだろう。その点は当方の致らざるところと、御宥恕頂き度く、今回はこれでペンを擱く。

「ノン・フイクション」

新妻は望んでいた

南方佳男

杉原虹児画

夜中に眼がさめた。和子は私の右隣りで、安らかな寝息をたてていた。二月前に嫁いで来た私の妻である。

新東宝女優の万里昌代にそっくりな、眼鼻だちのはっきりしたマスクが、昼間のきん張から開放されてか、艶めいて桃色のスタンドの光の中に浮かんでいる。

私はそつと手を伸して、ふくよかな手首にさわった。握りしめてみた。疲れているのだろう。彼女は何もわからずに、夢路を進んでいるようだ。

逃げ出すはずもないのに片手で手首をつかまえたまま、私は空いているもう一方の手で、自分の寝間着の細く丈夫な帯をまさぐるように静かにといた。私は柔道着に使うような細巾の帯を常用していた。

眠る前に少し飲んだ酒のせいだろうか、不思議と勇気が湧いた。

夫婦となって初めての試みである。慎重に驚かさぬように、いやむしろ気付かれぬように、私はいままで妻にかくして来た、自分の生地を、実行にうつして行った。

細い帯の端が、クルクルと二つ、和子の左

の手首に巻かれ、軽く締められた。でも、彼女の健康な寝息は、少しも乱れなかった。

結び目は、あまり強くないようにこしらえて、今度は彼女の胸越しに右手首をうかがった。だがすぐに思い直した。

「前手縛りは、趣味に合わないからな」と心の中で呟いた。

だんだんに大胆になる。思い切って、帯を仰向けに寝ている彼女の体の下へ通して、右脇に出した。通す時に一寸抱えおこしたので、和子は「フーッ」と大きく息をついて、顔の向きを右にかえた。予期していながら、私は、



何故か「ドキッ」とした。

心の落着くまで呼吸を計って、再び行動に入る。まず和子の左手を体に添えて、まっ直ぐに伸ばさせる。手首は帯をくつつけたまま腰のあたりにおさまった。

このあたりから、気がせいいて、私のしていることも、かなり乱暴になって来たはずだが、彼女はまだ一向に気ずかないらしい。

釣竿をそろそろあげて、魚のひき具合を計

るような心境で、私は右脇に通した帯をたぐってみた。「ズズッ……」とかすかに滑る音がして、すぐ動かなかった。くくられた左手首が、胴のすばみ、腰の上あたりで停ったからである。

引っ張られたはずみに、手首が反転して、無理に肘が曲ったため、和子は一瞬顔をしかめて、右へ向いて寝返りをうとうとした。

私もすぐに握っていた帯を放した。感ずか

れぬようにするつもりだった。

でも和子はすぐ

また元の様に仰向けに戻った。そして左手を振った。

ゆるめるつもり

で、私は帯から手を放したのだったが、寝返りをうち

かけた拍子に、和子は帯を尻の下に敷いてしまった。

それで手首を振っても動かなかった。

た。

「しまった！ 気づかれた」と思ったら、案の定、睡むそうに片眼を開いて、「何をしてるの」と不気嫌に問う。

「ン、別に……何にも……」

とぼけると、それ以上は何も追及しなかったが、眼を閉じたまま、独りでサッサと左手首の結び目をといてしまった。

私は心残りだった。しかし、何か罪悪感にとらわれて、後を続ける気になれなかった。

こうして、妻を縛る最初のチャンスは、みすみす逃がした。

「あせるな、あせるな」と自分の心にいい聞かせながら……。

○

深い付き合いがあったわけではなく、私の家と彼女の勤め先が近所だったので、朝夕には顔を合わす機会もあったが、互に話合うのは勿論、挨拶すらしたこともない、見合い以前の二人の関係だった。

彼女の職場の上役で、親がわりをしている兄の友人が、見合い話を持ち込んだ時も、年老いた母が、是非にとせがむし、自分でも、少し婚期が遅れかけているのに気づいていたので、まさか相手が彼女だとも知らず、写真も見ないで莫然と承諾した。

という、私は通りすがりに度々出会う彼女に、興味を持っていたことになるが、こんなことを書くと、和子のやつ増長するかも知れないが、まんざら嘘もいえないだろう。

でも、そのころ私には、複雑な理由で、結ばれぬが、私に心から尽してくれていた、美しく若い女性がいた。(後に書くが、このことは和子もよく知っている)

だからよけいに、この愛人との仲を清算しようという心もはしって、それが見合承諾の一つの原因になったのだから、いまになって縁は異なものだと思ひ当る。

ところが、和子だって、後になって知ったのだが、別段私を意識していたのではないらしい。だいたい色気に乏しいほうで、親がわりの兄の友人が奨めるのを信じて、その気になったのだという。だから、私がつい秘密を持つようなことになったのだ。

無造作な結婚の動機だった。

またそれがそのまま、まったく自分でも驚くほど早く、見合いから四十日目にスピード結婚した。互にボロを出さない間に結ばれば、あきらめも易いだろう——と自分のことでないものだから、兄や兄の友人がいった。事実そうだった。でもそのころには、もう二

人とも互に「嫌えない人」といった淡い愛情が通っていた。

○

彼女——いやもう妻であるが——和子は、小柄なので一寸見ると、二つ三つ若くみられる。少し肥り肉シジなのは、女盛りに近ずいた二十五才という年齢からだろう。無口で、誠意がこもっている(少しノロケるけど)が、月日がたつにつれて、勝ち気なといったらよいか、強情といったらよいか、ある一定のラインを越して気に入らない事には、どんなにくどいても、強制しても妥協しないという性格がわかった。

とたんに私は、裏返し自分の性向を彼女はどう理解してくれるだろう。もしも、理解出来なかったら、家庭不和にでもなったらと恐しくなってきた。

よく考えてみたら、私はすでに彼女のトリコになっていたのだ。そして腑抜けにされて、いつの間にか強い影響を受けているのを悟った。

それに抵抗して、というのでもないが、私は時々、彼女に釘を刺してみた。例えば、こんなこともいった。

「僕は童貞じゃないよ。こんな年まで放って

おくほど、世の女の数は不足していないからな」

こう前置きして、関係のあった女達の話を読みざらい聞かせてやったりした。

こんなことは近代女性なら、よほどウブでない限り見逃がしてくれる自信があったからだ。でもやはり危険な話である。

和子は少しいやな顔をしたが

「無理ありませんわ」

と聞き流した。私は肩すかしをされたようで、はなはだ面くらった。

だが反面、直感的に、宿命的にあきらめているのか、それとも何かのコンプレックスを持っているのか、いずれそんな理由はどうでも良いとして、ともかく私に従って行こうとする彼女の心をくむことが出来た。

やっぱり私は、彼女を押え得る人間だった。

そして彼女におびえているようでも、僕のサド性は言葉の端々、行動の隅々で徐々に現わされていたのであった。ただ私のためらいは、それがH的感覚をおぼえさせないよう苦しんでいるのだと反省出来た。

こんな調子だから、無論危険品、例は『奇ク』なども、ギッシリと本箱につめたきり、和子のいるときには、錠を開かなかった。そ

して鍵も、常に肌身をはなさなかった。
 “機会を待つんだ”と――。

○

無性に水が飲みたいほど悪酔いしていた。
 スタンドを消しているの、闇の中を手さぐり、枕元に用意してくれているはずの水さしを捜した。

“オヤッ?”

水さしより先に、一個の鍵が手にふれた。
 でも、それが何処の鍵だと知る前に、まず一杯の冷いのが、グツとのどを通る必要があった。

――とたんに“ギクリ”と来た。

反射的に電灯を灯した。

“やっぱり……”それは、あの本箱の鍵だった。酔った不覚――無関心なようでも彼女は、私が肌身はなさぬこの鍵への疑惑をとうとうとしていたのだ。またとない絶好の機会となったのだ。

恐る恐るのぞき込んだ和子の寝顔は、何も知らないとはばけているように、何時もと同じだった。

“明日の朝、何というだろう”

何故かスリリングな期待に心がはやる。

悪酔いで、頭がうずくうえに頭が冴えて寝

つかれない。“ままよ”と本箱から『奇ク』を出して読む。

急に、私がこれを読んでいるところを、和子に見せてやりたくなる。

でも流石に、そこまで強気にはなれなかった。

和子は、私が酔って眠っている間に、おそらく本箱を開いたはずだ。どんな心境でこのページをめくったろう。

フト、彼女がワザと私の枕元に、この本箱の鍵を置いた意味に興味湧いて来た。

“彼女が私の理解者であってほしい”

彼女にそういったら、そんな考えは、不潔だということかも知れないが、ともかく、本箱の中をのぞいてくれて、かえって私は気軽になった。

不安もあったが、同時に彼女に借りがなくなったように、むしろこれから指導するんだというファイトと自信が持ち上って来た。

『奇ク』をもとへ収めて錠をおろし、鍵はいつものように、カメラのフードケースの中へかくした。

“最初から、何故うち開けてくださらなかったの”

変らない彼女の寝顔がこういつているよう

な錯覚をおぼえながら、電灯を消した。

○

いつになく、独りで床を離れた。あれからトロトロとうたた寝をくり返しているうちに、和子が起きたので私も起きる気になった。

和子を監視したい気があったからだ。

追っかけるように洗面所へ行くと、和子はチラッと私の顔をみてニヤニヤしている。

珍らしく早く起きたことを笑っているのか、それとも本箱の中身のことでか。しかし別に質してもみなかった。

私が黙っているものだから、彼女も気がひけたのか笑顔を消して、さっさと居間へ帰ってしまった。

“気まずい雰囲気をつくったなア”と思いがら朝食をとる。

口がこわばっているようで、なかなか話題が出せない。

「美味しくないの?」

たまり兼ねたのか、彼女から切り出した。やっと声になった、というような口調だった。

私は首を振った。ただ無意識に――。

「そうネ、美味しくなかったら、こんなに沢山喰べないものネ」

彼女は無邪気な独り合点をした。



舌のおどっている私は、結婚前に
「何はともあれ、料理の下手な女房をもらう
ことは一生の不覚だから……」

おれるのは憎い気がないからだろう。軽蔑く
らいはしているかな——もっとも見捨たりは
すまいけど……

とズケズケ質問した時、
自信あり気に

「人並みくらいは出来ると
思います」

と答えたのを思い出し
た。

「こちらに弱身があるもの
だから、昨夜以来、いろい
ろカンぐったり、掛ひきし
たりしてみたが、案外、彼女
は、何も知っていないのか
も知れない」そうこう考え
ているうちに、とうとう一
言も話をせずに家を出た。

だが、会社へ来てみると、
どうも落着かない。習慣づ
けられた仕事に、このごろ
アキが来ているものだから
余裕があり過ぎる。

「洗面所でニヤニヤしてい
たのは、やっぱり、秘密を
知った喜びだ。でも笑って

昨夜のうちは思いもよらなかったこんな新
しい疑問がつるのだった。そして、駆け込
むように帰宅して、台所にいる和子を見るま
で心配が続いたのだから可笑な事である。

○

一足早く入って温めて待っている床の中へ
ようやく片づけ物をすませた和子が滑り込ん
で来た。

もう新婚生活にもなれて来たのだから、浮
き浮きしたところはないにしろ、恥らしいの
あるうはずもないのに、この夜の和子は、非
常に緊張した顔つきだった。

何事かを秘めたような不気味さを感じた。
たいていは、床に入ってから、枕元の週刊
誌などをめくっているのが、彼女の癖なのだ
が、この夜は様子が違う。私と向き合うよう
に横になって、忙しくまばたきをくり返して
いる。真剣に物事を考える時の所作だ。

この時の私の顔は、きつとこわばっていた
ことだろう。

「ネエ……相談があるの……いいでしょう……」

巻煙草の半分も吸うくらいの時間があつ
て、真面目くさっていた和子の面に、ほんと
緊張のほぐれが感じられたと思ったら、白い

手が私の寝間着の襟元をいじりながら、一寸甘えかけるよう話をきり出した。

「どうも様子が違っていい」

気がかりな私がそう受ける。

無口な彼女が寝床に入って、積極的に話かけて来るなど、ほとんどないことだ。

彼女は独りで言葉を続けた。

「私ネ……一緒にになってから、一度も故郷へ帰っていないでしょう……帰りたいわ……」泊したら戻るのよ、いいわね……ネ」

私は答える前に、この言葉の意味をどうとあせった。

「故郷のお母さんとお話したいの。尋ねてみたいこともあるわ。だって……私、いま、わからないことが沢山あるのよ。二人の間のことは、何でもかでも、洗いざらい聞かせたい……」

珍らしく口数も多い。そして言葉の数が增える度に、私の頭の中は整理がつかなくなっていく。

「待てよう……洗いざらいって……笑われるようなことは困るよ。どんなことだ。それはいったい……」

和子の言葉は、ところどころ耳にさわって痛いところがあったからだ。

「ア、笑われて悪いことって、あるかしら……お可笑いわ」

「だってエ……君のおふくろさんには、結婚式に会ったきりだぜ。早々からア、アを出さすなよ」

「いいじゃないの、親ですもの」

「親には違いないけどさ……」

「なぜ、そんなにこだわるの？」

致命的な一言だった。

「勝手に思え！」

私は投げ槍に、そういつてソッポを向いた。「怒ったの？ 怒ったっていいわ、わたしは帰りたいんだから……」

和子も気妙に反抗的な口調でいい返した。しばらく互の無言が続いて、やがて和子がスタンドを消した。

その間、私の頭の中は、いろいろな渦がグルグルと廻っていた。昨夜からの次々の出来ごとと、今夜の和子の態度について——と、大切なことを忘れていたのに気づいた。

夫婦とはいいいながら、恋愛結婚でないせいか、まだどこか他人行儀なところが残っていた二人の仲が、今夜に限って、何らのわだかまりもなかったことだ。いいかえれば、やっとな今夜、二人は心までゆるし合ったというこ

とだった。

私は闇の中に和子を見ようと、向きを直した。するとほとんど同時に、和子の手が、私の胸にのびて来た。私はその手をグイと掴んだ。遠慮なく。そして、いきなり

「起きろ！」

といい放った。

和子はビクシとした。声も大きかったが、予期していなかったセイもあろう。パツと上半身をおこした。無論、私も一緒に起きあがっていた。

「俺は怒っているんだぞ！」

無意識に、こんな牽制するような言葉が出て来た。そういいながらも、自分の寝間着の帯をスルスルといていた。

夢中で、和子の両腕を乱暴にグイと後に廻させて、手首を交叉させ、その上に帯をキリキリと巻いた。

結果論ではあるが、実によいタイミングだった。計画的には出来ないものがあつた。

だが、和子も黙って、なすがままになっていた。

私がそれに気づいたのは、手首だけだが、初めて妻を縛り終えて、闇に灯をあかしたころだった。

和子は上気して、白い肌を桃色に染めていた。明らかに恥かしさを押えた風情だった。しかも、不気嫌ではない。それどころか、むしろ嬉しさに満ちているようにさえ受けとれる。

「そうだ。彼女は、本当の私を今夜見出したのだもの」

それはまた私の心でもあった。

○

ただ無性に可愛くてたまらなかった。和子が、私の期待していた女であったことが。いや正しくは私が求めていた女性の条件を備えているということが。

自分の心に酔っている私には、冷静に考えれば、その事が、はたして喜ぶべきであるかは疑問なのだが。（私は、その後も、決してこのことだけは考えないことにしている）

後手に縛られたまま、和子は、瞳の大きな眼をつむった。

私は静かに、キスを贈ってやった。そして抱きかかえるようにして、もとのように寝かせた。和子は、じっと私のなすがままになっていた。

何故か私は、この時に限って、これ以上のことが出来なかった。

○

翌日になっても、翌々日になっても、和子は、実家へ帰らなかった。

帰らないわけが私には判るようだった。あるいはこれは、私の良心的解釈かも知れないが（といったら、和子は怒るだろうか）

和子は冒険を試みたのだ。妻として、真実の夫を捜して――

何故か、一線で遮断され、歩み寄れなかったようなもののあった二人の間を結ぶために――あの夜、真剣な顔つきで寝床に滑り込んだ時、彼女はやつとつかみ得た私の正体を、どうしてバクロさせようかと、懸命に考えていたことだろう。

「実家へ帰ってみたい」

といったことも、私を誘い込むばかりでなく、すでにもしもねらいのはずれた時の、第二手段をとさえ計っていたようである。

それから私は、幾日か、和子を縛る気が働かなかった。

私が和子に繰られたことに、何故腹が立つのだろう――そう考えつくまで余裕があった。でも、いまはそうではない。

二人の仲をとりもってくれた『奇ク』と、和子の冒険心によって、私は思うがままの振舞いを妻に持たせかけている。

潑らつとした肢体とはいえなくても、和子

にはまだ若さは残っている。

私も意欲的だが、和子も積極的だ。

よほどの苦痛がともなわれない限り、どのような要求もいとわない。また私も和子の美しい肢体を崩さないことだけには細心の注意を払っている。

互に筋書を考え、注文をつけて、加虐の楽しみ、被虐の喜びを試し続けている。

和子のセンスは鋭い。

例えばこんな縛り。

二本の縄で両手首を首の後で縛り、その縄二本とも背中から前に回して、胸の上で別々にわけて、それぞれ両腕に巻きつけ、その縄尻を互にもう一方の肘に縛る。丁度、腕で首カセをはめたような形になる。（この姿は脇腹をくすぐる責によい）

右手首を巻いた縄を左の脇腰から前腹を回して右脇腰へおくり、左腕を後の背のあたりで右腕と交叉させるようにして、左手首を右脇腰で結ぶ。一本の短い縄を簡単に使って、完全に自由を封じてしまえる。

説明が十分に書けないのでまた機会をみて写真にとっても紹介してみようが、ともかく、二人はこのような新しい縛りスタイルを試してみることに毎夜をすごしている。

そういう時が訪れるのを私は待っていたのだ。いや、和子もまた、それを望んでいたのではないかと思う。



別冊奇譚クラブマゾヒズム特集号と、本誌新年号を拝見いたしました。別冊では、昔なつかしい愛読篇の数々が、挿絵の趣向もあらたに採録され、感慨深く読みかえました。(旧号のものと必ずしも全く同じではなく、幾分詳しいと思われるところもありました)マゾ・フォトギャラリーも楽しい。「馬化白書」にはもれておりますが、捕虜となった出久氏が、八路軍の女隊長、朱慧蘭に中国民衆の前で「走巴走巴」と馬乗りされてから泡を吹き乍ら、悲鳴を挙げて這いずり廻る(「捕



女性の乗馬に関連して

鞍

良 人

虜の洗礼」ところ、細川百合子という美しい女性が背中に鞍をつけさせられた馬族氏を四つ這にさせて跨がり、家中乗り廻してよろこぶ(「美しい暴君」ところ、美容院をやっている山上江子という女性が、シャンデリアの七彩の光を放った十六畳敷程の緋色の間で、水着型のきらびやかな黒衣裳姿のまま、男性馬二頭に打ち跨って調教する。馬どもは三、四回も這い廻ると、江子の腰の下で共にペシヤンコに潰されてしまう(「祭壇に君臨する脚」ところ、更に又、高倉由貴子という十八才になる女学生が、書生の馬場辰次を馬にして跨がる。「発育のよい娘の重みに辰次の膝頭は、すりむけて赤くなった。汗がジトジトとシャツに滲み、額からも垂れる。」「如何にも嬉し気に、由貴子は馬の横腹を踵

で蹴った。部屋の中を十幾度もグルグル廻ると、辰次は極度の疲労に耐えかねて、床の上に這いつくばった」(「美しき悪魔の哄笑」と云ったところなどが好きです。

新年号では相かわらず山本氏の「ファンタジア」が私を喜ばせてくれます。馬乗り娘の替うたシリーズ! 頑張れ馬乗りの娘さんよ、心から熱烈な声援を送ります。

「一里バツタリ」について、私の持っております出典は「別冊笑の泉ユーモアグラフ五月号、ごった煮横丁」女が自転車に乗ると「で、根津哲哉氏の説。「一里バツタリというのは、年頃の女が自転車に乗って、休みなしにペダルを踏んで走って御覧、一里走ったらトタンにバツタリと倒れてしまう、という話である。何故に一里走ったら倒れるのかそれ

はペタルを踏み放しに一里も走ったら、いい加減にこするべきところをこすられて、一里目に感極まって倒れてしまうのである。だから女性の乗馬などは、特にこの点に注意して横の鞍に腰をかけて、決して跨いでは乗らないのが常識である。乗馬では特に走るたびにピョンピョンと上下動が激しく、刺激が強いので堪ったものではないらしい。」

この根津氏の云われる常識に反した乗り方が、現代女性の間ではむしろ圧倒的に流行しているのではなからうか。例えば、十一月二十八日の朝刊十一面のまん真中には「乗馬学校は大繁盛」という見出しで「日本晴れの多摩川堤をゆく乗馬学校の生徒たち」の写真が載っている。馬上ゆたかに打ち跨った女性騎手の列だ。「パカパカと明るい音がこころよく河原に響く。乗馬学校の生徒さんたちのお馬のけいこ。……最近校長さんがびっくりするほど乗馬熱が盛んで、会員も百五、六十人にふえた。会員の半分は女子。ご主人はゴルフ、奥さんと坊ちゃん、嬢ちゃんは乗馬というハイクラスのお遊び。……」といった記事が付いている。

かなり前からですが、渋谷を起点とする東横線その他では沿線各駅に「みんな馬を楽しまししょう」と云う、東急アパロン乗馬学校のポスターが目につく。それは紙面一ぱい馬に跨った一人の娘さんの写真なのです。

おそらく、朝日の記事はこの学校に関するものと思われまます。

女性の乗馬が盛んなのは、この学校だけではない様で、十月二十二日の東京新聞(夕刊)では婦人欄のトップ記事が「土曜日の青春」と題する「馬場は花ざかり——特権的ムードがいいわ」の見出しのついたもの。そこに載っている写真も「東京乗馬倶楽部をはなやかにいどる若い娘さんたち」という女性群の騎馬姿。「都内四つの乗馬団体のうち、東京乗馬倶楽部は勤め帰りの利用者がいちばん多い。渋谷区代々木にある同クラブの馬場の土曜日の午後は日暮れまで二十五頭全部が職馬グループに占領されてしまう。なかでも近ごろはBGたちが目立ってふえ、馬場は花が咲いたようにはなやかだ。……」と云った説明があります。

従来も、一般紙、週刊誌、月刊誌で、女性乗馬のグラビアが目にとまった場合、その号だけとりわけて保存に努めていたのですが、先日留守の間に、家人が全部、屑屋さんに払ってしまいました。その頁だけでもスクラップして置いてあったらと、残念でなりません。週刊誌では、週刊サンケイ、サンデー毎日、週刊文春、週刊スリラー、アサヒ芸能など月刊誌では日本、婦人公論などがあったと思います。

かううじて屑屋行きをまぬかれた、やや特

殊誌に属するものの中から、女性乗馬の記事をあつかったのを挙げますと、「特別レポ、乗馬クラブは花ざかり——ご婦人がたはお馬がお好き」(週刊漫画タイムズ三十四年八月五日号)、「上昇する女性の乗馬熱——ブームの秘密をさぐる」(東京毎夕新聞三十五年七月十五日号)「乗馬クラブはBGでいっぱい」(週刊実話三十五年十一月十四日号)、それに、主題としては娘の同性愛をあつかった記事ですが、その中の一つに「乗馬クラブで相手を漁るお嬢さん」という話が出ているのがありました(事件実話三十五年十一月二十二日号)。

この最後に挙げた記事の中から少し引用して置きましょう。田園調布に家のある、お金持ちの娘さんT嬢(二十六才)が云っているところ。「……乗馬のダイゴ味は、したことがないひとには分らないわ。あの大きな馬の背中に、パツとまたがって、手綱と拍車で、馬を自分の思う通りにするんですよ。それがこたえられないのよ。いやがるのを無理にギャロップさせたり、いうことかかないとピシッとくれてやったり、——まるでドレイあつかいに出来るんですもの。馬が息を切らしただけのために走っているのだと思うと、それだけでも快感があるし、走っている馬の律動が乗馬ズボンを通して、ももや股の感覚につたわってくるでしょ。女の股って、すごく敏

感なのよ。そこへ伝わるんですもの。ポーツとして気が遠くなるようなときがあるわ。終ると、いつも汗びっしょり。下着なんか、すっかりぬれちゃう。……」

これらの記事からみても、それが常識に反しようとするにかかわらず、馬背に跨がってしまうことは女性達にとって、どうにも抑え難い楽しみであることがうかがえます。

「ある女性の乗馬日記より」を書かれた倉仁成人さんが本誌三十五年十二月号で、「私が想像で書いた文や絵も女性の心理や生理上、満更嘘でもない事が結婚後になって始めて判り、いささか嬉しい次第である」(一四五頁)と云っておられますのは、倉仁夫人の実証を基ずくものなのでしょう。倉仁さんは、「乗馬日記」をお書きになられた後、御結婚になられましたのでしょう。おめでとうございます。倉仁さんのお便りは今度の新年号にも出ておりますが、それによって、風俗奇譚誌十一月号の牧田則子名の「日記」が、倉仁さんのものであり、しかも名前が形式が御意志に反して変更されたものと云うことを知りました。

あの作は私も見たのですが、その一節に、「クラブが前後、上下、左右とゆっくりと波うつようにゆれる。馬の背に深くまたがっている私の太腿の内側から内股へと一枚の薄いショーツをとおして、馬の身体の動きから、

しまいに息づかいまでが、じかに伝わって来て、私をなんとも云えない気持ちにしてくれ。……私は、息をはずませ、なまツバをのみ込む。私はなおも股を、グイグイとクラの前あげに押し当てる。目の前が急に暗くなってきた、思わず一瞬、目をつむってしまう。」(風俗奇譚十一月号一二五頁)とあります。倉仁夫人も、御主人のよき理解者、協力者でいらっしゃる様でうらやましく存じております。よろしくお願い申し上げます。

以上、申しました「一里バツタリ」に関して最近、私が気に入った写真に「別冊実話特報十一月号」のものがあります。これは黒シヤツに、下は薄色の短いショーツパンツをはいた姿の若妻が、買物に出掛けるのであるう、無造作にサンダルをつ、かけ自転車に跨がったところ。「あなた、早くお金もってきてよ、……」と上を見上げています。ほ、笑ましき団地風情のひとつまです。

このひとこまが出てくるグラビアは丁度、「乗りますわヨ——テモすさまじき女上位時代」と題する八頁にわたるもの。その最初の頁(八一頁)は、上半身裸で四つ這いにさせられた男の上に、すき通るばかりの下着をびっちり着けているだけの若々しい女性が、抑え潰す様に馬乗りしている写真です。この女性の後首から肩にかけての線など甚だイカス様に思われます。その外、次頁でも女子騎

手による障碍飛越の図が二つほどあるなど、なかなか多彩です。

それから乗馬女性の写真と云えば、新年号には、麻生保氏のものがありましたね。乗馬姿の注文にやかましい氏の作だけに、なかなか興味がありました。三十四年九月号九十四頁にある拙作は、氏の御指摘をまつまでもなく、決して決して満足な写真ではありませんでした。その後も少しでも満足なものをと苦心はしております。少しはましだと思いう図も出来てはおりますが、いずれも正面からのであるため、顔がわかってしまう怖れがあるわけです。それで紹介は遠慮いたします。

私の住いは、ごく手ぜまで、思う存分、室内で馬遊びが出来ません。そんなわけで先月は無理して、東京をいささか離れた保養地でも云ったところへ妻と出掛けることにしたのです。その宿へ行けば、馬の私が、ヘトヘトになって、もうどうにも一歩も進めないと云うところまで、騎り手である妻が乗り廻すのだという手筈だったのです。しかし、旅の疲れなども禍してか、思った程、存分に楽しめるまで続けられず、わずか数分にして潰されてしまう結果に終わりました。殊に、何も敷いてない板廊下では膝が耐え難い程の痛みを覚えます。

(おわり)

奇譚三十九夜物語

第三夜

辻村 隆

窓に雨すだれ。外は激しい夜の嵐——。風は咆哮して暗黒に走る紫電——。

それでも——、クラブのメンバーは八人。快い酔いに上気して話は弾むのです。

あかあかと暖炉は燃えて、今宵のリクエスト曲『フォギーマウンテン・チャイム』のリズムが、柔く人々の耳朶に響き始めました。曲が終った、やおらワイン氏が酔を醒ますようにコールウオーターをぐいと呑み乾して、こころもち縁無し眼鏡を軽く押し上げると口をきりました。

第七話 「甘い生活」の断片

「軽妾といえますか。零号夫人といった方がいいか、それとも可愛いペットとでも申しませうか——。社長と女秘書や、課長と女

事務員、又は専務とタイピストといった、老若のカップルをよく見掛けます。女は欲との道連れが多いようですが、彼等老境に達せんとする者にとっては、正に回春の妙薬ともいふべき若い女達なのです。功なり名遂げて、停年の近づきつつある彼等にとって、それはいうなれば果敢ない最後の、消えんとするローソクの残火にも似た情欲でもあったのです。私の知人、山辺課長も端的に言って、それらの一人に過ぎなかったのです。既に五十七才のロマンスグレーの彼が、逝く春を惜んで、若き国友カオルと、人目を忍ぶ仲になったからといって、それを責めるのは些か酷なような気もするのです。彼女は十九才、高校を今年卒業して、山辺課長の総務課に勤務した、若鮎のようにピチピチした、潑刺としたお嬢さんでした——。国友カオルが島根県の田舎の高等学校を卒業し、大阪の義兄を頼って、このK産業に入社。総務課に配置されると毎日義兄の家から

通勤していた。

だから、山辺課長と人目を忍ぶ仲になった時、彼女は、彼の探したアパートに転居する事を一議なく快諾した。

娘以上も年令の違うカオルを、課長は掌中の宝物のように溺愛した。無理もない——。謹厳実直をもって自他共に任じ、過去三十五年間、一度の瑕疵もなく会社大事と勤めてきた山辺課長にとって、これは正に、突然変異にも等しい大変事であった。彼にとっては初めての恋であり、カオルが何ものにも換えがたい存在であるだけに今や年を忘れ、家を放置し、細君や子供のことも上の空で、血道をあげるのも無理からぬ次第である。

カオルのいうが儘、欲しいというものは、万難を排して買い与えカオルの我儘は、何事によらず甘受すると云った工合で、現代版『痴人の愛』も斯くやと思われる程の耽溺ぶりであった。電気器具一式はいうに及ばず、カオルの衣服は日に日に殖える一方、靴ですら二十三足の豪勢さは、カオルを益々増長させていった。

衣食足りて、カオルは若い相手と恋を囁やいて見たくなった。いかに山辺課長が溺愛しても、所詮五十男の悲しさは、若さに張り切れん許りのカオルを満足させなかった。

カオルが同じ課の石原青年と恋に陥った。アパートがいつしか二人の愛の囁きの巣となってくる。

要領よくよろしくやっているつもり二人の仲も、頻々となるにつれ、やがて山辺課長の気付くところとなった。山辺課長へのサービスが投げやりで、サッパリ熱が入らず、いつも夢みているような眸が、あらぬ事を考えているようである。

色か慾か、深く前後もわきまえず、山辺課長に身を任したカオル

の浅果かな考え——。既に高校時代、ボーイフレンドとの噂云々されて、処女性はとっくの昔に棄てているカオルの当世風な生き方に古風な山辺課長が、カオルを独占した様な気になっていたところに悲劇の原因は胚胎していたともいえるのであるが……。

石原青年とカオルを、どう切離すべきか。山辺課長は悩みに悩んだ挙句、更に一カ月の手当を倍額にして、どうやら彼女を会社から退かせ、アパートで軟禁同様にすることに成功した。

と、同時に、打つ手を打って石原青年を遠い新潟の出張所へと左遷同様に転勤させてしまった。

——やっ、これでカオルはわしだけのものになった。

山辺課長はホッとした。が、それは早計すぎた。小悪魔カオルは、石原青年が遠く離されてしまうと、早速お代りの男を探し出していた。

洋酒喫茶で出逢った男——、何の職業か巧辞、身綺麗、しかもホドホドに不良じみでいて、カオルの最も好みそうなタイプである。野暮ったい石原青年に較べて、これはまるで、鉛と金程の違いだわ——。と、カオルは叫んだ。

惚れ抜いている山辺課長にとっては、一難去って又一難——。それに今度はどうやら相手が悪い。かくなる上は、軟禁状態を監禁状態にするより仕方がない。

「カオルが浮気するのなら、わしは断固として一切を引揚げてしまふ。モトの裸の姿にしてこのアパートを追い出してやる。どうだ」山辺課長は、遂にしびれを切らして、厳然として叫んだ。

「浮気なんて、とんでもないわ。ワタシにとってパパ一人が恋人よ。それなのに、それなのに」

カオルは出ぬ涙を絞って、巧みに泣き喚くのである。

「よしッ、それ程いうのなら、ワシはすべて知っているが、今迄のことは水に流してやろう。しかし、ワシの云うことをきいてもらわなくちやならん。いいネ」

「ウン……、パパのいいつけなら何でもきくわ」

「ワシが戻ってくるまで、これを両手に嵌めておく。いいね。それからこれが両足だ」

こういって山辺課長は、革靴からゾロゾロ引づり出したのは、ニッケルでメッキした、手錠と足枷であった。手錠にも足枷にもキラキラ金色に輝くクサリが、体の自由のきくように一米の長さに連結していた。

「これの鍵はワシが預って行く。これもカオルが可愛い余りだからだ。」

「ひどいわパパ——。こじやまるで囚人じゃないの——」

「これだけクサリが長ければ部屋に限り、何をするにも不自由はない筈だ。おっとそうだ。この部屋の鍵もワシが持っていくことにするよ——」

斯くて、一日、二日は経過する。カオルは案外、神妙である。山辺課長にもつと悪戯心と、無意識の嗜虐性が湧き起ってくる。



三日目——山辺課長はカオルをパンティ一つにして、目くるむよなムチムチとした肉体を曝した彼女に手錠と足枷を嵌めた。

課長の脳裡に、『甘い生活』の一シーンが浮んだ。

「カオル——、四つん這いになるんだ。馬になるんだ、ハハ、この部屋を、ぐるぐる四つん這いで、這い廻るんだ——。このわしを乗せてな……」

カオルは無言の抵抗を示す。山辺課長の眼はキラリと光って、思

い切って振り上げた革バンドが瞬間、パシリとカオルの尻を打った。

「ヒエーッ——勘忍してパパ——」

「痛い——。さ、馬になるんだ。ぐるぐる這い廻るんだ——。」

課長はロッカーの抽出しを開けると、いつの間に作ったのか、細い絹針に鳩の羽根をとりつけた束を出すと、愉しげにその一本をとって、眼許にかざすと、おどけた様にカオルのお尻にねらいをつけた。

観念したのか、羞恥を全身に漲ぎらせてカオルは高々とおしりを持ち上げて四つん這いになって歩き出した。

山辺課長はねらいをつけて羽根針をさすと裸身になげた。シウルシウルと羽根は伸びて、カオルの盛り上った臀部に氣持よく突っ立った——。

「あッ——」

刹那の痛みに、カオルは可愛い悲鳴を挙げる。ガクリと脚を打ってうずくまるカオルに、課長の革バンドが又、うなった。

「歩け——」

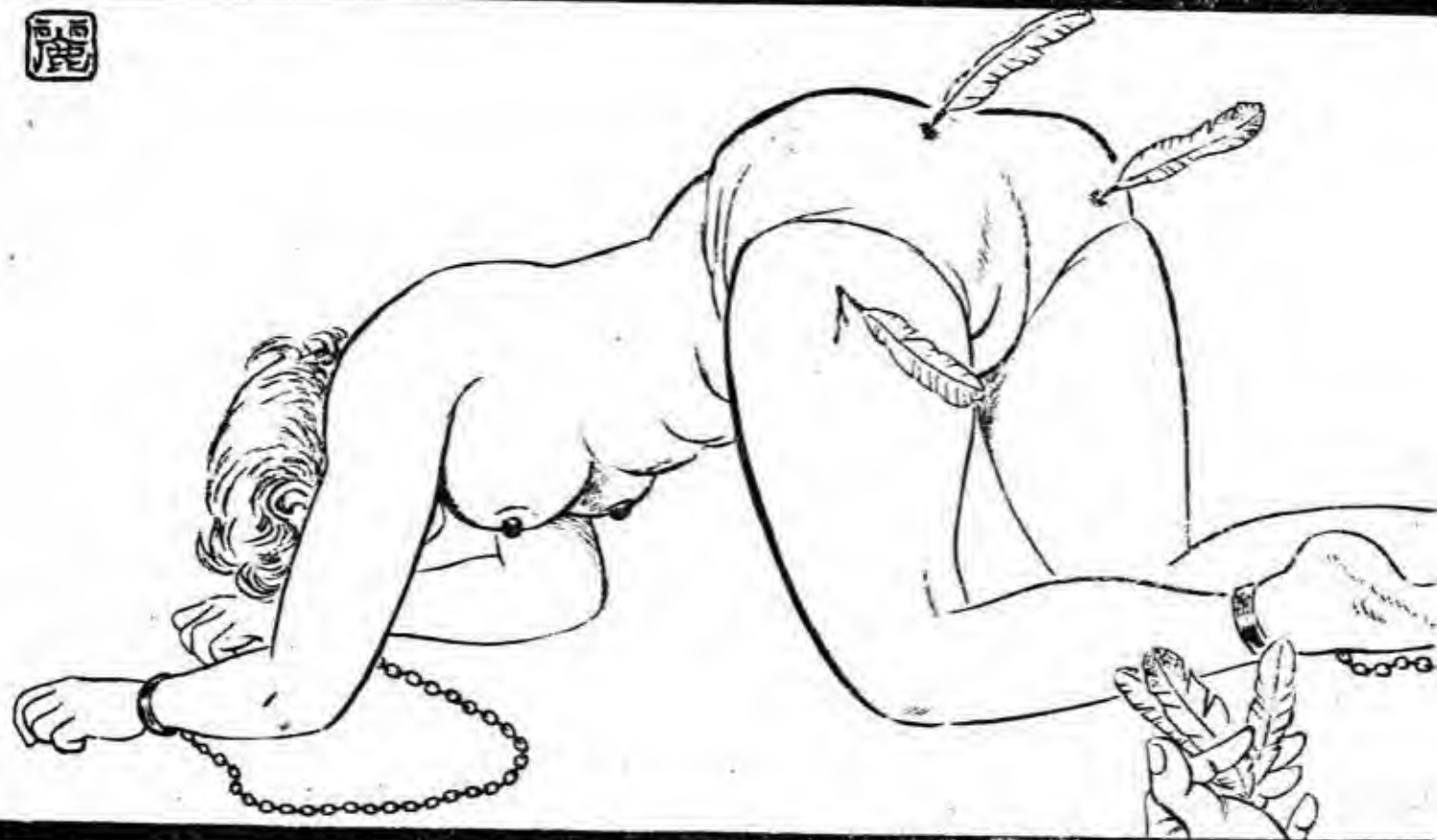
羽根針と鞭が交互にとんで、カオルの胸に背に、腰に、斗牛の槍のように無数の羽根針が、突きささっていた。ささった針先に微かな血が滲んで、それは痛々しさよりも、女の華麗さを一層引立てる様に、震えながら揺れていた。

「思い切って女は征服するに限る——。カオルもとうとう、このわしに参ったらしい——」

山辺課長は疼くような征服感をかみしめて、彼の膝下に跪まづいているカオルを見下してつぶやいた——。

「五十男が若い女を満足させる方法に嗜虐趣味も悪くない。それにわしにもどうやら、若々しい血がみなぎってきた様だて……」

その後、数カ月、カオルと山辺談長の仲が、いよいよ親密の度合を加えてきたところを見ると、彼の荒療治はどうやら



成功したらしいようである。

第八話、マッサージの家

「パリのモンマルトルが、他の歓楽場と異なる所以は、種々奇怪な悪風が、公然と警察の眼を掠めて展開されていることです」

ナイロン氏はこう云って、最近パリから帰った許りの新知識のうんちくを傾け始めました。

「夜が来ると、僕は夜のボックス、例えば、『ラ・プティット・シヨミエール』へと足を運ぶのです。こうした遊び場は大抵は、モンマルトルの心臓部の、曲りくねった小路の角とか、或いは幾階かある建物の頂上にあつて、カーテンを全部おろした、外見の非常に奇怪な店なのです。」

入口の預り場でコートと帽子を預けると、タキシードをきた可愛い少年が出てくるのです。頬をバラ色に染め、唇に紅を施した金髪のゲイボーイが、妖しい物柔らかさで、僕を案内してくれるのです。パリの新聞の片隅に、ヒッソリと出ている『マッサージの家』これから

僕はその家へと案内されるのです」

ナイロン氏は思わせ振りに、そこでひと息ついたのです。——彼はそこに、所謂『マッサージの家』の典型的なタイプを目のあたりに見た。噂にきいた玄人の常連だけの家『シヤバネエ』——。

マダムの自慢は、各国の大使、公爵、その他、政界、実業界の大立物が、ここに足を運んだ事を得々としてきかせる事であった。日本の有名な画家がここに来たと、マダムはさも得意げに、その画家のサインした、デッサンを彼に見せた。

「ほんとに困るんですよ。素人女がいなくなつてね。でも家じや飛切り上等の淑女の、それも素人許りなんですから……さあ、お部屋に入りなさい。奥様はすぐお見えになりますから——」

マダムは彼を一室に通すと、二千フランを要求した。どこかで微かなベルがなると、驕て、殆んど顔全体をヴェールで包んだ女が、数人慎まじやかに彼の前に並んだ——。

彼はその中から、髪の毛を長々と、背中まで垂らした、こぼれ落ちそうなオッパイの十八九の娘を選んだ。紗のヴェールの下に隠れた娘の顔は生々と張りきって、パスカルプチによく似た容貌が、一入彼の心をそそった。

愛らしい眼付、不思議なほど光沢のある琥珀色の肉体——。

女の名は愉快なことにカルメンといった。話がきまると、そのマドモアゼル・カルメンは、また仲々に打明話が好きだった。

「——ええ、ここはお客さんの筋もいいし、無理をいわれる事は殆んどありませんわ。え？無理を云うって……『鞭打ち』のこと。ホホ、ここではそれが当りまえの事なの。だからフラジエレーションは無理じやないの。だから、私にも御褒美を忘れないでネ——。

……ところで、私はいまとっても幸福なの。え？何故だと仰有るの？きまつてるじやないの、恋人があるからよ。ええ、トンソリアル・アーチストだわ。明日の木曜には外出が出来るでしょう。だから私達の恋は『木曜日の恋』だわ。え？鞭打たれているのを知っているかって？勿論よ——。だって彼ときたら、私を散々いじめ、あったけのことをして遊ぶのが生甲斐だつて云つてゐるんですもの——この間なんか、十字架に逆さにはりつけて、二時間も鞭打ちするんですもの。私、遂々気絶しちやつた。でもそれが幸福なの——。私つて変な女ね……。さあ、それじやお部屋へ参りましょう」

古典的な家具類、烈しい衝撃にもたえられそうなく低く低いベツド。こうした調度を囲んで、天井と云わず前後左右すべてが鏡張りになつていて、その道の巧者同志が、ここで嗜虐の限りを尽すのであった。ベツドの横の太い鉄環。隅の方に大きな木製の十字架を立てかけてある。彼の全身は嗜虐にドクドクと疼いた——。

「この隣りは拷問室と呼んでいるの——。この家で、一番ひどいマッサージに堪えられる人だけがここを使っているの。私も恋人に大分きたえられたから、そろそろ資格があるんだけど、マダムはそんなこと全然知らないから、未だネンネだと思つてゐるのよ。拷問室に入る女の人の御褒美は私達の倍なんですって……。この家では三人しかいないけど、一回マッサージされると一週間位休まなくちや体が回復しないから、結局は損よ——。けれど、お姐さん達はそうされることが嬉しいんですって——。少し、その気持わかる気もするようになったわ——」

マドモアゼル・カルメンはよく喋り、そのうちにも、ピッタリ脚についたズボンを脱ぎ、チョッキをとり、透明な薄い絹布をくる

くると脱ぎすてて、お転婆娘独特の、溢れそうな乳房を惜しげもなく彼の眼前にさらした。

ドシリと低いベッドに仰向けに大の字に転がると、艶めかしい、この種の女特有の秋波を投げてよこした。

「——ええ、マダムからきいているの。随分ハズんで戴いたから時間はたっぷりだわ。いいもの見せたげましょうか。スペシャルのサ—ビスなのよ」

彼女はボンと立上って、鏡にとりつけられた洗面所と、洗滌所の中間の鏡を軽く押した。鏡は自由にひっくり返るようになっていたのだ。片面が鏡で、一方は硝子に透けて見える例のあの特殊鏡である。ひっくり返った鏡の表面は油絵で色彩が施こされてある。

「隣りの部屋が見えるでしょ。壁一面に芸術的な色彩の絵をかいてこの壁覗き穴をカバーしてあるの。向うの部屋からはこの一枚がひっくり返っても分らないの。あれが、今話をした拷問室なの——。あれあれ、始まっているわ。私、胸がドキドキしてきたわ。早く御覧なさい——」

云われる儘に彼は覗いて見た。これが、所謂話にきいていた拷問室なのか——。

そこは、毒々しい猥らな絵が四方の壁に充満しているガラシとした部屋で、黒と赤で染めぬいた正方形の敷物が一枚敷いてあって、天井からは、鎖、太縄、環などが異様に垂れ下っていた。

部屋の中央どころに台が据えてある。台——それは真黒なビロードを敷いたもので、その上に同じく真黒な長椅子が置かれてある。隅の方に、大きな木製の十字架が立てかけてあって、十字架の四つの尖端には鎖がぶらさがっていた。

長椅子に、髪を乱した黒いストッキングだけの女が、生贄のように仰向けに転がっていた。皮の嵌口具がぴっちり女の口腔に喰い込んでいて、その眼は吊り上っていた。両手は長椅子の先端の鎖の環に嵌められ、両足も亦開いて長椅子に皮尾錠で固定されていた。男は中年を過ぎた精悍そうな身体つきをしていた。彼は重そうに木製の鉄をもつてくると、それで、女のくびれた胸を挟んだ。パイスのようにギリギリと捲いてゆくにつれ、刻一刻、女の胸は圧迫されていった。豊かな乳房がブルブルと苦痛に揺れ動いた。胸が緊まり緊まって女の限界にきたのを見定めて、男は白樺製の柔かい鞭で、下打ち程度にピシピシ叩き始めた。苦痛に歪んで女の顔は左右に揺れ動いた。

男は鞭を投げ棄てると、長椅子に飛上り、女の顔から胸へと、グングン踏みつけて女の身体の上を歩き始めた。悲鳴にならぬ悲鳴が嵌口具の合間よりもれて女は脂汗を垂らして身をよじっている。

「もう止しましょう。これ以上見ているのは、私こわくなって来たわ——」

マドモアゼル・カルメンは、心持ち顔色を蒼褪めて、彼の体を抱きかかえて、ベッドに戻した。壁覗きの鏡は又くろりと引っくり返って元に納まった。

彼も異常な体験に神経をたかぶらせていた。「ジャポネの旦那、あなたはまさか、あんなことはしないでしょうね。ホラ、これが鳥の羽根——、これは白樺の鞭、これが中世紀の皮鞭よ。『鞭打ち』フラジエーションがご覧なんですよ。それともあれにする？」

カルメンは眼で十字架を示した。彼はうなずいた。

「ええいいわ。じゃあ、あれを立てましょう」

彼女は軽々と身を起して、重たげな十字架を部屋の隅から引き出して、床にあけられた深い孔にそれを挿し込んだ。脚立を十字架の前に置き、それに乗って、カルメンは両手を十字架上に広げて、悪戯っぽく、彼に笑いかけた。

「X字形の方が、本当はラクなんだけど、特別にこの十字架で辛抱するわ。さあ、いらっしやいな——」

十字架は女の体を宙に支え易いように、各所に革紐や鎖や、環がとりつけてあった。

彼はカルメンに教えられながら、その一つ一つを彼女の体にとりつけていった。差立を外すと瞬間、女はずしりと十糧程もずり下ったが、はりつけの姿で宙に止まった。

彼は脚立にのって、彼女の口中にハンケチを押しこみ、その上より固く猿轡をした。漸やく、彼にも日本での、あの奔放なサジズムの歡びがわき上って来た。

白樺の鞭が、風をきって女の身体に喰い込んだ。女の肌に隈なく無数に残る鞭痕の跡に、彼の更に新らしい鞭が、加えられていった。長い髪は乱れ、ふくよかな乳房はブルブルと揺れ動き、女体は虚空にうごめいて、女は涙を流して、彼の鞭を甘受していた。窒息しそうな異様な女の叫び——その癖こぼれるような媚と涙——。

これが隣室でも、又、この家のあちこちで——。彼女達は喘ぎ、傷つき、血みどろになっても、野獣のような男達の要求を充たす、愚かな役割を演じているのだ。

カルメンは全身を鞭で疼かせ、崩れ落ちるように十字架の下に打伏した。

そして、この前哨戦を飾るにふさわしい低い大きなベッドが、数

多の激しい斗争を見つめるかのように、彼等の前に大きく白いシートを敷いて待っていた。

モンマルトルの夜は今宵も赤い——。そして今夜も『マッサージの家』では、女達が相も交らず、休まず、たゆまず愚かな役割を演じているに違いないのである。

第九話 尼僧の折檻

「河内の有名な小説書きの和尚さんが、よく尼僧の事など書いておられますが、所詮は行いすました尼も人間——。世襲の尼もありましょうが、失恋の果て、又世をはかなんだ娘達の吹き溜りの尼寺にも、若い尼僧が恋に悶え、性の歡びにひそかに人目を忍んだとて、これをとがめるのは、些か酷な氣がするのです」

ステッキ氏は改めてピースにライターを点じると、心持ち体を乗り出す様にして語り出したのです。

「古い文政の頃の、私の故郷の、信州に云い残された尼僧の哀れな物語です」

信州の片田舎、人里離れた淋しい丘の尼寺玄藏院——。

楓、蠟梅、百日紅などが枝をさしのべた泉水のほとりで、若い尼僧春蓮尼は、やるせない物思いにふけていた。

年は二十三の女盛り——

信徒の法要とか、町へ托鉢に出かけて、ひたすら仏への道を励んではいるものの、黄昏になって、ひとり風呂を浴びるときなど、自分のはち切れん許りの肌に、そぞろに、尼僧の生活が佗しくてならなかった。

文政も十年。この地から出た俳人小林一茶が、六十五才を一期に

十一月に世を去ったと、住持の妙蓮尼からきかされたが、そんな事は、春蓮尼にとっては、何のかかわりもない他人事である。

もはや五十に手の届く、行いすました物固い妙蓮尼と二人っきりの味気なさは、フト街にかかった田舎芝居の幟のはためきにも、心惹かれる今日此頃であった。

彼女に寝苦しい夜が続いた。暗闇の床に、ふと起き上って、妖しい幻を追うとき、春蓮尼はそっと、自らの胸を抱きしめてみる。

手のひらの中にとけて消えてしまいたいそんなその乳房は、離せば、パット胸一ぱいに咲く牡丹の花の様に、ひそかに暗闇に生けるものの如く息づいているかのようであった。

彼女は妄想を払いのけようと、懸命に題目を唱える。夜中に起って如来様の前に跪き、心靜かに線香を供える。併し、題目も線香の匂いも、春蓮尼の熟し切った肉体の前には何の用にもたたなかった。

寺院の靜寂が煩悩を払い、無常のわが身を悟らせる靈氣を含んでいる筈が、彼女の場合、その靜寂が、疼くように肉体を責めさいなんだ。

——わたしの心の中に火がついている。燃え上ろうとしている。私は若いのだ——。何故師の坊と等しく、行い澄まさればならぬのだろう——。

春蓮尼の心には、触れると裂けそうに春情が充満していた。

庫裡で微かな物音がした。

彼女はハッと耳をすます。

ミシリ、ミシリ——、怪しい足音が近ずくと、音もなく、春蓮尼の部屋の戸が一寸二寸と押しあけられていった——

「盗人？、あッ……」

と思った瞬間、遅ましい腕が彼女の口を掩っていた。

春蓮尼は膝を乱して、もがいた。暗闇に男臭い体臭が彼女の鼻孔を強く刺激した。

抵抗をやめた尼を男は無言で、しごきで後手に縛った。行燈に力チカチと灯を入れて、男の影がボーッと部屋に浮き上った。

「俺だ吉太だ——、叱ッ、声を立てるんじやねえ——」

春蓮尼は、あっと驚いた。兼々好いた男だと、潜かに心に浮氣心を起していた。それは手打そば屋の若者で、この尼寺の檀家でもあった。

「尋常の手段じゃ、お前さんは滅多な事で俺のものになりっこない。嫌われ、憎まれ、厭がれるのを承知で忍んできたんだ」

咄々と吉太は口説いた——。

その間、白い法衣につつまれた春蓮尼には氣の遠くなるようなひとときだった。

われに帰った時、春蓮尼は手足を縛られた儘床に転がっていた。

吉太はその時、罪を犯した氣の咎めから、慌ただしく立去ろうとして、フト女の微かな呼びかけを聞いたように思えて振返った。

「あの——、もう一度、わたしを……」

吉太は、灼けつくような強い想いをこめた春蓮尼の眼眸を、名状しがたい、混乱と感動で受けとめた。

——俺はこの女を犯した。だのに、この尼は俺を許そうとしてくれる——

歡びが身内をつきぬけて、吉太は再び春蓮尼の傍へ戻ってきた。

——嬉しいぜ、おらあ、うれしいぜ。

泣くように云って、吉太は、もどかしく彼女の縛しめをといて、風の如く闇に消えた。

二度、三度、甘い汁に誘われる蜂のように、吉太は忍んだ。

春蓮尼は大胆になってくる自分におののきつつも、吉太を待つ身になった。

春の訪れと共に、彼女は種を宿していた。

生理の悲しさ、食事も喉を通らず、物思いに悩む、春蓮尼に、師の妙蓮尼は怪しみ出した。

或る夜——綿々と語り合う、彼女の部屋の二つの影に、妙蓮尼は狂おしいほどの嫉妬を感じた。

長い間ひたすら御仏だけに仕えた朝夕の老尼にとって、半年近く若い男に抱かせ続けた、春蓮尼の肌に、彼女は本能的な憎悪をすら感じた——。

——私は寺法によって、あの女を折檻してやる。今に見ているがいい。もっと不義の腹がふくれる。それからの事じゃ——



冷たい老尼の悪だくみの間にも、容赦なく春蓮尼の腹は日増しに大きさを感じ、もはや衣で隠せぬまでに目立ち始めた。

檀家の法要や、寄進は、病と称して断わったが、老尼の前だけは隠せとうせなかった。

「えろう病いが重そうじゃが、何かな、腹のふくれる病いと見えるな——」

老尼の皮肉たっぷりの言葉に、春蓮尼は怯えきった眼眸をあげ「あのう、これには実は……」

「わけがあると云うのじゃな。いやいや、わけは聞きとうない。とうから何もかも知っていたのじゃ。仏に仕える身で、何てけがらわしい。仏様に代って、私が成敗してやる。ええい、ここの痴れ者めが、ほら痛いじゃろ。男を知った報いじゃ」

尼はもっていた青竹でピシリピシリと打据えた。

老尼は春蓮尼を腰巻一つにし、手足を縛って、庫裡に引曳って行き、太い丸柱に、太縄で幾重にも幾重にも縛りつけた。

青竹がひようひようと空に鳴って春蓮尼の皮肉を喰い破った。

水々しい春蓮尼の、雪のような肌を見るにつけ、ねたましさに逆上した老尼の青竹は、所きらわす春蓮尼の体に飛び交い、血がしたり落ちて青だたみをぬらつかせても、打つ手をやめようとはしなかった。日頃は仏のような老尼も、血を見ては、狂った餓鬼にも等しい表情にこわばっていた。

「姦通女の見せしめに、ひようたん責めと云うのがあるのじや。ホレホレこの様にしてな——」

老尼は、一端を納戸の戸に固く結びつけた細引を、春蓮尼のふくらんだ腹に一巻きして力任せに引きしぼった。

突き出た腹がぐっと引しぼられてくびれた。

「あッ——ゆるして……ひい——」

苦悶に春蓮尼は脂汗を流して、この地獄の苦しみに堪えようとした。

蜂の胸のように真中で一線を画して、上体と下体が半分に千切れたように見えたのも束の間、春蓮尼は悶絶していた。

激しい身体の痛みに正気づいた春蓮尼は、自分が、腰巻一枚の裸の儘で、太い柱に縛られた姿である事に気付いた。が——それにも況して、生臭い臭いを慕って、群がりよる幾十匹とも知れぬ鼠が、白い肉体を噛み、かじりついている事に驚愕した。

幾十の鼠は、春蓮尼の体の隅々までも、遠慮会釈なく、喰い込み噛みつき、走り廻っていた。老尼が生臭い汁を春蓮尼の体にかけて鼠責めにしようとしたのだった。

——吉太さん——助けて下さい。私は死にそうです……春蓮尼は必死に心の中で、吉太の出現を求めている。

この儘、放って置かれると、遂には鼠によってたかつて喰い殺されそうである——。

「ひい、ひい、ひい——」

と春蓮尼は悲鳴をあげたが、それも終りにはかすれて出なくなっていた。

三日目——、吉太がそっと忍んで来た時、天井から逆さにぶら下げられた春蓮尼が、鼠の為にすっかり皮肉を喰いつくされて、白骨をむき出しにして、屍体となってゆれていた。うつろな眼を見開いて、ククッと奇妙な笑い声を洩らして、老尼が、逆さに吊り下げられた春蓮尼の下、床にペタリと座り込んで、腐臭のこもった庫裡の中で、ブツブツと題目を唱えていた。

× × ×

おぞましい話でステッキ氏の物語は終わった。外は尚も激しい春の嵐——。

雨と風が窓を叩いて、八人のメンバーはしばし呆然と、それぞれの椅子にメランコリに黙りこくっておりました。

奇妙に帰りたくない夜——そんな夜もあるものです。誰かが声をかけないと、椅子に根がはえたように、一様に腰を上げないのです。酔いが醗酵して、妖しい春の夜は、荒れ狂い乍ら、更けて行くのです。

「お断り」

二月号の『奇譚三十九夜物語』の冒頭に、△この物語は第一夜から第三十九夜まで毎号一夜宛載せてゆきます。▽と但書しましたが、これは「第一話」から「第三十九話」までにて完了する旨、作者から連絡を頂きましたので、△毎号三話宛掲載の上、三十九話にて完結します。▽と訂正いたします。



“切腹”という自殺形式の美

森 猛 雄 (山口)

幾年ぶりで店頭で見かけた奇譚クラブ正月号楽しく拝見、既刊号の内容紹介は有難うございました。飛び立つ思いで、早速バックナンバー四部と切腹フォート一組を注文しました。

私が興味を持つのは特に切腹記事です。自殺という悲惨な行為も、これを切腹という日本人独特の方法で表現する時、始めてそこに「美しさ」が感じられます。首吊り、水死、

毒死等どんな自殺死体も、決し「美しい」という感じは与えませんが、刃物を用いた自決殊に腹を美事にかき切った様を「見苦しい」と評する人はいない筈です。

正月号の『風流いろは草紙』の滝れい子先生の女性切腹図は甚だ立派です。割腹直前の悲愴な顔の表情、ふくよかな乙女の肌の感じやわらかく息づく、いま正に切り裂かれようとする運命の肌、両膝を固く結んだ扱帯は、

女性の羞恥を包んで、僅かに見せた赤い腰巻のなまめかしさ。(やはり女性の切腹姿は和服で赤い腰巻を見せるのが理想のようです。しかし、女性が双肌脱いで上半身を完全に露

出することは、実際には無いのではないでしようか。) 私はこの素晴らしい絵を見て、嬉しさの余りその夜殆ど眠れませんでした。ただ惜しいことに、向いあった別の女性の姿が三分の一しか画かれていません。あれが二人の



女性を完全に画いて、しかも彩色であったなら、どんなにか迫力があつたでしょう。将来切腹の図は色彩画に、フオートも血紅を用いて天然色で願いたいものです。よし、それが、どんなに血みどろで、凄絶な苦悶を表現していても、これは自殺の場面ですので、決して殺人に対する興味をよんで青少年を不良化させるような心配はありません。

数年前見かけた奇譚クラブに「切腹幻想」と題して、四人の女性の切腹の図がありましたが、片手で切るのはいかがと思います。やはり両手でなければ切れなく、まだ鮮血を肌から噴出させながら、嬉しげな顔の表情も矛盾していると思えました。裏窓の切腹図も殆どが片手切りですが、実際には切れないと思います。

切腹の起源は封建時代の初期でありまた封建的な武士道が切腹と深い関係にあったことも事実ですが、しかし切腹そのものは封建的

ではなく、封建制の廃棄された今日と雖も日本人の文化的遺産として受け継がれるべきものです。それは恰も、封建時代の美術や文学工芸品等が永久にその価値を失わないのと同様です。現代でも切腹に関するイメージは青少年の頭脳にも流れています。小学生でもテレビや映画で、切腹の場面を見る時は異常に興奮しているのが普通です。剣戟用の刀で腹を横一文字に引廻しているのを、よく見かけますし、先日中学生ぐらいの女の子が、お祭の晴衣姿で誰も見ていないと思ったのでしよう、帯の下際を着衣の上から刺身庖丁で切腹の型を演じていました。

新聞を見ても、昨年暮に老人夫婦の切腹心中があり、また二年位前でしたか二十才の青年が、村の池の端で猫いらずを呑んだ上、西洋剃刀でズボンの上際を深さ三センチ幅二十センチも見事にかき切り、池に投身して絶命しました。

本年（一九六〇年）五月、岸首相の反省を促して首相官邸前で短刀で割腹した禅宗の釈徹師もあり、某相撲の親方も切腹し損じて気絶したそうですし、去る九月には、八幡製鉄の工員で四十二才になる人が出刃庖丁で割腹し、更にノドを突いて死にました。その他

切腹に関する報導はしばしば見受けられます。

参考までに、私がソ連の牢獄にいた頃、捕われている泥棒、バクチ打ち等の間に切腹の奇習があるのを知って驚きました。もっとも日本人の場合と異って、死を求めるのではなく、単にガラスの破片やブリキ等で傷をつけ血を出して「負傷者」という名目で労役を逃れるためで、時には相当深い傷の場合にも、死ぬ気がないだけに悲愴感はありませんでした。ある女性が、剃刀で腹を左脇上から右脇下へ二十センチ、更に左脇下から右脇上へ二十センチ、十文字に切り腸が露出する程の深さでしたが、こんな物凄いハラキリも、死なない心算りだからできるので、勿論助かりましたが、「死」を前提にしていたら、とても彼等にはできないことです。

私が切腹は日本人にとっては自殺の手段であると説明して、型をやってみせたところ、彼等はふるえ上って驚いていました。

まだ書きたいことも多いのですが長くなりますので、次の便りにします。奇クの御発展を祈る。

連載第三次元小説

影^{かげ}

の

国^{くに}

(奴隷密売株式会社)

雪^{ゆき}俊^{とし}遙^{はるか}

刑場から釈放されても、多与子と良子には逃げて行く場所がなかった。家は革命治安委員会の本部に接收されてしまったし、主な親類は殆ど保守派の一派と目されて、殺されたり捕えられたりしてしまっていた。二人は素肌の上から、例の中島茂子に心服する洋服屋から贈られた、ピッチリしたナイロンの長ズロースに、ガウン風の羅のブラウス一枚という姿だったので、どこへ逃げても人々から好奇の視線を向けられた。

「お姉さんが変な遠慮なんかして、これで結構です、なんて云うくらいいけないのよ」

人気のない果樹園の方へ逃げて来た所で、良子がふくれっ面で不平を云った。

「御免なさい。私は只、あすこから家まで帰る途中、裸でさえなけ

ればいい、と思ってたのよ。家を接收されてることなんか夢中で、考えられもなかったのよ」

「アラ。お嬢様方じゃありませんか」

不意に声を掛けられて、二人は飛上る程驚いた。色白で目の大きいよく肥えた体格の良い娘が、背中に消毒液の噴霧器を背負って、ニコニコ笑いながら立っていた。

「まあ千代子さん。ここは貴女の家果樹園だったの」

「そうです。そんなことより、お嬢様達はそんな恰好で……。今日はお宅の家の人達のお仕置があるから一人でも多く見物に行く様になっていうお触れがあったので、どうなったことやらと思って案じて居りましたのに。その姿ではお仕置から逃げていらっしやったのね」

「少し違うけど、大体そんなところね」

「こんな所で愚図々々していたら革新党の入達に捕まって大変ですわ。私がかくまって差上げます。さあ早く。こちらへいらっしゃい」

千代子は素早く四辺を見廻して誰にもまだみつかつていないことを確かめ、自分の野良着を一切脱いで半分宛、姉妹に着せた。自分は素膚に近い姿になって逞ましいバラ色の身体に噴霧器を背負い直し、先に立って人目を憚りながら二人を案内するのだった。

「どうも有難う」

多与子は眼頭がジーンと熱くなって来た。

千代子は多与子と小学校の同級で親友だったが、家が貧しい農家なので、小学校を出るとすぐ、多与子の家のスレート工場へ働きに来る女工になった。セーラー服を着て女学校から帰って来た多与子は、窓のない暗い乾燥場で、文字通り眞黒になって働いている千代子の姿をよく見掛けたものだった。それだけではない。多与子の家の工場では、女工がノルマを果せなかった時。遅刻、早退、勤怠した時、不良品を作った時、機械・工具を破損、浪費した時、など様々な条件に応じて、工場内で幾種類もの折檻が行われていた。

まだ幼い千代子が、ノルマを果せない為、衣服を剥かれてバラ色の素肌にビッシリ鳥肌を立てて震えながら、豪雨の中で水槽に西洋瓦を一人で、せせと運んでいる姿や、中年女の職長にクレオソートに浸した筈でビシビシと太腿や臀を叩かれ、跪いてヒイヒイ泣いていた姿。或いは工場中の人間が見守る中で、肌着を全部外して、何日間もクレオソートとモルタルに浸しておいた囚着のパンツとスリーマーに着換え、肌にくっつきつわり附く囚人着の気色悪さに顔をしかめながら、工場の棟から棟へ曳廻されていた姿などが、走馬燈の様に記憶に蘇えって来た。

背はほんの少し低かったが、体格の良い多与子よりもう二廻り位肥り肉の肉体美で、生理的にも早熟だったのか十四位でもう乳も腰も丸々と発達し、薄赤味を帯びた眞白な肌は匂う様に肌目細かで美しかった。ムッチリ肥えて白い小樽の様な太腿を並べて土間に跪き、裸の背を男工の膝に押しつけられて両腕を後手に捻り上げられ、ひしひしと蜘蛛の巣の様に複雑な縄目を絡げられて行く過程を、勉強部屋の窓から良子と二人で、こっそりと息を詰め、顔を紅潮させて見詰めていたことが何回あっただろうか。

その頃と少しも変わらない、眞白な表皮の下から、ほのぼのと赤い血色の匂って来る、美しいバラ色をした剥き出しの二の腕や太腿。丸いムッチリした肩に喰い込む噴霧器のベルトを見ながら、多与子は、千代子の身体に一種の渴きを覚え、時ならぬ自分の心の淫らさに一人で赤くなって、うろたえていた。

そんな多与子の内心の動揺など何も知らぬ千代子は、子供の時から少しも変らない無邪気な人の善さを満面に漲らせて、何回も多与子の方を振り返り、怖くないかと、疲れてないかと、空腹ではないかなどと、うるさい位姉妹の身体を気遣って呉れるのだった。私の血の一滴々々には、千代子さんの様な善良な庶民を虐げつくさなければ気が済まない、保守党気質とでも云うべきものがこもっている、こんな状態の時にまで千代子さんの苦痛を見て愉んでみたいという秘かな希望を抱いているのだわ。私みたいな魂の底まで腐った女は、あの刑場でお腹にブスリと焼串を突き刺されて、多くの人を楽しませながら死んでいるべきだったのかもしれない。中島茂子將軍は確かに立派な理想の持主だけど、その行為は三田革命治安委員の云った通りの誤りの道を歩み続けているのかもしれないわ。

そんな懷疑の淵に沈みながらも、一方では多与子の思いは、裸で虐め抜かれていた千代子の記憶を生々しく想起し、そんな境遇に育ちながらも猶、善意の塊の様な心を失わないでいる千代子に一層の愛着を覚えた。千代子への愛情と、その折檻の記憶とが互に作用しあいながら、多与子の心に不思議な心の昂ぶりを起させた。

千代子の家は清水の湧き出る丘の南面の窪地にあった。多与子達はその日からそこにかくまわれた。千代子は時々余り遠くない市街地へ行って情報を掴んで来た。そうして多与子は、芳江達が三田央子の手ですぐに又捕えられたこと。彼女等は小林幹子の家で央子の拷問を受けていること。幹子も自宅近くに舞戻って又捕えられたこと。央子は又、多与子姉妹の行方を厳しく追求し、捕まえたなら今度は眞赤に焼いた鉄の衣裳を着せ、鉄の靴をはかせて、死ぬまで鉄火踊りを踊りまくらせてやると放言している事などを知った。

「まあ。中島茂子將軍も女権党なら、あの三田という人も女権党なんだから、本当に主義なんているものは、人間次第でどうにでも変った解釈が成り立つものなのね」

多与子は身震いして云った。

「お嬢様。よろしければ、どうぞいつまでも千代子の家にかくれていらっしやって下さい」

「有難う千代子さん。でもこんなことをして、貴女に御迷惑をお掛けするんじゃないかと、そればかりがいつも気懸りだわ」

多与子の不安そうな顔を見返して、千代子は明るく無邪気に、無言で微笑していた。

千代子の家族は年老った母と不具の姉、無口で、いるのかいないのかも解らない様な夫の四人暮らしだった。少しばかりの痩せた田畠

を四人が黙々として手入れしていた。多与子は、自分達姉妹が何一つ役に立たず、逆に心理的にも経済的にも一家の人達の大変な負担となっていることを、痛いほど心に感じ、済まなく思っていた。追求が緩和されるまでは仕方がないわ。赤熱した鉄の靴をはかされて、衆人環視の中で鞭打たれながら、死ぬまで鉄火踊りをさせられるかもしれない瀬戸際なんですもの。

しかし千代子達は多与子以上に済まなかって呉れていた。かくれがに当てた納屋の二階の屋根裏部屋に三度々々の食事を搬んで来る度に、

「ほんとに、とてもお嬢様方のお口に合いそうもない代物ばかりで、申訳ありませんわ」

と恐縮していた。多与子は生れてから、千代子やその家族ほど善意に満ちた人々に遇った事がない様に思った。一夜にして三界に家も両親もない孤独の境遇に落ち、いつ央子に捕えられて最も恥しい姿で責められるか解らない不安におびえながら送る日々の中で、その善意は鮮烈に、感じ易い娘心を揺り動かしたのだった。

裏山の雑木林の枯枝を、その冬の最初の木枯しがピュー、ピューと厳しい音を立てて吹抜けて行った日の夜、千代子の家に二人の訪問客があった。千代子は夕方から自転車で市街地の方へ用足しに行っていた。多与子姉妹は納屋の屋根裏ですっぱりと枯葉にくるまって、抱き合って互の身体を互の体温で温め合っていた。

訪問客は黒いハットに黒背広、黒靴、という黒ずくめの服装で、酷く周囲を気づかっていた。

「ホホウ。此の娘と此の娘ですな。念の為お聞きしますが、間違いはありませんな」

眼の鋭い精悍な中年男の方が、ポケットから小さく畳んだ紙片を取出して大きく広げ、その中の一点を指さして、おとなしい婿に強い視線を注いだ。彼は黙って深く肯いた。

紙片は治安委員会発行の公報で、行方不明の反動分子を指名手配した特集号である。男の指さした箇所には、多与子と良子を前後、横から写した手配写真が載っていた。それは二人が拘禁された直後に撮られていたものだった。その横には二人の旧住所、氏名、年令、学校学年学級名、席次、生年月日はおろか、主要な身体特徴に至るまで、あらゆる事が詳しく記してあった。多与子のヒップに四つの黒子がある事や、良子の腹部に盲腸手術の小さな切傷の跡がある事まで、その大ききまでが克明に測られて記載されていた。誰かが洋服を着て街を歩いている女を怪しいと見たら、強制的に彼女の衣服を脱して、その身体の細部一切を公報と照し合わせれば良い様に出ていた。

自分の身体のあらゆる部分の特徴が、こと細かに印刷されて世上に流布されているなどとは露知らず、多与子は薬の中で、革命前の暖房に少しも不自由しなかった豪奢な生活を懐かしんでいた。

不意に彼女は、納屋の屋根裏に梯子が掛けられ、誰かが足音を忍ばせて上って来るらしい、かすかな軌みを聞いて、胸を騒がせた。梯子が掛けられた時は千代子が来るのだろうと余り気にも留めていなかった。しかし千代子なら決して足音を忍ばせて上って来たりはしない筈だ。

荒々しく薬がはね飛ばされ。驚いて起上りかけた肩を掴まれて捻じ伏せられた。

老人と不具の姉は梯子を上れないので、下に立ったまま上を見上

げていた。その頭上で、粗板を打ちつけただけの屋根裏部屋の床がギイ、ギイ、キシッ、キシッと軌んで鳴り続けた。押えつけられた多与子と良子が、後手に捻じ上げられ、引繰返されたり起されたり、座らされたり寝かされたりしながら、ギリギリと荒縄で嚴重に縛り上げられている間、床の軌みは激しかった。物音がやっと一段落すると、二人の身体は荒縄の先にぶら下って、ゆらゆらと屋根裏から吊下されて来た。二人ともすっかり衣服を剥ぎとられ、黒いパンティと靴下で厳しく猿轡されて声も立てられないでいた。二人は母屋の居間に連れて来られ、明るい電光の下で公報に照し合わされた。多与子の白い身体に鮮やかに浮出た四つの黒子も、良子の生毛の柔かなお腹に光る白い切傷の跡も、ノギスを当てられて詳細に大きさを測られた。そればかりか、耳朶の厚さ、鼻梁の幅と高さ、鼻孔の直径と深さ、手足の指の長さ、爪の大きさ、臍の深さや背筋の溝の各部の深さと幅、果ては乳首と乳首との距離や、二人の身体のあらゆる隅々までの点と線と面とが測量され、計算され、記録された。様々な姿勢を取らされて、その調査を受ける羞しさとやりきれない屈辱感。冷たく細いノギスの先が肌にかすかに触れ続けるくすぐったさ。それに耐えねばならぬ苦痛、良家に育った二人には、まるで生れて始めて拷問に掛けられている思いだった。調査が漸くすっかり終って、男達のノートに二人の身体の明細が詳しく数字の形で表現され終えた時には、二人の少女は炉端の板の間に仰向けとなつて、口を半開きにし、上気しきった顔で、ぜいぜいと喘ぎながらグタツとなつてしまっていた。手足はグンニヤリして力がなかった。

男達はメモをポケットに蔵い、大きな黒の革トランクを座敷の中



で開いた。多与子も良子も改めて身体を海老に折曲げられ、背骨がミシミシ鳴るほど烈しい縄目を掛けられて、背中と足を一緒にしっかりと括られた。別々のトランクの中に入れられて蓋をされた。四周が眞暗になって、トランクの外でピインと錠の掛る音がした。多与子は千代子のはき古した汗臭い靴下で、すっかり鼻まで覆われて猿

轡されていたが、その鼻にも、眞新しい革靴の動物臭い異臭がブン匂って来た。汗臭い靴下と、新しい革の悪臭が一緒くたになって彼女の口と鼻を襲う。海老のように縛られた全身の酷痛。荒蕪繩の素肌に食込む痛さがそれに加わって、全く地獄に揉まれ漂う思いだった。

トランクの中で海老に縛られて耐えている時間は、気が狂いそうに長かった。苦痛が極限にまで達すると、彼女はふっと、惨めさの極致の状態の中にいる自分がいとほしくてならなくなった。責苦が悦びである様な倒錯した感覚に、ふと落込んだりした。その癖、折曲げられた多与子の柔軟な身体は、燃え立つ様な眞紅に彩られ、全身から冷たい膏汗の玉を噴出してゐるのだった。

その頃、トランクを自動車に無難作に積込んで、眼の鋭い精悍な男が、助手台のもう一人の黒ずくめに話しかけていた。

「あの家の連中もモサツとしている様で仲々頭のはしっこい連中だなあ。これだけの上玉を革命治安委員会などに渡して、みすみす処刑させちゃあ勿体ないし、第一、金にならないからなあ。と云って、革命政府の下でお尋ね者の娘達を奴隷に売る事も、使う事も出来ないし、モグリの奴隷商人の俺達に売飛ばして、革命などどこ吹く風の他地区で売物にして貰おうなんて、仲々考えたもんさね」

「政府公認の奴隷商人と違って、こちらモグリの人買いだから、今迄随分危い綱渡りの連続だったが、近頃みてえに首府の町全体が革命地区と自由地区に別れて大混乱していると、全く商売もやりよくてこたえられねえな。掘出物はべら棒な安値で手に入る。商売仇の公営奴隷市場は大半、開店休業だし、革命地区にも自由地区にも、まともに市民として生きていられなくなった人間が溢れている半面。奴隷が払底して困っている階級。急激に成上って、上等の奴隷を手に入れたがっている家族が滅法増えているからな。革命政府にしろ保守党政府にしろ、我々モグリの人買いを目の仇にしてやがるけど、本当に人間の階層整理に貢献しているのは俺達が一番だって事が解らねえんだから、仕様のねえもんだな」

「まあ大義名分などは、どうでもいいやな。俺達は只せつせと人を買いい人を売って、もうけてりゃいいんだ。此の混乱が静まったら、又官憲の目を掠めてこそ、こそ商売しなきゃならなくなる俺達さ。今の内にもうけられるだけは、もうけておこうぜ」

車は深い森林の中を縫って走る小径の上を疾走し、やがて新町地区革命治安委員会治下の地域を走り抜けて遠廻りして、保守党政府の政治がまだ行われている所謂、自由地区の首都の町へ入って行った。

トランクに詰められた多与子は、いつか失心していた。正気に戻った時、彼女は犬の首輪をはめられて、地下室の檻の中に入れられていた。檻は小さくて広い地下室に幾つも並べられてあった。どの檻にも彼女と同じ姿の女が一人宛、詰められていた。

それは都心に近い小さなビルの地下室だった。ビルの入口には、

「東都観光株式会社」という看板が出ていた。スツキリした背広姿の男が会社に入ってきて来る。名刺を受付に渡すと東都観光の営業マンが小腰をかがめて迎えに出る。客は小さく仕切った応接室の一つに通され、カタログを渡されて商談に入る。壁には大きな観光地図が貼られ、書架には様々な種類の旅行案内書が並んでいる。誰が見ても、その二人は個人の週末旅行か、会社の慰安旅行のプログラムを相談していると思えない。実際、多数の他の応接室ではそうなのだ。しかし此の部屋だけは少し違う任務を持っていた。

「森田多与子。此の娘がいいなあ。本当に元区会議長の令嬢なのかね。それにしても随分、値が安価い様じゃないか」

「お疑いなら、これを見て頂きましょう」

客の前に新町地区革命治安委員会発行の手配書が差出された。客はその写真と、ルーズリーフになっているカタログの多与子の写真を比べ、熱心に身体特徴の詳細な記載事項を読み比べていた。その様子を暫く観察していた営業マンは、にんまりとほくそ笑んで、卓上のブザーを客に気附かれぬ様に、そっと二十八回押した。ブザーの音は室内には少しも聞えない様になっていた。そのコードは床を潜って地下室の商品管理事務所に繋がっていた。倉庫係の腕章を附けた若い女事務員がブザーの鳴動回数をキャッチして、28号と書いた木札の附いた鍵を壁から外した。

低く鳴動するブザーの音を、首輪で繋がれキリキリと後手に縛り上げられて、檻の中に跪いたまま多与子は不安な思いで聞いた。彼女はまだ自分の商品番号が28号である事を知らなかった。ブザーの低い音が湿った地下室の壁に反響するのを聞くのは、不可解なりに不気味で不吉な予感を、奴隷達の心の底に吹き込んだ。

女事務員が檻の前に立寄り、錠に鍵を差込んで、カチリ、カチリと数を区切って廻し始めた。多与子はハッと顔を上げた。頭から血が引いた。隣の檻で良子が心配そうに此方を見ている。その首にも犬の首輪が嵌まっていた。ふくよかな咽喉が締めつけられる様だ。女事務員が中に入ってきた。跪いた多与子のすぐ目の前に立って、首輪を檻の鉄棒に繋ぐ鎖の先を外し始めた。倉庫係らしく薄いデニムのチャコール・グレーの六分パンツの軽装で、陽に当らぬもやしの様に弱々しい感じの白い素足が新鮮だった。こんな痛々しい程チヤミングな足こそ太い鎖で縛り上げてみたい。目前にどんな運命が待構えているかもしれぬ不安におびえながらも、多与子は一瞬そんな呑気な事を考えた。

鉄格子から外した鎖の端を掴んで、倉庫係は手に持った短い竹の鞭を、多与子の逞ましく肉附いた柔かな太腿にピシリと打下した。

「28号。外へ出なさい」

首輪鎖が力一杯グイと曳張られた。鞭の痛さが、初めて聞く28という番号が、説明抜きで彼女自身である事を教えて呉れた。多与子は顔をしかめ、首輪を引かれ引かれ、立上った。ピシリ、ピシリと鞭の追打ちが続いた。そうして彼女は商品倉庫の入口にある小部屋に引立てられた。部屋の入口に、下見室、と書いた小さな看板が出ていた。

ピシリッ。

「お停りなさい」

ピシリッ。

「お座り」

痛さと情なさ、べそを掻きながら彼女は下見室のリノリウム

の上に再び跪いた。倉庫係がロッカーをあけて、真新しい純白の手拭と、紅白だんだら縞の、少女の小指程の太さの紐縄を一束、取出した。

営業マンは細心に客の顔色を窺っていた。上気した様な顔に僅かながら読み飽きた表情が現れると、間髪を入れず商談を一步進めて行った。

「如何でございましょう。地下室の方で商品を一寸御覧頂けませんでしょうか」

客は暗示にかかった様に腰を浮かせた。抜目のない営業係はもうドアの所に立ち、腰をかがめて、手を差し延べていた。

「さあ、どうぞ、どうぞ、こちらへ」

地下室へ通する薄暗い階段を降りながら、営業係は客の耳許で、わざと声を殺して囁く。

「とにかく新町区の自宅に帰れば、たちどころに灼熱した鉄の衣裳を着せられて、死ぬまで鉄火踊りを踊らなければならない娘ですからねえ。どんなに虐め抜いたって、良心に咎める必要はありませんよ。それに奴隷籍のない密売奴隷の常で、散々お騒りになった為に誤って責殺してしまっても、人目につかぬ様に処分してさえしまえば、政府に届けて略式裁判を受ける面倒が要らないんだから便利ですよ。とにかく妙齡の美女を虐め殺す愉しさを味わいたければ、かりに、非合法の危険を冒してまで私共の奴隷ばかりをお買上げになる紳士淑女さえ、跡を絶たない御時世ですからねえ」

此の言葉は客の或る種の好奇心にぐざりと突き刺さる程の強い刺激を与えた様だった。客は暗い階段の一点に足を停めて、ほう、と思わず感嘆の声をあげた。

下見室では丁度、倉庫係が多与子を縛り直し終えた所だった。多与子は目に一杯、涙を溜めて跪いたまま、倉庫係の鞭の下でポーズを取らされていた。純白の手拭が顎のすぐ上から鼻孔のすぐ下までの顔面を覆って、項の上で固くりボン結びに縛られていた。紅白だんだら縞の細縄が、項の附根からVの字に胸許へかかり、乳の上と下にごつい程大きい縄玉を作られていた。首からのVの字は一重縄



で、胸許の縄玉と臍上の縄玉の間は二重縄。それから背中までは、腹部や腰部のなだらから起伏を裂いて、だんだら縞の紐が三本、キツチリ密着していた。紅白縄の為に文字通り『小股の切れ上った』姿の悩ましさ。

「お客様に後姿もお見せ下さい」

営業係が催促すると、倉庫係が壁の釘を押した。猿轡の顔を斜め横に向けて、心持、上体をくの字に曲げ、魅力的なポーズをつけられたまま、多与子の膝をついた床の部分が、緩りと廻転し始めた。驚いてポーズを崩しかけた少女の豊かに緊った腹にピシッと又、鞭が飛んだ。

「そのままの姿勢でいなさい」

後姿も縦縄が、きつく喰込んでいた。背中で結んだ縄が、二の腕の附根の下の方の筋肉の窪みから軽い丸味を作って乳房上縁の輪廓に沿って喰い込み、胸許の縄玉に結び込められている。縄玉で一旦ほどけぬ様に結ばれてから再び反対乳の上縁を、前の縄の内側に密着して、今度は二の腕には掛らずに、柔かな乳脇の肉を噛んで、腕の内側から直接、背中にかかけられ、背中の縄玉から反転して、二の腕の中央部に一卷、蛇の様に絡みつき、背中へ戻ってから、腕ごと、胸部を水平に縛り上げて、臍上の縄玉に結び込まれていた。今度の縄が二の腕に掛る部分は、二の腕を一卷締めた前

の縄目の五分か一寸下なので、密接した二つのだんだら紐に締め上げられて、その間の白い肉が烈しく、こぶの様に盛り上がり、二つの縄目に締め上げられる痛さに、その部分の腕肉が悲鳴を上げている様な痛々しさだ。

無論これだけの縄目を確認される間に、床上に跪いた多与子は、五回も六回も回転していた。倉庫係が別の釘を押して回転を止めると、営業係は用意のノギスと巻尺と、手配書とカタログを客の前に差出した。

「どうぞ疑問の氷解なさるまで、存分に此の商品のあらゆる部分品のサイズをお計り下さい。只の一箇所でも此の手配書やカタログの数字と合致しない部分がありましたら、お詫びの印に、あれなる倉庫係を御気の済むまで成敗して頂いて結構です」

倉庫係は白い顔を眞赤にして、恥かしそうに下を向いた。多与子は一瞬いい気味だわと思ったが、次の瞬間から、あらゆる姿勢を取らされて、冷たいノギスと金属製のスケールを身体に当てられて、全身到る処を調べられるあの羞しさと苦痛の繰返しが始まって、彼女の心を次第に無我夢中の状態に落し込み始めたのだった。

少女の身体を測量する作業は三十分余り続いた。測量技師は満足しきった顔で、自身で測量した此の美しい自然を購買する決意を告げた。倉庫係は多与子を俯伏せに寝かせ、首と後手に縛られている両手首に鉄の拘束具を嵌めて、床に固定されている金具に噛合わせた。

「両脚を眞直伸ばして行儀よくお揃えなさい」

命令と同時に、鞭打の代りに太腿の後肉をキューツと抓られて、多与子は厳しい猿轡の奥で思わず咽喉を鳴らした。命令通りにする

と豊満な太腿と膝と足首とに眞鍮の箍をキッカリと嵌め込まれた。夫々の箍には二本の鎖が附いていて、後方の柱に鎖をピンと伸して固定された。

「何が始まるんですか」

客は目を丸くして尋ねた。

「人体用の特殊な腐蝕剤を使って28号の肌に奴隷番号を刻印するのです。腐蝕剤が作用する時、商品が非常に苦しみますので、ああやって、首と足の平、以外は絶対に動かせない様にしておく必要がありますのです」

倉庫係がアルコールを浸した脱脂綿で、多与子の腰部のなだらかに起伏した部分の肌を丁寧にこすった。腐蝕剤を泌み込ませた薄青いベビーネルの布にゴム印を二つ当てて、それを一つ宛、だんだら縄の両側の白い素肌に強く押附けた。なめらかにムッチリした腰の肌が、ゴム印を押された部分だけ、痛々しい程深く窪んだ。

皮膚と脂肪肉が腐蝕する異臭が下見室に濃くたちこめた。多与子はじっとり汗をにじませ、拘束具と鎖で全身を完全に固定されたまま、俯伏せの首と足の平だけを烈しく上下させた。猿轡の下から、ウ、ウ、ウ、と耐えきれぬ呻き声が、かすかに洩れた。ゴム印を捺された部分に、美しい淡いコバルト・ブルーの文字が、少女の初々しい皮膚を腐蝕して、くっきりと現れて来た。

トイテ。10785。画西。格式。

記号はそう読めた。

肌と肉を腐蝕される薬品痛にまだ苦しんでいる多与子の俯伏せの姿をそこに残して、客は営業係と連立って応接室へ戻った。

「では、これをお持ち下さい。先程、御説明申上げました通り、函

西地方の公立奴隷市場では、扱った奴隷の腰に全部、登録番号と市場番号を焼き付けて居ります。貴方の入手された奴隷は元新町区会議長、森田茂兵衛の娘ではなく、貴方が函西地方に旅行された時にお買上げになった、函西出身の奴隷、森田多与子ですから、どうぞお忘れなく。それさえ覚えて居られれば、貴方はあの商品のお蔭で奴隷所有法違反の罪に問われる怖れは絶対ありませんよ」

「しかし、若し官憲の手で函西十二号奴隷市場の奴隷籍を調べられたら……」

「御安心下さい。あの近辺は今度の新町地区のクーデターに呼応した革新党の叛乱ですっかり焼け、奴隷籍原簿は一枚残らず焼失しました。私共の会社の函西支社が確実な筋を辿って調査した事です。決して間違いは御座居ません」

営業係に送られて客が東都観光ビルを出ると、玄関の車寄せに一台の黒塗りの高級車が停っていた。

「御契約有難うございます。私共の車でお客様を御自宅まで送らせて頂きます」

いつのまにかバスガイドの制服に着換えた先程の倉庫係が、優しい微笑を堪えて客を車内に送り込んだ。シートの下には大きな細長い木箱が無難作に置かれていた。

「お正月の全国一周旅行を御契約下さった御礼の印に、ほんの詰らぬ粗品を一つ、お客様と御一緒に届けさせて頂きます」

倉庫係は涼しい顔でそう云って、ニコリ微笑んだ。客は木箱の中に新巻鮭の様に嚴重に括り上げられて、もみがらのパッキングに肌をチクリ、チクリと刺されながら詰められている多与子の姿勢と表情を想像して、涎を垂らさんばかりに相好を崩していた。

荒縄で完璧に縛られている木箱の表には、

御契約御礼。

先崎 重 一 様。

御贈与品。トレケ。一〇七八五。

と墨書してあるのだった。

客の車を見送った営業係と倉庫係が、アベックの様に肩を並べて本社玄関へ戻って来ると、地下室に通ずる階段の踊場の所に、雪の様に白い薄地のツーピースをピタリと身に附けた、ほっそりした長身美人が立停って、二人を待っていた。

「あら。社長のお嬢さんよ」

倉庫係が半ば緊張した顔に、羨望と反感で目を光らせながら近附いて、お辞儀すると、

「福島さん。此の間の私のお馬、あんなに頑丈な身体をしていた癖にもう動けなくなってしまうたのよ。もっと、こう、遅ましい素晴らしいお馬は入荷していないかしら」

「そうでございますね。今の所まだ、飛抜けて凄いグラマーっていうのが入荷してないでございますよ」

「パパに聞いたら、砲丸投げの松岡靖子選手が、都心での女権党の暴動に参加して捕って、今警察で取調べを受けているので、係官に贈賄して身柄を横流しして貰う事を交渉中だって云うじゃないの。素敵だわ。あんな遅ましい人を私の愛馬にしてみたいわ」

「さあ。私は只の倉庫係ですから、そんな会社の最高機密に関する事は存じませんので。今入荷している限りでは、グラマーと云ってもこんな所でございましょう」

二人が足を停めたのは良子の檻の前だった。ハッとしてうつむいた良子の耳に、愉快そうな令嬢の明るい大声が飛込んで来た。

「大したグラマーでもないけれど、若いから保ちは良さそうね。ここ当分の用には足りるかもしれないわ。檻から曳出して私の足許に四つん這いしてみて頂戴」

(未完)

ある告白から

奇クが運んで来た女

近 藤

左 脇 不 二 夫・画

「あのウ」

その婦人は、私の瞳を見つめるように一寸つぶらな眼を睜って、淑やかに小腰を屈め、そっと囁いた。

「近藤先生でいらっしゃるやいません？」

はたから見れば、道を尋ねられた程の何気ないポーズが私にとっては、百雷の音響を伴った衝撃だった。一瞬、全身の硬直を感じたし、頬の蒼ざめるのが自覚できる位だった私は黙っていた。

「近藤先生でしょ？奇譚クラブの」

私に尚黙ったままだった。然し、一瞬虚をつかれた不意打の狼狽から立ち直って、私のいつもの狡さが戻っていて、私は婦人の細心の注意を払う挙措や囁やきに応待する余裕を持っていた。

私は先生と呼ばれる程偉くはないし、KKを愛してはいるがKK執筆陣のレギュラーでもない。だが奇譚クラブの近藤と名指されては人違いとも思えず、正に私への用事があると思われた。

丁度その時、仲間と呼ばれたので、私が手

を挙げて応えようと、婦人はそっと云った。

「近藤先生でいらっしゃるやいなくても結構ですの。聞いて頂きたいお話がありますのよ。一度だけゆっくりお逢い下さいません？」

咄嗟に私は手帳を取出し、ページを破ってそれに横浜の友人宅の電話番号を書いた。

「明後日の晩七時キツカリにここへ電話して下さい。いいですね？」

「はい」

「それで、失礼ですが貴女のお名前は？」

婦人はにっこりと実に美しい微笑を見せて

云った。

「古川裕子さんを御存知でしょ？私は古川さんが大好きで、あなたにお逢いする気になりましたのよ。これだけ申し上げたら、後はお聞きにならずに赦して下さいますでしょ？」

婦人と私はさり気ない風で別れた。然し、私はその婦人を何処かで見ているように思ひ相当の親しみを感じていたのを識った。

丸顔で色の白い人だ。若々しいが眼尻の小皺の具合では三十四、五から先に見える。切れ長の眼が細く、瞳をパッチリ見開くと額に皺が寄るのは魅力的な仕草だった。背の高さは五尺一寸位あるかも知れない。髪の毛の形や化粧も品良く、襟足が、ひどく清潔だった。和服や帯や羽織やショールなど、何という品か分らないけれども、地味な中に明るい色気があって、その落着き



が却って彼女の若々しさを強調していた。頬の辺りや全体から受ける感じはふっくらした「女」であったが、肩や腰の形から肉の引締った「美」が窺われる。

翌々日、横浜の友人宅を訪ねた私は電話器

の近くに陣取って、晩の七時の時報を聞くとすぐ彼女からの電話を受けた。私が横浜の友人宅を利用したのは用心のためであるから、私は言葉麁く、次の待合場所を指示した。新宿や渋谷のような盛り場では逆に彼女から利用されないとも限らない。やはり勝手知った地元が良いと思ひ、お茶の水へ呼出すことにした。

幾ら考えても、私は婦人が何者で、何処で逢った人なのか思いつかない。それに最も重大なことは、婦人が何故私を近藤と知ったのかと云う疑問だ。私を近藤と名指したのは一種の推測としても、少くとも私と奇譚クラブとの関係位は知っていなければ、ああも見事な落着いた演技ができる訳のものじゃない。

彼女は指定した時刻の少し前にお茶の水駅へ現われた。暫らく待って、駅の時計と自分の腕時計とを較べたりしたあと、彼女は伝言板に私の次の

指令を発見して、何気ない風を装って歩き出した。それは彼女の仲間か何かが、見え隠れにでも彼女を尾行していはいまいかという危惧に発した配慮だから、私は彼女を離れて監視していた。

安全を見届け、私はタクシーを拾って追いかけた。近づく車の音に何気なく振向いた彼女は、車中に私を認めると「アラッ」と声を上げ、不審げに眼を瞠った。

まるで誘拐のスリルだった。私はシートで腰を浮かしただけで、彼女の手首を掴んで有無を云わせず車の中へ引込んだ。体のこなしに一瞬の抵抗があった。

私達は有楽町の雑踏へ出た。もし彼女に尾行者がいたとしたら、お茶の水とは目と鼻の先の有楽町の人混みが恰好の隠れ場所と思えたからだ。アベックの語らいの場所になって、いるティールームでは隣りの席に気兼ねなかった。

「随分手のこんだ事をなさるのネ。」

彼女は幾分咎めるような口調で、然し、ぐっと打融けた声音で云った。私は黙ったまま彼女の魅力的な口許をみつめていた。

「あなたに御迷惑などおかけしませんワ。誰もつけてなんかいませんわヨ。私、独りぼっちなんですもん」

酷く少女っぽい稚さがあった。

「お望みなら、私をこのまま何処かへ連れてって、閉じ込めてしまってもいいワ。私、あなたにお声をかけた時から、それだけの覚悟はできていますから」

得体の知れない女性を私の住居へは連れて行けない。私にも社会人としての生活があるからだ。と云って、このまま彼女を手放すには、彼女は余りにも魅力があり過ぎた。

ふと私は或る場所を思いついた。研究室の関係で知り得た書庫である。書庫といっても昔は衣料問屋の倉庫だったとかで、防火壁の堅固な建物であり、資料の保存に当てられていた。少し離れて倉庫番の老夫婦の住居があり、極く稀に熱心な研究者が訪れて泊り込みの調査をする以外、静かな存在なのだ。

私達は躊躇せずに車を走らせた。地理を憶えられてはとの用心から、私が眼を閉じるように云うと、彼女は素直に従った。前を向いたままの彼女を私の方に向かせようとして肩を抑えたら、はすみで彼女は私の胸に顔を伏せ、甘い髪と肌の匂いが私を捉えた。私は、すぐ放しては失礼な気がして、彼女がじっと身を堅くしているままに、肩を抱いていた。運転手が無闇にカーヴを切り、チェツと舌打

するのを聞いて苦笑した。

間もなく二人きりで向き合っていた。

「僕が今、何を知りたいか分りますか？」

「私が誰かということ？」

「うん、それもありますネ」

「じゃ、どうしてあなたを近藤さんと知ったかということかしら？」

私は深く肯いた。実際、私の心中は不穏である。魅力的な女性を知ることが満更でもないが、然し、私の秘密が知られることは不快であった。

彼女は微笑を浮かべて優しく云う。

「私はお察しのことだと思いますけど、ひどいマゾヒストなんです。結婚して、夫が私を今のような女に育ててくれました。挙句の果、独りぼっちにされて、私は夫を恨むよりも慌てました。どうにも生きる見当がつかなくなりました。その救いが奇譚クラブです。この本を、私は否応なしに夫を通して知りました。そして忘れもしません。二十八年の十二月号を拝見して呆れるやら驚ろくやら、それ以来凄いいファンになってしまったのです。その奇譚クラブのお蔭で私は生きる道を知ったように思いました。」

その救いが奇譚クラブです。この本を、私は

今年の夏の初め頃、私は奇譚クラブの六月号を見てドキッとしたのです。夫にも内緒にしていた私の秘密のお友達の正体が、あなただと分って、私はまたあるだけの旧号を読み返しました。

古川裕子さんに好意を寄せていらっしゃる眞面目そうな方という印象しかなかったあなたが、私のお友達とお知り合いだなって

「えっ！」

私は耳を疑った。

「亡くなられた濤原さんですワ。それに、高沢さん、今はお嫁にいらっしゃって鈴木さんとおっしゃるのですけど」

私は何も云えなかった。

「私、早速、鈴木さんをお訪ねしました。鈴木さんも私と同じ性格なのに、あの方は御主人に可愛がられて羨ましいの。鈴木さんもあれ程詳しいのは、あなただけの筈だとおっしゃいました。そして教えて頂いたことを手加かりに私はあなたを探しました。

何故だか分りません。唯、どうしてもあなたを見つけたかったの。」

話は例の『週刊スリラー』に及んだ。私のことを熱心な投稿者といって下さったのは有難いが、それだけでなく東京の世田ヶ谷区太

子堂居住の某大学院学生だと紹介してあったので迷ったと云う。私自身は太子堂という土地を全く知らないが、駒沢球場のできる以前の駒沢一帯は懐かしい思い出があるし、目黒区の隣接地域や世田ヶ谷区でも祖師ヶ谷や鳥山は忘れ難い。そう思っていたから彼女はやはり近藤一が私以外ではないだろうと思ったのだそうだ。

私を見つけ出しても、お互いの生活の平和を守るために、彼女は私に声をかける最適な機会を求めている。それで私と彼女とは道すがら屢々顔を合わせ、私の好みにマッチした魅力を備える女性として彼女は私の胸に残っていたのであった。

頬から顎にかけて、ふっくらと肉づき豊かで、而もたるみは全く無い。やや受け口で、唇は軽く開き加減、色の白い肌に健康的な艶があつて、華やかで極めて肉感的なのだ。

立ったまま見下す私の足許に、彼女はきちんと膝を揃えて坐った。私は彼女の上半身をそのまま背後へ押倒す。

「ウム、ムムッ！」

両の腕はしっかりと括り合わされて背の下にあり、仰向けに反り返って突出した胸の隆起

を強調するように、その紐は廻されている。

眼を閉じて、下唇を噛み、何かを味わうような表情に、鼻からの呼吸だけが殊に烈しい。まるで盛上った胸が荒々しく波を打ち、上体が捻れて悶える。

起き直ろうというのだろうか。両手が不由である以上、頭と肩と下半身のバネだけで起きるのだが、それには第一に彼女自身の体重が障害になる、尻の下に敷かれた足首をはずし、膝を開かなければそれはできないからだ。文字通り僅か一本の指先が彼女の額を意地悪く抑えると、白く柔らかで温かな生き物の動きを殆ど封じてしまうことができる。

私は、突然とび込んで来た、この妖しい魔女の魅力に惹かれて、彼女を生まれたままの姿にしてみたい欲求に駆られた。薄く柔かい衣類を通して感じた彼女の肩は、まるで肉づいて滑らかだった。

私は、しかし、彼女を赤裸な姿にはしなかった。というより、できなかったのだ。それは何か大きな力が私の意志にのしかかっていたためだけれど、その正体は分らない。理性などというものは最早無かった。現に私の手は彼女の肌着にかかり、むき出しになった白くふくよかな肌の感触を掌の皮膚を通して味

わっていたのだから。

長幼の序というようなものが潜在的に作用したのかも知れない。彼女は一見した容姿も落着いた物腰も、私より年長であることを匂わせていたし、実際に亡くなった澤原の姉を知っている以上は、それだけの隔りがあって自然である。小柄で、顔立ちにあどけなさを残す人なので、年令より遙かに若く、可愛らしいとさえ感じるが、姉の友達というだけのこと妙に心の重圧になるのだ。

浮気の限界がそこに在るのかも知れない。私は現在紛れもない独身者である。しかし、私には愛すべき女性があり、私は近い将来に於て必らず彼女に結婚を申込もうと決意している。先方はどうか知らないが、私の彼女に対する真心はいじらしい程で、表面又ケ又ケと横暴に振舞うだけに内心では彼女以外の女性との間の越えてはならない一線を強く意識する。妖しい魔女の白い幻影は、私の愛しい人よりも女体として美形かも知れない。否、確かに多くの点で愛人に欠けているものを豊かに備えていた。しかも、悦虐の性において魔女は愛人よりも遙かに私を歡ばせ、私にふさわしい存在になってくれるかも知れないが、それはとにかく浮気なのだ、と、私は思

う。男の恋の意地が、厳しい枷になったのだろうか。

更に考えると、私が持続けて来た古川裕子への愛情が大きく働いているようにも思う。私がこの女性を身も心も愛し抜いて結ばれるのではない限り、それは古川裕子の冒瀆につながることになりそうだったから。

彼女は小柄な割に肥り肉のせいでもあるまいが、洋服より和服を好み、また着こなしも上手だった。体の感じとしては、以前誌上を飾った藤田節子嬢に似ているように思う。初めて声をかけられた日のシックな和服姿は今以て忘れられない。

だが、私の囚われ人になった日の彼女は、洋装だった。

「着物は小さい時から人一倍好きでしたワ。今でも勿論。鑑賞用には絶好でしょうし、独りでマゾヒズムを愉しむには適当でしょう。ひどく非活動的で自由を奪われるのに、見た所はとても美しいですものネ。紐だとか帯だとか沢山に纏う訳だし、一本々々自分で自分の体を結わく感じは、"縛られる"ことに通じても不思議じゃないですよ。」

女の人で着物が好きな人は、大概感受性も

空想力も強くて、何かの拍子にマゾヒズムの芽をふき出す人じゃないかしら。」

私は彼女の魅力的な唇の動きを楽しんでいた。

「私ネ、主人が亡くなってから殆ど和服で通しています。和服だと何かこう主人に捕えられた感じで、いつでも安心していられます。結局私みたいな女は、いつでも誰かに雁字搦目にされていけないとられないのネ。」

彼女は口許を歪めて、いたずらっぽく笑った。目尻の小皺が酷く可愛らしかった。

「でも、今日は違ふの。私は縛られる心算で出来たのヨ。普段みたいに和服を着て誤魔化さないで済むんですもの。本当に自分で自分を縛るなんて味気ないのヨ。人からは貞淑な奥様に見られたりして、息が詰りそうだったワ。切角、縛って下さる人を見つけたんですもの、私、このチャンスは大いに利用しなくちゃ。思いきり行動的に出て、あなたを誘惑しちゃう。」

彼女は身についた控え目な仕草で私を仰いだ。幾つも年令の下私の云付を易々諾々と受け、スーツを脱ぎ、ブラウスを取った。

彼女の差出す細引が背へ上げた両の手首に絡み、二の腕や胸をくびる。

彼女のウェストには黒エナメル塗りのベルトが必要以上に厳しく喰入っていた。それを外すために私は彼女の柔かな胴を尚一層絞り上げなければならなかった。

「アアッ！ ムウ！ クウ——！」

抑えていた枷を解かれて、彼女の腰部はプックリ弾み、急速に波打った。脚を抑えてスカートのホックをはずす時、女の腹の柔かい弾力に息が詰まった。

ストッキングを脱がす指先に、腿はプリプリ顫え、脛はすべすべして輝やいた。ナイロンのスリッパの下に、背丈の割には過大すぎる乳房が豊かに盛上り、おなかもお尻も逞しく肉付いて艶やかな膨らみを誇らしげに透かして見せていた。

彼女の膝頭をしつかりと括り合わせ、首に廻して引絞ると、白くムチムチした体の線が前屈みに三っ折になった。

「鞭でぶつんじやないの？ 急にひどいことしちゃ、嫌ヨ。」

私は愛する者を傷つけるのは御免



だ。痛めつけるのも程度がある。私は正直な処、今日まで皮が裂けて血が滲むような折檻の対象にしたことはない。

尻を高く上げさせ、スリッパを頭の方に剝いだ。よく撓う皮の鞭を手にして、私は左の掌を撲ってみた。余り痛くはなさそうだ、と思った。

ピュッ！ ピュッ！ ピュッ！ ピュッ！

私は正確に、丹念に鞭を当てた。

アッ！ アッ！ アアッ！

押殺すような、可愛い悲鳴が、犠牲の喉の辺りから起る。それも苦痛など微塵もない、羞恥を抑え兼ねたような魅力的な声だった。

「ヒクヒク悶える女の腰の辺りからヒップ一面を、私は充分に撻ちのめした。そして、意地悪く足の裏も叩いてやった。恐らく彼女は、自らの体重を支えるために、立つことも坐することも苦痛となる筈だ。パンティで丁寧にヒップを包み、スリッパを引下げて覆ってやった。」

縛られて横倒れのまま、彼女は私を

見上げる。怨ずるような、哀しく訴えるような、潤いに満ちた瞳だった。悶えながら、いつの間にかスリッパの裾を咬んでいた彼女だから、或いは発声を奪い、呼吸を抑圧する程の布片を口中に欲しているのかも知れない。じっと下唇を噛んでいる彼女の下膨れの頬に、そんな不満がありそうに見えた。

「さて、と。この次はどう致しましょうか、奥様。」

私は薄笑いを浮かべて云った。

「どうにでも。お気の召すように、どうぞ。」

御遠慮は要りませんのヨ、旦那様。」

なかなか得難い女奴隷だった。適当に茶目っ気があって、エレガントで、素敵だ。

「おなかは何？」

「空いちやったワ。」

「何か食べる？」

「ウン」

彼女と私はもう何年も前からの親しい友達みたいにピッタリ意気が合ったし、この限りでは彼女が私よりずっと年長であることなど苦にならなかった。お互いに甘えたり、からかったり、お互いのパートを忠実にプレイしあった。

彼女は私の手からサンドイッチを食べ、牛

乳を飲んだ。そんな一人前でない扱いを受ける時に、何か嬉しそうな表情を見せ、暖かなヴォリュームをすり寄せて来るのだが、それも嫌味なしなだれ方をするのではないのだ。

一旦縛しめを解かれた彼女は、私の要求でスリッパを脱ぎ、黒のタイツを着けた。私は黒のベルトで彼女のウェストを強く絞った。膚が白いだけにふくよかな丸顔や指先が特に浮上って美しい。胸や腰がグッと張って、ピタリした衣裳の中の体の線が、包まれながら露わにされて魅惑的だった。

両腕を捻上げて縛り合わせると、胸を反らせるから余計突出されたように乳房が張る。面白いもので、首縄をかけると必らず項垂れるのだ。尤もこれは彼女に限らない。昂然と胸を張るような女性も喉に縄が廻されると腑向いてしまうものだ。首縄にめげず顔を起しているような女性も、余程の気丈夫か、俯向くことを許さない程に首縄が緊いのだろう、首縄で顔を伏せる女の項の美しさは、可憐の極、男の胸を撃つものだ。

彼女の場合、勿論羞恥もあるだろう。だが堰かれて充分に俯向けないために、背筋を伸ばしたまま身を屈め、体ごと項垂れようとす

み味わっているようだった。

そんな姿勢の彼女に、私はスーツを羽織らせた。上目使いに黒い瞳がクリクリ動いて、ひどく印象的だった。私は彼女と向き合って坐った。そして二人はお互いの嗜好について話し合った。

初め彼女は随分ドギツイ内容の欲求を私に語った。それは私のサディズムをかなり刺戟した。例えば思いきり残虐なリンチを受けたとか、無理矢理に屈服させられる課程での惨たらしい拷問を受けたとか、それらの方法を具体的に説明するのだ。ぶっ倒れるまで水を飲まされて仰向けに寝て頭を逆に垂らした形で台に縛りつけられ、膨れ上った腹にのしかかってギュウギュウ暴れられたら、口からだけでなく鼻からも水を吐いて苦しむだろう。もし水の代りにビールだったら、嫌な苦い液を吐きながら、耳の穴から血を流して、死んでしまうかも知れない、髪の毛で吊下げられ、足首に重い鉄球をぶら下げると、髪の毛が頭の皮ごとバリバリとはがれてしまうだろう。ハンモックのように吊られた体に腰かけられたら、全身の関節がバラバラになっ

てしまうと思う、等々。

それに対して私は何も云わず、黙って聴い

ていた。そして呟くように云った。

「僕の好きなのは、美しくて優しい女奴隷な
ンだけどナ。」

実際、私は今まで奇譚クラブに寄せて来た
原稿の中でも、女体に対して眼を覆うような
残虐な毀傷を加えたことはなかった。縛りに
しても責めにしても、嫌がる者を無理に力づ
くで抑えるような眞似はしなかった。その意
味では刺戟が薄く、生温いサディズムと云わ
れるかも知れない、だが私はあくまでも悦虐
プレイに徹して来て、今後もそうありたいと
念じているのだ。私自身、自己のそう云った
願いを変態性慾だとか“H”だとかは決して
思わない、何故なら、悦虐プレイの基調は男
女間の深い愛情と信頼であり、相互の理解が
ある所に初めて心ゆくまでの愉悅が生まれる
と信じるからだ。

私自身の好みからすれば、男性のSと女性
のMが望ましいし、またそれは両性の生理的
機能に照らしてみても極めて自然なことでは
ないか。女性を愛し、女の生理を愛す者では
あっても、“女”を憎悪するものではなく、
愛情の表現方法が多数の在り方より烈しく特
異と云うだけなのだ、と私は思う。

観念の美を示してくれない女には興味が薄

い。進んで苛められ、飲んで悶えてくれる女

でなければ、私の心を奪うことができない。

私は“女囚”とか“女奴隷”とか虐げられる

階級の女に美を見出し、心を惹かれる。その

心を分析すれば、私が女性を男性と全く対等

な人間として意識するからである。一寸考え

るとおかしい話だが、私のこの意識を黒タイ

ツの女は理解できると云ってくれたのだ。

社会的には立派な一個の人格として尊重さ

れていればこそ、二人だけの世界で極端な隷

従関係に立つことが愉しめるのではないか。

男女が愛し合うのは自然である。男女がその

愛に浸り切る姿は美の極致とも云える筈だ。

従って、縛りや責めは女体そのものの美を増

すものでなければ無意味だと私は思う。一般

に女の体は無残な被虐の姿態に於て、妖しい

美を醸すものであり、中には責められること

によって初めて美しさを感じさせるような女

体もある位だが、しかし女の肌を裂き、皮を

剥ぎ、肉を焼くような所為は単なる破壊に過

ぎないのだ。

「水責めには興味がありますヨ、貴女が望

みなら口をこじあけてギリギリの限界まで注

ぎ込んでみたい。場合によっては角ビンの一

本位流し込んだっていいんですヨ。」

吊責めだって嫌いじゃない。猪吊でも駿河

間でも逆吊でも、好きな女性になら遠慮なん

かしません。安全なら髪の毛だけでぶら下げ

て振廻してやってもいいンだけど。

でも、いつの場合でも愛情が無けりや駄目

ですネ。僕は憎い女になんか手をふれるのも

嫌だし、そうでなくて、墮性で行動するのは

嫌ですからネ。あくまでも共通の愉しみのた

めに協力するのでなけりや、悦虐という程の

意義も無いじゃありませんか。」

彼女は頬を紅潮させ、深く肯きながら聞い

てくれた。

「貴女を薄着にして縛り上げるんです。冷い

塩水をたっぷり飲んで頂いて、その上で擦り

責めにしたらどうでしょうネ。それとも、貴

女を生まれたままの姿にしておいて、柔らか

で敏感な膚に墨絵を描いて上げましょうか。

貴女は珍らしい位艶やかな白い体をしていら

っしゃるから、黒い筆跡は綺麗に映えると思

いますネ。抓るより擦る方が有効でしょう？

抓るのもいいけど、貴女のようなベテランや、

大体マゾっ気の強い女の人は痛いことはかな

り我慢できるから、抓っても余り効かないで

すヨ。そういう人には擦ることが案外面白い

のでネ。貴女も擦られるのは存外弱いンじゃ

ありませんか。」

彼女の襟足がポツと染まり、全身がひどく暖かい。俯向いた顔を、頸に手をかけて上向かせると、眼を伏せ、唇を噛んでいた。胸の膨みだけが慌だしく波打ち、暖かい鼻息にソフトな喘ぎが感じられた。

初めての出合で私は彼女と意気投合した。

「もっと、いろいろなことをされても大丈夫ヨ。今日は準備が無かったから仕方ないけど、残念みたい。」

彼女は名残惜しそうに云った。だが、彼女の純潔は私に関する限り守り通されたのだ。

「家になら、いろんな道具があるワ。鎖や縄や一寸した拷問道具まで。あなたなら、きつ

と有効に使って下さるでしょうネ。」

「それじゃ、今度はお宅へ伺いましょうか」

私は逆襲してみた。その反問に、今後の交際の是非を賭けて……。

「あなたがいらっしやりたいとおっしゃるならネ。どうしても必要ならやむを得ませんけど。でも、できるなら家へは来ないで頂きたいの。変な女って思いでしょ。でも、私にも社会人としての生活があります。小さいけど名誉も誇りもあります。そんなもの捨てちゃって云われるかも知れないけど、私にとってはやっぱり大事です。私の性格は私だけの秘密にしておいて、そんな社会的な地位も守っていたいのヨ」

この応答を得て、私は決意した。性向に溺れず、しかも頭から拒否する訳でもない答えが、たとえ演技であって良い。これだけの誠実さと理性を備える分別豊かな女性から親しまれて避ける理由はない。私は彼女との充実した交際を欲していた。

私は近藤一、そして彼女は――

「私、松本富美子。私ネ、女学校の頃、澤原さんのグループを軽蔑していました。高沢さんなんか憎らしい位でした。あの方達、余り少女らしさが無くて、マセていらっしやった

女子相撲協会の提唱

和 智 隆 義 (東京)

私は雪崎京人氏の御寄稿を女斗美女相撲ファンとして毎号、楽しんでる。新年号にも同氏の御寄稿があるようで今から期待している。文中の挿画もよく描写されていて、すばらしく迫力もあり実感がこもっている。十二月号では初めの挿画がよく、女力士がかつきと右四つに引組んで互にあごを相手の肩に乗せ、腰を低く引いて十分、両腕を引きつけた好取組は実戦を髣髴させる。女力士の髪はパーマより相撲髷がふさわしく、体格は胸の薄い貧弱なのや、尻の小さい女性では、みすばらしくていただけない。裸マネキン人形が髷をしめて取組んだ様なのは味気なく、潑刺とした精気がな

い。女性のシンボルである乳房は豊満でなければいけないし、尻は骨盤の量感がある、たくましい弾力のある臀部を誇示して欲しい。そして立禪がぐっと肌間に細く食込み、素肌にした前袋が豊満な曲線美を見せて存分に官能美を発散してほしい。セクシーなムードが構図に横溢していなくて、は芳しくない。

女相撲の実戦を見る機会にめぐまれない女斗美ファンのために、こんな姿で斗う女力士の熱戦を挿画から観賞さしていただきたい。先頃、愚妻が知人の角力狂に招かれて蔵前の大相撲へ行き、その人と共に土俵下の砂かぶりの席についた。遠くの棧敷か



ら見物する場合と異り、すぐ眼の前で仕切る巨大な男力士の尻を見て、男性の肉体美に圧倒され、最初のうちは最前列の席で見ることが恥しく気まりが悪くて困ったが、数番見ていくうちに自分のひいきの柏戸や若三杉が登場し、夢中になって観戦し、男力士の肉弾相打つスリルに全く魅せられ、我を忘れてエキサイトしてしまったと告白したことがある。

肉襦袢や股引をつけなくて全裸のグラマ

ー女力士の取組を砂かぶりから見物するチヤンスのない男性の方が分が悪く残念だと話合った事だった。女相撲を邪道視したり、げてももの扱いするのには当らない。女子プロレスなどは相当、過激で乱暴な荒い業だから女性の身体の疲労や故障が烈しいと思われるが、相撲ならばレスリングに比して肉体を苛酷に傷める度合は少い。今日、男女同権の時代にスポーツのあらゆる方面に女性の進出がめざましい際、見世物でなくスポーツとしての女相撲の出現を待望しても良からうと思う。

女子相撲協会なるものが存在して年に何場所か蔵前で全国から選りすぐった女相撲を興行したら、必ずや大満員疑いない。女性の柔道より人気が湧くであろう。では最後に女相撲の構図について勝手なお願いをする。挿画は控え目な遠慮勝ちな描写でなく赤裸々に、女の肉体と肉体が土俵上に相うち、女性の熱気が感じられるような筆致が望ましい。烈しい取組みに奮がくずれて、さんば髪となり、下りが落ちて輝がゆるみ、へその上までのび、今にも前袋がはずれん許りの熱戦。かつきと四つに組んだ女力士の太鼓腹が波打ち、行司の制止も耳に入らず相手の立輝を引上げていどみ合い、前袋を掴んではなさず、土俵せましと死闘を展開する構図等。或は土俵へ上って四股を踏む女力士が、股も裂けん許り派手に太ももを高く上げ、力一杯ふみ下す肉体の躍動美。土俵の上から力水をつける女力士、力紙をとって汗ばんだ両腋下の黒い腋毛を清めるところ。大胆不敵に仕切った女力士の挑発的な曲線美。前袋がびったり食込みヴオリウムある臀部の筋肉が緊張しきったポーズ等。それ等の一つ一つが、どれをとっても女相撲の醍醐味を男性にあたえるに違いない。要するに女の肉体の美しさはヌード写真やストリップショウなどでは十分でなく、肉弾相打つ女斗美、女相撲によってのみ、その極致が表現され高く評価されると思う。雪崎京人氏の御健闘を祈る。

でしょ。私には何となく不潔に感じられたのネ。卒業したら、私、何も知らない自分がとても恥ずかしくなっちゃって、その反動かしら、あんなに嫌いだった高沢さんのグループがとっても懐しくなったのヨ。」

松本富美子かどうか知らない。しかし私にとっては彼女を松本さんと呼び、富美子！と叱れるのだから便宜である。それでいいではないか。

彼女は実に魅力的な「女」だ。初めての時の別れ際、ちよっぴりにはかみながら囁やいた言葉は今も胸奥に息づいている。

「このまま、もう二度とお逢いしないかも知れないワ。でも、多分駄目ネ。私のこの性格ってものは、パンクチャルなのヨ、とっても、どんなに決心しても、きちんきちんとやって来て私の心を滅茶々に引っ掻き廻すのヨ。私がまたあなたの前に現われたら、哀れな女のために、少しは可哀想だと思って下さるでしょ。」

彼女——松本富美子——は、再び私の前で身悶えてくれた。

以来、私と私の恋人は、一定の周期を置いて現われる女客の奉仕を愉しみながら、充実した生活を楽しんでいる。

連載小説

『宇宙のどこかで』

Ⅱ（無期懲役囚の手記より）Ⅱ

佐 治 麻 造

使 役 囚（12）

流石に二日程は檻の中で休ませて呉れました。その間、ずっと例のダイアル錠の手錠を前で嵌められて居ましたが、勿論ダイアルにふれることすら恐ろしく、ひたすら謹慎の意を表して正坐を続けました。

「さ、今日から又労役よ」

中二日間おいて三日目の朝から檻を出て、再び苦役を課せられます。

寝室へ朝のコーヒーを捧げて運びます。

「元氣になったかい？ 不心得なことをするんじゃないよ！」

三日振りで夫人の声を耳にして、今更の様に自分の分際を思い、口の利けぬまま床にひれ伏して全身で御慈悲の程を願いました。

「六十四号、今日ね、ちよつと変った女囚が来るのよ。使役囚としてね。だから、お前が、そんな楽な恰好で家の中なんかを歩き回れるのもお終いよ……」

おひる近い頃、浴室を磨いていますと、早く済ませて庭先へ回る様にと、お加代に命じられ、息せき切って仕上げて飛んで行きました。テラスの前に、一人の女囚が正座して袋を背負ったまま、ひれ伏しています。鼻鎖を握って傍に立ち、靴で女囚の頭を踏み付けている婦人看守。

「今朝、奥様がおっしゃった使役の女囚だな」



と思い乍らテラスの隅に正座し両手を合掌しています。やがて夫人とお加代が見えました。ひれ伏す私に鋭い一瞥。

「看守さん。お待たせしまして、今日は髪の手合が仲々うまく行かないもので……」

女囚の背から戒具入りの袋が除かれ、鞭の音と共に女囚は身を起こ

します。大柄な体、鞭痕だらけの淡い小麦色のスベスベした肌、豊かに盛上った胸、肉感的な肥った腿。一眼で白人種の婦人だと分りました。丸刈りにされた頭は黄金色です。嵌口具で締めつけられた恰好の好い顔を挙げ、青い両眼に涙を湛えてガウン姿の夫人を仰ぎ見ました。立上り鎖をガチャつかせてグルリと回って、全身を調べ

て貰います。首環、鼻環、第四種後手錠、くびれた腰に喰込む黒い革枷、そしてスラリとした脛には、あの骨を噛み苛なむ第四種足錠！嵌口具を外され、蹴り倒され、足錠の痛さに悲鳴を挙げた女囚は再びひれ伏して、片言を喋ります。背と尻に刷られた囚人番号二十七の文字が黒く見えます。

「…セツトーザイ……チヨエキ……キユウネン……ニジュヒチゴーシユ。ドーゾシエキネガイマシユ。オクサマ……オジヒクダサイ……」

吹出した夫人は軽く鞭を当て、お加代は五つ六つビンタを取りました。

「奥様も物好きですねえ。こんなの役に立つかしら？」

「ホ、ホ、ホ、ホ、まあ試しに使ってごらんよ。面白いじゃないの。在留外人の家で、ずっと奴隷だったのよ。言葉も大抵は分るそうよ」

「へーえ。奴隷だったんですの。じゃ逃げ出したのかしら？」

「ええ、脱走したのよ。恋人を作ってさ、そこへ逃げたの。けど脱走については所有者の本国で改めて刑を課す訳よ。今はね、窃盗罪についてだけ刑を

受けてるのよ」

「何を盗んだのですか？」

「御主人から与えられていた衣服やなんかよ」

「アラ……衣服って……」

「あとで書類、見せたげるわ。所有者って人がね、独身の年配者でさ、情婦みたいにしていた訳よ。だから余り戒具も施されてなかったのを幸いに、事もあるうに……と云う次第……フ、フ、フ、フ」
私にも此の女囚の経歴の一部分が判りました。しかし、本当にゾクゾクする様なグラマー振りです。自分と同等の身分の女だと云う意識も手伝って、頭がクラクラする程の興奮を覚えました。

「六十四号！ これ、お前の相棒よ。今夜から淋しくなくていいわね。ホ、ホ、ホ、ホ、じゃ、看守さん、時分どきだし、食事なさない？」

哀れな女囚を残して皆はテラスに続く食堂で昼食を始め、私はお加代の命令で檻のある室へ行つて、暫く使用されなかった第三種の手錠足錠、そしてそれに付属した鉄鎖等を磨きます。やがてやって来たお加代の眼の前で、我れと我が身に第三種手錠足錠を嵌めました。ガチャリ、ガチャリ、冷い鋼鉄の音。今後、四六時中、両手首両足首から外される事のない鉄の枷を悲しく見乍ら、更に太い鉄鎖で繋ぎ合せ、足の鎖を腰枷に吊ります。

検査するお加代の冷酷なまなざし。

「分つてるだらうけど、今後、家の中へ上っちや駄目よ。さ、テラスを磨いて！」

膝枷を外して持去るお加代を見送り、両手首に嵌まった頑丈な手錠と鎖を見て溜息をついた私は、トボトボと庭先へ出てテラスを磨

き初めるのでした。既に女囚二十七号は家の中で追い使われている気配です。

やがて、おそい昼食を与えられた私達二人の使役囚は、夫人やお加代に見物され乍ら、頭を並べて這いつくばり、囚人食をガツガツと啜りました。

私も二十七号囚も間違つき乍ら、それでも大過なく一日の苦役を終え、意地悪いお加代の手で鼻環と鼻環を三十センチ程に結ばれ、肩や腕、そして腰の辺り迄も触れ合い乍ら、もつれる様な足取りで鎖を鳴らしてテラスの所へ行きました。私は久振りに自分で後手錠にさせられ、二十七号囚はお加代の手で第一種後手錠と足錠を嵌められています。

典獄の面倒臭そうな訓示。そして夫人の戒具検査。

「二人共、仲良くするのよ。ホ、ホ、ホ、ホ」

典獄夫妻の嘲笑を背に浴びて檻のある室へ行き、嵌口具を外され、それぞれの檻へ蹴込まれます。

「お加代様。ありがとうございました」

「オカヨサマ。アリガトゴザイマシタ」

薄暗い電灯の下で檻の鉄格子越しにお互いの姿を見合せて、ホッと吐息をつきました。社会にいた時の名をお互いに言います。

彼女は「ジーナ」と言いました。それから二人共向き合つて横になり、いろいろ話をしました。見事なジーナの体を眺める息苦しさ

に反対向きますと

「コチラムイテ……」

とせがみますので仕方なく齒を喰いしばってなるだけ体の方を見ない様に顔を見詰めます。其晩から、戒具の辛さを慰め合い乍ら、

お互いの身の上を話し合いました。

「此の手錠！ああ、辛いわ。イ、イタイ……」

転々反側し乍ら、片言混りに話して呉れた女囚ジーナの身の上話を、私の貧弱な語学力と記憶力とに頼って、以下、掻いつまんで述べましょう。

女囚ジーナの話(1)

彼女は地中海に浮ぶ情熱の観光地、コルスカ島に育ちました。幼くして孤児となり、大地主の家で女中として育てられました。長ずるに至って、天性の美貌と魅力溢れる体に慕い寄る若者数知れず、独身の老地主の慈愛も受けて、青春を楽しんでいました。本国より派遣されて現われた青年技師Fに一目で愛を感じたジーナは強引に彼を得ようとしします。そこへ島の老判事の娘ルーシーが割り込み激しい恋の鞘当てに火花が散り、二人の女性はいかに相手を殺し兼ねない程ののほせ様。身分上、不利なジーナは意を決し、観光客の自動車から莫大な紙幣を盗み出し、持参金に当てようと致しました。

紙幣の束をつきつけられて結婚を迫られた男は、彼女の情熱にほだされ、秘密を守って結婚すると約束します。恋の勝利に酔って、愛しい男と踊り狂うジーナ。豪華な粧いでホールに現われたルーシーを見付けたジーナは、恋仇きの眼前で激しくキスして見せつけました。ハンドバッグを取落して、眉をつり上げ唇を噛むルーシー。しかし喜びも束の間、誰知るまいと思った盗みも「蛇の道は蛇」ジーナの犯行と割り出した刑事がジーナを追って姿を見せます。テーブルに坐って、とろける様な笑顔で酒杯を傾けるジーナの側に二人の婦人刑事が現われ、杯を叩き落しました。驚くジーナの両手に、

きらめいて嵌まる手錠。何事かと集まる人々の眼に晒されて立ちすくむジーナに更に腰縄が打たれました。

「覚えあるわね！五十萬フラン、どこへやったの？」

人々のざわめき。ジーナは眼の前が真暗になり、へたへたと崩折れそうです。激しいピンタを喰らい、腰縄を曳かれ乍ら、男をふり向き、

「あ、あなた！お別れだわ。ああ、……」

男は、じっと腕を組んだまま身じろぎもせず、人々は嘲けり笑いました。恋仇きのルーシーに嘲笑された時の口惜しさ、情けなさ！警察署へ曳かれ、下着一枚に剥がれ、肘に細い鎖で番号札をつけられ独房へ入れられました。盗んだ紙幣は殆んどそっくり見付けられ、余りに明白な犯行です。取調べも簡単に済み裁判にかけられました。黒い革パンツ一枚の未決囚姿で、手錠腰枷を嵌められ、人々の視線を浴び乍ら裁判所と警察署を往復する恥かしさ。裁く判事は恋仇きの父親です。逮捕されて約一カ月、三回目の出庭で刑が宣告されました。

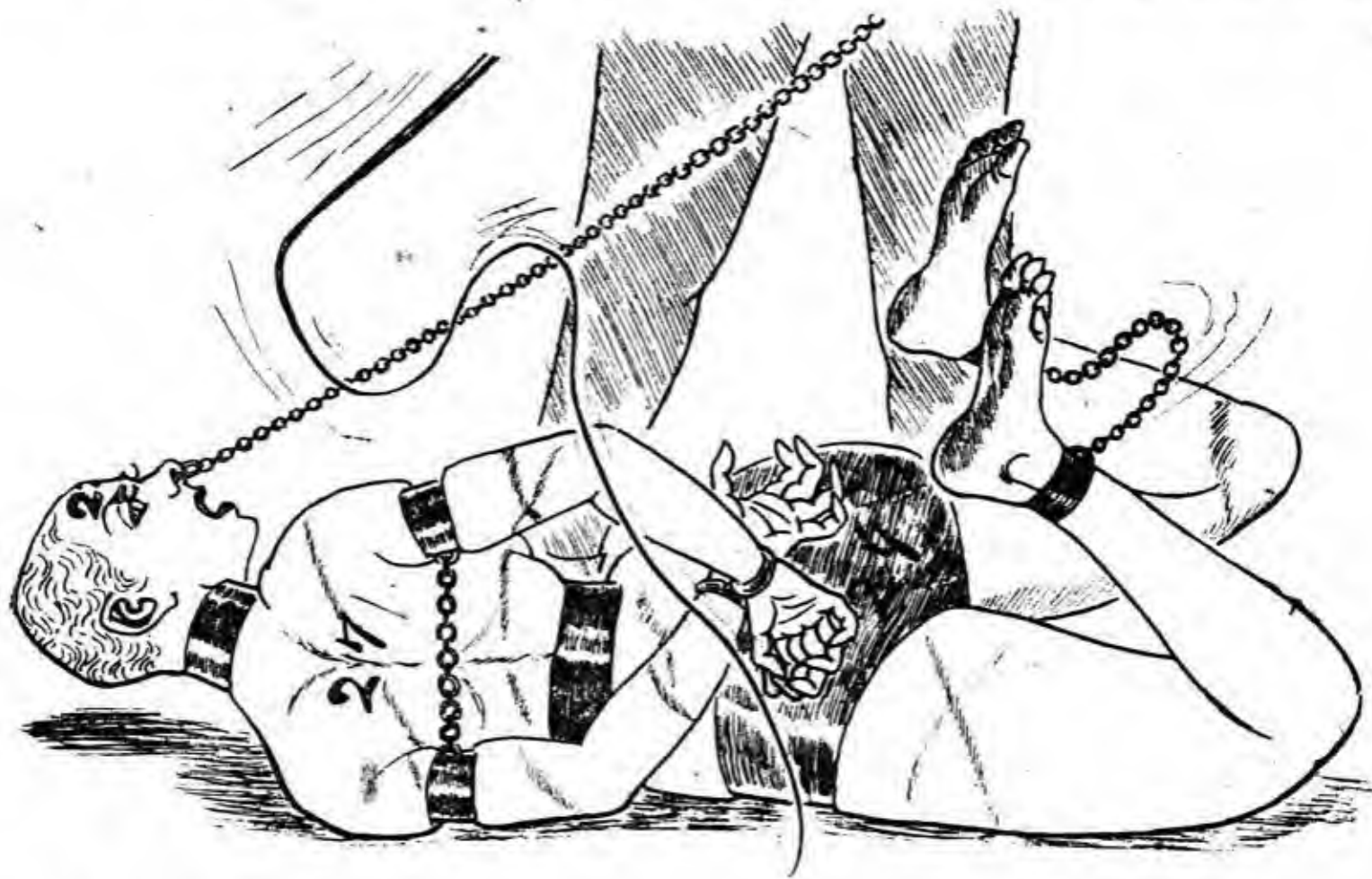
「動機に於いては情状酌量の点なきにしもあらずであるが、窃盗せる金額が大きいこと、又被害者が外人の観光客である点よりして、被告を懲役十二年に処する……」

手錠のまま冷い法廷の石の床に跪いて、刑の宣告を受けた彼女は直ちに人格を剝奪され、冷酷な獄吏達によって浅ましい懲役囚姿にさせられました。豊かな金髪は無残にも丸刈りにされ、嗚咽し乍ら冷い鋼鉄の首枷を嵌められ、両腋には残酷な腋鎖を締めつけられます。

ずっしりと重い革と金具の腰枷が腰のくびれに締められ、足錠、

後手錠！ 我国の監獄で用いられている第三種と似たり寄ったりの構造です。泣き喚く彼女の口にガツキと嵌口具が嵌められ、額、胸、背、両尻に囚人番号が刷られました。自殺予防剤、発狂予防剤、そしてメンス中絶剤の注射の痛さ。最後に鼻環がつけられ、彼女の気持はどん底迄つき落とされました。意地悪そうな婦人看守によって革鞭の雨を受けます。背中に二つつ、蹴ころがされて胸、尻、そして腿の内側に続け様に炸烈する鞭の激痛！ ジーナが美しさの故に男達からチャホヤされて居たねたみもあって、鞭を振る婦人看守の顔は勝誇った様でした。

「どう？ 自分の分際が少しは身に泌みたかい？ 高慢ちきな顔して歩いてたけど、そのざまは何さ！ 口惜しかったら何とかしたらどう？ ホ、ホ、ホ、ホ、あのものがき方！ そんなものがき様じや手錠は外れないわよ。さ、起きて！ 脚を折ってお坐り！ そうそう、



フ、フフ、脚、痛いだろ。これからね、しよっ中、そうして坐らされるからね。その積りで稽古しといた方がいいよ。では、と……。いずれ本国の監獄へ送ってやるけどね。当分ここで御礼奉公だよ。自分を人間だと考えてると飛んだ目に会うわよ。それ！」

額を蹴り飛ばされ、後へ倒れる彼女の胸に又も革鞭が鳴ります。

「……お坐り！……」

必死の思いで正坐するジーナの両眼からポロポロ涙がこぼれました。

「泣いたって仕様ないじゃないの！ おいで」

カチリと鼻環に曳き鎖がつけられ、曳かれて外へ出ます。初めてつけられた足錠の鎖の短かさに、よろける度に尻に鞭が鳴ります。

外へ出る時の恥しさ。思わず立ちすくみ、しやがみ込みますが、鞭に追われ、引っ張られる鼻鎖の痛さに堪え切れず、嵌口具の奥の方で泣き喚き乍ら道路へ出ました。忽ち群がる物見高い大勢の男女。ジーナは既に、余りの情けなさに人々の嘲声も聞えず、地面を見詰めたまま鉄鎖につまず

きつまずき曳かれて行くのでした。

女囚ジーナの話(2)

警察署の既決囚監房に、嵌口具を外されただけでブチ込まれたジーナ、いや女囚二十七号は五日間、独房から一步も出して貰えず、僅かな反則でも容赦なくきびしく懲戒を加えられ、懲役というものを骨の髄迄叩き込まれました。慣れない正座を一日中、強いられる苦しさ、後手錠の儘の両腕のたるさ、コンクリートの床に押し付けられて足首に喰込む足錠の固さ、そして後始末もできずに監視される乍らの用便、犬の様に這いつくばって囓る囚人食の味気なさ。屈辱に満ちた点呼と戒具検査、許されて横になれば両腋と胸を苛む腋鎖の苦痛。更に又、分際を教えてやるためとて、理由もなしに朝、夕加えられる革鞭の味。人間らしい言葉一つ掛けてくれる人もいず、苦しみ悶え、呻き、のたうち回る日夜に、さしも勝気なジーナも反抗心を全く奪われてしまい、唯もう御慈悲を乞うことしか知らない懲役囚にさせられてしまいました。六日目に曳出され、町の中央広場で晒し者です。高い晒台上に支持された厚い木製の首枷に首を挟まれて立たされ、三十分位おきに背や尻や腿等に鞭を当てられ、又五分おき位に罪名と刑期を大声で叫ばねばならないのです。浅間しい戒具姿を衆人環視のままに晒して、人々の憐れみと嘲けり、そして好色に満ちた視線を満身に受けて、犯した罪を痛切に悔い乍ら丸一日の辱かしめを受けました。涙にかすみ勝ちの両眼に、恋仇ルーシー嬢の姿を認めた時の気持、思わず後手錠の身をもがき足の鎖を踏み鳴らして、鋼鉄のいましめのきびしさを骨にこたえて思い知りました。

翌日から御礼奉公の苦役を課されました。繋がれている既決囚は男三名、女はジーナ共で二名です。留置人や未決囚達十五、六名の男女の監房へ配食させられ、続いて署内の掃除、裁判所の清掃等に駆り出されました。全裸の身をジロジロ眺められる情けなさ、恥かしさ。しかしもはや其の様な人間並みの感情が許される訳もありません。署内の便所掃除、廊下磨き、そして戒具磨き等の労役を婦人看守に追われて済ませ、自分で後手錠にして昼食を囓ります。午後、男の警官に鼻鎖を曳かれて外へ連れ出されました。けれども、の様に、鼻にカチリと鎖をつけられる悲しさ。

「フーン、本当にいい体してるなあ」

遠慮会釈なしに、胸や尻等を撫でられる口惜しさ。グイと鼻鎖を引かれ、足錠の鎖をガチャつかせてもつらせ乍ら、鼻の痛さに涙をこぼしてのめる様に歩きます。外へ出ますと、堪え切れない恥かしさで身もすくむ思いで、懲役囚という身分の味を全身の皮膚で味わい乍ら、曳かれた先は何と判事の家でした。即ち恋仇であったルーシー嬢の所です。余りの事に立ちすくんで身悶えするジーナは、鞭の一撃に脆くも膝をつき、いざり乍ら門を潜って庭先へ正坐、更に頭を蹴られてひれ伏しました。

「フン、いいざまね……」

恋仇であった女の嘲笑を頭上に聞いて、血の逆流する口惜しさに悶えます。

「動くな！ じっと出来んのか……」

尻に炸裂する革鞭。

「よし。立て。グルッと回れ」

勝誇った恋仇に冷く眺められて、浅間しい姿を晒す気持。

「此の……後手錠さえ嵌められてなければ……」

と迄思いますが、どうすることもできません。嵌口具を外され、再びひれ伏してヤケクソな気持で罪名と刑期を申上げるジーナの頭が、令嬢のサンダルで踏まれて押さえつけられます。顔中、土と涙でグシャグシャにして身を起した女囚を見下ろして、小気味良さそうに浴びせられる辱かしめの言葉。

「……ホ、ホ、ホ、口惜しいのかい？ 何とか言ったらどう？ 女囚姿よく似合ってたよ。お前なんかには丁度ふさわしい恰好だわ。鞭のあと、素晴らしい模様ね。お情けの鞭を当ててやろうか……」

恋仇の女から受ける鞭の味！ 後手錠、足錠の身は反抗はおろか鼻鎖を取られて鞭を避ける術すらありませんが、せめて意地にも悲鳴だけは挙げない様にと、懸命に喰い縛る齒の間から洩れ出る耐え切れない喚き。一ダース程も体のあちこちを鞭打たれ

「御礼を申上げんか！ 強情な奴だ。吊るして欲しいのか？」

震え上って恥も忘れ、鞭の御礼を申上げ、顔に唾を吐きつけられました。

「フ、フ、フ、少しスツとしたわ。暫くしたら私の許婚が来るからね、会わせて上げる。ホ、ホ、ホ、誰だか分るでしょ。そして二人で出掛けるからね、其の時、私の穿く靴でも磨かせてやろうかしら……」

前手錠にされ、鼻の鎖を立木に繋がれ、命じられるままに渡された靴の底に接吻させられます。屈辱の余り、身をもんで鳴咽するジーナに鞭が鳴り、哀れな女囚は手錠の嵌まった不自由な両手で、恋仇であった女が愛しい男と一緒に歩く靴を磨き初めました。令嬢は椅子に深々と腰掛けてタバコをふかし、勝誇ったまなざしでポロポ

ロ泣き乍ら靴を磨いている憎い女の哀れな姿を眺めるのでした。

やがて二人の女の競争の的であった男が現われ、女の一人は身も世もなく鳴咽して身悶えし、他の一人は、ためらう男の腕に身を投げてキスを求めます。

「ね、あなた……ちよっと見てやってごらんないな。あの哀れな恰好……二十七号！ お立ち！」

「ずい分ときびしいもんだねえ。可哀想だなあ」

「アラ、どうして？ 当り前ですわ。懲役囚なんですから……」

前手錠の両手で顔を掩って立ちすくむジーナは、看守に鍵を与えられて後手錠を命じられました。好きで堪らない男の眼の前で、手錠の鎖を抜いて腰に吊るし、今度は後向いて自分で後手錠にします。慣れないのと情けなさの余り手間取り、腿の内側に鞭を当てられました。

「ヒーツ、ヒー、ヒーツ……」

哀れな悲鳴をあげ乍ら、漸く嵌め終えます。腰枷の後部の錠孔に右手の環の突起がカチリと嵌まり、更に右手の環の錠孔に左手の環の突起が嵌まりました。

「ホ、ホ、ホ、ホ、自分で後手錠にするのね。手がかからなくていいじゃないの……フ、フ、フ」

もう、どんな苦しい懲戒を科せられてもいいからと口迄出かける反抗の言葉を吞み込み、吞み込み再び正座してうなだれます。

「こんなもの体中に嵌められ、これから十二年間、暮すんだなあ。辛いだろうな……」

「自業自得ですわよ。さ、あなた……そろそろ……」
別室へ消える二人を、嵌口具をはめられ乍ら、胸搔きむしられる

思いで見送り、今度は玄関先へ追い立てられて出掛けるのを待ちました。

やがて楽し気に出て来る二人を思わず怨めし気に見上げるジーナに冷酷な令嬢の声。

「この磨き方は何よ！ これで磨いたつもりかい？」

小気味よく足首の引締った両足の白いハイヒールの片方の爪先に僅かの汚れが認められます。

手錠のままで磨かされたんだもの、と思いますが、口利く術もなく、じっと地面を見てうなだれる他ありません。

「や、お嬢様。きびしく懲戒を加えておきますから……」

「そう。半殺しの目に会わせてやってよ」

ポンと額を蹴られ、ヒラリと飄るスカートを、ポンと匂う香水を鼻に感じた女囚は、ガバと地面に身を投げ出して嵌口具の奥で泣き呻き、そして後手錠の両腕をもがき乍ら、身をよじって口惜しがりました。

「さ、行こうぜ。お前の気持も分るけどな、もう仕方ないじゃねえかよ。口惜しかろうが、お嬢様から見りや、お前なんかもう虫ケラ以下なんだからな……」

看守は少しは哀れんでくれたらしく、令嬢と約束した懲戒は、一時間程の鉄砲手錠だけで赦してくれました。

女囚ジーナの話 (3)

それからと云うものは、三日にあげず令嬢の家へ曳かれて、恥かしめられたり労役させられたり致しました。最初の時には留守していた若い女中からも、さんざんからかわれ、顎でこき使われます。

判事は居合せても、流石に苦笑して眺めているだけでした。

諦めようとは思っても、恋仇であった女や結婚する相手であった男の眼の前で、浅間しい姿で鎖を鳴らして苦役し、鞭打たれ、蹴られ、そして犬の様に這いつくばって囚人食を喰り、そしてその姿を撮影される気持というものは、全く転げ回って慟哭したい程です。

三度目に邸に曳かれた時には、夕方からパーティがあるとして、其の準備にこき使われました。両手は自由度三の前手錠ですが、慣れないこととて、粗相を繰返し、もたもたしては鞭を受けます。又、足鎖を腰枷に吊った鎖を忘れて、腰、膝を伸ばしたまま、足鎖の長さ一杯に歩こうとしては、鎖につまづいて、みじめな恰好で転び、嘲笑を浴びるのです。既に両手首、両足首には枷ずれが出来て痛くて堪りませんが容赦される訳はありません。両腋も腋鎖にすれて動かす度に思わず苦痛の呻きが出しています。パーティの粧いをこらした艶姿で冷笑を浮べて眺めている令嬢の姿を見ますとは、わたくし千切れる思いですが、勿論どうすることも出来ず、小娘の女中に顎で使われ、口汚く罵られ、ひたすらに鞭を当てられない様ひれ伏したり両手を合わせたりして慈悲を乞い乍ら歯で嵌口具を噛みしめて汗水垂らして這いずり、立ち働く他ありません。

「大抵いい様ね。二十七号！ 後手錠におし！」

看守から預かっている鍵を投げ与えられ、恋仇の女の眼前で口惜しさに肩をふるわせて自分で後手錠にしました。膝に木の板を挟まされ立木に鼻環を繋がれて、庭先に立たされます。やがて御客達が見えました。大きくもない町のこととて殆んどは顔見知りの男女ばかりです。遠くからジロジロ眺められ、近付いて辱かしめられ、からかわれる情けなさ。懲役とはこんなにも辛いものでしょうか。

「二十七号！ まっすぐ正面を見てるのよ！」
令嬢のいいつけで、頭のでっぺんに太いローソクがじかに立てられます。

「……いいかい。蠟が額の方へ流れたりしたら鞭だよ。膝の板、おとさない様にね。フ、フ、フ、腿の内側にたっぷり鞭を当てるからね。幸い風もないし、消えやしないわ……」

眼を閉じることも禁じられ、内股に炸裂する鞭の味を思いますとポロポロ泣き乍らも、じっと正面を見て膝に力を入れ、身動き一つ



せずに立っている他ないのでした。

「アラ、いい恰好ね。よく似合うじゃない！」

老地主の家で女中していた時の朋輩、そしてジーナとは仲のひどく悪かった二人の女が着飾ってやって来て小気味よさそうに嘲けります。ペツと唾をはきつけられた時には、血も逆流する思いがして、とうとう身悶えして膝の板を落してしまいました。

「あ、ちょっとちよつと。私達にやらせてよ」

膝をグッと上げた浅間しい恰好で立たされ、足鎖を吊る鎖を外されて、朋輩だった二人の女達に、前後から内股を鞭打たれました。脂汗を浮べて激痛と屈辱とに堪え、再び元の姿にされます。中には隣れみの声を投げてくれる人もありますが、大半の人々は面白そうに此の残酷な光景を眺めていました。

昼以来、一滴の水すら与えられず、飢えと渴きに堪え、楽しげに飲み食い踊る人々を見乍ら夜更け迄こうして立たされ、囚人の悲哀を骨にこたえて知りました。やっと赦されて直立不動の苦行から解

放され、嵌口具を外されて正座します。酔の回った御嬢さんの声。

「二十七号！お腹減ったでしょ。ホラ、お喰べ！」

残り物の肉片を地べたに投げられ、胸一杯の屈辱にふるえ乍ら口で拾います。シャッターが鳴っています。「よく噛んで！ けど呑み込んじや駄目よ。……よし、そのまま吐き出して……」

全く久し振りの人並みの食物を口にして喜んだのも束の間、地べたに吐出して惜しそうに見やります。

「フフフ、もう一回、口に入れて……」

全く何という辱かしめ方でしょうか。涙をこぼし乍ら砂にまみれた汚らしい塊りを再び口に入れ、命じられるまま噛みました。

三回繰返させられた末、小さくなった塊を漸く呑み込まれます。

「どう？ おいしかった？ お前にや分に過ぎた食物だわ」

「御礼を申上げないの？」

いつの間にか現われた婦人看守に叱られます。

「……ありが……とうございました。」

「あーら、えらく神妙じやないの。変れば変わるものねえ。あの勝気なジーナがねえ。ルーシー、あんた、いい心持でしょ？」

「ホホホ、こいつね、今はただ懲戒が恐ろしいだけなのよ。胸は張り裂けんばかりに口惜しいに違いないわ。まあ、そんな心持じや、これから通用しないって事、だんだん分って来るでしょうけどね」

門の際で正座し、帰る人々から唾をかけられ、礼をいってひれ伏し頭を蹴られた末、夜更けの町を曳かれて独房へ帰ります。あの人々には柔かいベッドが待っているでしょうが、懲役囚のジーナを待つものは、冷い暗い監房です。とうとう晩食抜ききのジーナは、きびしい戒具の身をもだえ乍ら、今夕の人々に、自由の身になったらど

んな仕返しをしてやろうか、と考えて一夜を過しました。

女囚ジーナの話 (4)

娼家街の下水溝の掃除をさせられるのも全く辛い思いでした。娼婦達に嘲けられ、からわかれ乍ら鉄鎖を鳴らし、不自由な戒具姿で苦役する味は想像に任せます。

手足の枷ずれも破れては肉が盛り、漸く固まりかけ、腋鎖の苦痛も絶頂を過ぎました。恋仇ルーシーの家に於ける世にも情けない思いの苦役も十回を越し、世間の人々も初めの頃のような関心を示さなくなり、幾分は馴れたせいもあって、ジーナも次第に女囚振りが板について来ました。既決囚達も押送されたり、新規の者がブチ込まれたりして男四名、女三名になりました。女囚の一人は放火で懲役十八年、もう一人は美人の若い女スリで懲役七年、何れも初犯で、想像を絶するきびしい扱いに呻吟を極めていました。

「二十七号！ではね、今日限りで来なくていいわ。早く監獄へ送ってもらいなさいな。フフフフ情けなかったらうね」

既決囚にされて約二カ月目に御嬢さんから言い渡されました。

「……お嬢様、ありがとうございました。こんな……汚らわしい女囚を……よくもお側で……働かせて下さいました……」

「おとなしく罪の償いをするのよ。いい？」

それから約二週間の後、ジーナは押送を受けました。ジーナの国の監獄では押送には我国の第四種に相当する手錠足錠は使用しないらしいのですが、其の代りに残酷な刑具が施されるのです。ジーナを含んで女二人、男二人の押送囚達は、伸びた頭髪を刈られシャワーを浴び鼻環首環腋鎖腰枷足枷の点検を受け、両足を四十センチ程

の太い鎖で繋ぎ合わされ、後手錠にされます。黒い革バンドで背中に重い電池を背負わされ、両足の鎖の中央部は二本の合成樹脂製の鎖で腰枷の前と後にグッと吊られます。腰枷の前から後へと樹脂の鎖がゆるく潜りその中央股の直下に、多数の鋭い針を表面に有するステンレス製の球がブラ下げられ、電線で背の電池の一極へ接続され、電池の他の一極は嵌口具に接続されます。足裏に絶縁塗料を塗られ、首に長さ一米、巾四十センチ、厚さ五センチ程の木製の首枷を鋼鉄の首環の上から縦に嵌められ、もう一人の女囚を先頭に女、男、交互に首枷の前後を短い鎖で連結されました。鞭で追われて獄庭へ曳かれます。一步毎に揺れ動く針の球が内腿に当ってチクチク刺さります。

獄庭で哀れな押送囚達を待っているのは重い鉄丸です。直径十五センチ程の鉄丸が、各懲役囚達の足鎖の中央部に二十センチ程の太い鎖で以て結び付けられます。看守の手によって電池のスイッチが入れました。これで完全な押送囚です。

「さあ、歩け！」

重い鉄丸をゴロゴロと引摺り出した途端、内股を錐でもむ様な激痛！更に口の中にガンと衝撃が、そして全身を電痛が走り貫きました。股間の針玉が揺れて内股に当たったのです。夢中で膝を払って針玉を避けます。すると今度は鉄丸を引摺れません。話に聞き、又見物した事もある懲役囚の押送の姿です。門を出ない中にジーナの額には脂汗が浮び、嵌口具の中であえいでしまいました。連鎖の身は立ち止まることも出来ません。

他から見れば世にも滑稽な恰好で、恥も何もなく股を精一杯払げ尻を振り、電撃の度に全身をわななかせ、ゴロゴロと鉄丸を引摺っ

て一步一步を必死の思いで踏出し乍ら、牛よりも遅い速さで人々に嘲けり罵られつつ、船着場へ向うのでした。全く残酷極まる取扱いです。ダラダラ脂汗を滴たらせ、眼も昏む思いで漸く着いた波止場の片隅で立って待たされます。足首の骨は碎けたかと思う程痛み腰から下の各関節は、ずきずきと鈍く疼きます。

ピシッ。突然、尻を鞭打たれ、閉じた眼を開いて見ますと、眼前に恋仇ルーシーの美々しい姿が立っていました。一目で婚礼を済ませた所だと判ります。少し離れて恋しい男の姿！頭にカッと血が昇り、思わず身動きした途端、又しても堪え難い電痛に呻きます。「フフフフ、哀れなものね。とうとう監獄行きかい。たっぷり苦しんで来るといいわ」

又しても哀れな浅間しい姿を写真にとられます。

「ホホホホ、お前、ごらんのようにね、私達、今日、婚礼したのよ。これから新婚旅行！お前が積み込まれる船と同じ船に乗るの。どんな気持ち？悲し気な顔しないでさ、少しは祝福してよ」

涙を両眼に湛え、全身を打ち震わせているジーナの針玉が、意地悪い若夫人のハイヒールの先で揺り動かされ、哀れな女囚は新たな脂汗を浮べます。

「泣いたってしょうがないことよ。お前は懲役囚！分った？けどもの以下の分際なの。ホホホホ」

多勢の人々に華かに見送られて、腕を組んで船上の人となる新夫婦。鞭に追われ、一步毎に苦痛に呻き乍ら最下層の船艙へ追込まれる懲役囚達。スイッチを切られ、船艙の床に首枷をぶつけ合いつつ崩れる様に正座したジーナ達の頭上で汽笛が鳴りました。

女囚ジーナの話 (5)

背の電池と大きな首枷と股の鎖を壁に繋がれて横一列に正座したジーナ達懲役囚は、船艙の床の滑り止めの三角の木が脛に喰い込む痛さに呻き乍ら三日間過ごしました。手空きの船員達が暇つぶしに見物しに來ます。すると意地悪い看守は女囚達二人に用便を許すのです。室の中央の便器に鎖に悩みつつ、しやがんでジロジロ見物され乍ら用を足す恥かしさ。拒めば、今度、何時、用を足させて貰えるか分りません。

本国の港に着き、乗客はとくに降り、積荷も処理が終り、漸く懲役囚達の番です。再び重い電池を背に、股には針玉がブラ下げられ、首枷でガチリと首を挟まれ、繋ぎ合わされて白昼の港に降りました。脂汗流して停車場へ曳かれ、今度は貨車に積み込まれます。家畜用の貨車で一昼夜、着いた先は首都の郊外に在る町です。駅から更に約二キロの監獄迄歩かされた時の言語に絶する苦しみ！

「ホー！新入り四匹か。三番目の女、素晴らしいじゃないか」

見馴れた人々の視線を受け乍ら死ぬ程の思いで漸く辿り着きました。高いコンクリート塀、いかめしい建物、押送の苦しみにフラフラになった懲役囚達を待っているのは、定められた長い長い刑です。品物の様に扱われて監獄の囚人にされます。囚人番号を刷直され、戒具を新しく嵌め替えられたジーナは、懲役囚八十三号として独房へ蹴込まれました。

屈辱と苦痛に満ち満ちた日夜に呻吟すること約四年、奴隷の資格を与えられたジーナは或朝、首都に送られて競売台上に立たされました。激しい苦役に益々引締った見事な女体は、かなりの競争の後

落札されました。

番号を消され、新たに奴隷登録番号を特殊塗料で背中と二の腕に刷込まれ、書類と共に所有主に引渡されます。冷く見据えている中年の婦人の前で婦人看守によって鼻環を初め全部の戒具を外され一糸、寸鉄も帯びない姿で、婦人の足許にひれ伏しました。

「じゃ、おとなしく奴隷勤めをさせて貰うのよ。いいかい？」

「ハハイ……御主人様、何卒……此の哀れな女奴隷を……御心のままに働かせて下さいまし」

「フン。私はね、お前の所有者じゃないわ。これから連れてってやるよ。お立ち！」

婦人は持った袋から手錠を取出します。嗚呼又しても手錠です。

悲しくなりますが奴隷の身、御主人が必要と思われ、いましめを受けるのは当然です。うっかり前で両手を差出して、忽ちビンタを受けました。後手錠、そして足錠も嵌められ、首に革紐をつけられて曳かれます。所有者の定った男女の奴隷達が、それぞれ戒具を施されて新しい境遇へ曳かれて行きます。街行く自由な人々を盗み見したジーナは早く自由の身になりたいと思い、これから始まる五年の奴隷刑を落度なく勤めようと考えました。曳かれた先は一見して判る娼家でした。相当大きな構えです。出来ることなら農家の奴隷になれたらと希っていましたが叶わぬ事でした。太ったマダムが女奴隷ジーナの所有者です。頭の前から足の先迄観察されます。

「フーン。仲々掘出物ね。いくらだったの？」

ジーナは薄々自分の運命をさとりました。しどけない恰好の娼婦達が二、三人、タバコをふかし乍ら眺めています。

「えーとね。家には、御嬢様方が五人いらっしやるのよ。女奴隷が



お前を入れて六人。けど其の中の一人はすぐ刑期が済むの。だからお前はその補充なのよ。御嬢様一人に女奴隷一匹ずつつけることにしてるの。ま、お前はね、髪が伸びたり、体の手入れしたりしなくちゃね。当分、下働きして慣れるといいわ。言っとくけどね、気に入らなけりゃ、直ぐ監獄へ追返すからね。フフフフ」

其の日から、マネージャー格の婦人の指図で、雑用に追い使われました。古いパンツ一枚をつけることを許され、口汚なく罵しられ乍らこき使われます。しかし、戒具は革の膝枷だけです。今迄の監獄の苦役に較べれば、まるで天国です。娼婦達はそれぞれ一人宛の女奴隷にかしずかれて右のものを左にもしない暮し振りで。日が暮れますと、娼婦達は女奴隷に世話させて支度し、艶やかに粧ってサロンに出ました。女奴隷達も自分の体を支度して、マネージャーの婦人に革の手錠を前で両手に嵌めてもらい、サロンの隅に立って客を待ちます。

やがて現われる男達、湧き上る嬌声。女奴隷達は革手錠の身をくねらせて必死に媚びを売ります。ジーナは客の靴を磨いたり、飲物等運んだりして懸命に立働き、明方近くなって漸く地下の奴隷部屋で寝ることを許されました。部屋へ行く前に革手錠を嵌められ、改めて分際を思い知らされます。部屋には粗末な藁蒲団が六、七枚敷いてあり、薄暗い電灯、入口は錠前のついた鉄格子です。室の片隅には小さな鉄の檻が二個おいてありました。何年振りかで敷物の上に横になる嬉しさ。手首に当る革手錠の柔かさ。鋼鉄の手錠の堅さとは較べものになりません。段々と分って来たことですが、革手錠にもいろいろ種類があります。今、ジーナの両手に嵌めてあるのは、両手首をそれぞれ別々の幅五センチ程の黒い革バンドで捲いて

締めつけて錠を掛け、左右を長さ二十センチ位の鎖で繋ぎ合せたものでした。その他には、一本の革バンドで重ね合わせた両手首を一緒に締め付け、両手首の間で四角な環を通して瓢箪形にし、手首を抜けない様にするものとか、又腰枷と組になっていて腰枷の二カ所に手首用の革バンドを固定したものとかがあります。

奴隷部屋の鉄格子が荒々しく開けられ、婦人マネージャーの叱り声、そして激しいビントの音と共に女奴隷が一人、蹴込まれました。

顔をしかめて起上がった女奴隷は中肉中背のブルーネットの美人です。首に鋼鉄の首環両手は後手に手錠を嵌められ、首環にグッと鎖で吊られています。両足首にも足錠が光っています。右肘のところに細い鎖で鉄の札を付けられています。よろよろと立ってワラ蒲団の所へ行きジーナの方を向いて足を投げ出して坐りました。

「あんた。今日来た新入りね。私、ホラ此の札の通り御家の女奴隷三号よ。フフフ、娑婆での名はマレーヌって云うの。あんた何の罪？ 刑期は？ 私ね、恋仇の女に毒を盛ろうとしたの。バレてさフン縛られて懲役八年。監獄に三年いたわ。ここで三年。あと三カ月程で済むのよ」

ジーナとマレーヌは、いろいろ話しました。

「あんたは私の後釜って訳ね。私が今、仕えてる女を受持たされるわ。此の御嬢様、仲々生意気で意地悪なのよ。泣かされ通し……」

「あといいわ。あと少しの辛抱だもの」

女奴隷3号は束縛を解かれた時のことを想像して、うっとりとした眼をします。

れてさ、夜は見も知らない男の玩具にされるのよ。初めはとても情けなくて辛くて……口惜しくて……。あんた手首ちよっとお見せ……」

手錠のあと、ずい分ひどいわね。ここじゃね、私達の体が売物だから、鉄の戒具は滅多に使わないわ。鞭も余程のことがなくちや当てられやしないからその点、楽よ。鼻環だって家の中じや大抵、勘弁して呉れてるわ。ああ、疲れた。横になろうと……。あつ、い、いたた……。矢張り仰向けは無理ね」

マレーヌは足の鎖を鳴らして寝返りを打ち、横向きになりました。「……フーッ……。くそっ。あと僅かなもんだから、少し位、枷のあとがついても構わないと云う気だろうねえ、こんな……鉄の戒具をはめやがってさ……。今日ね、客が一人も付かないのよ。今迄立ってただけど……。それでその罰なの。くそっ……。せめて此の後手錠が首に吊ってなきや、大分楽なのにねえ……。あーああ、監獄時代を思い出すわ……」

女囚ジーナの話 (6)

大分、陽も高くなった頃、叩き起され、膝枷のままの労役に汗を流します。他の女奴隷達は、それぞれの女達の部屋の掃除や身の回りの雑用にこき使われています。皆の昼食の世話を終え、台所の隅で六人の女奴隷達は残り物をあてがわれました。人間並みに手を使って食事できる嬉しさ！

午後、婦人マネージャーの手で右肘に鎖を締めつけられ6号の札を付けられ、全身の枷ずれのあとや、鞭のあとに塗薬を塗られました。それからというものは、毎日毎日労役の間に薬を塗られ、入浴させられ、体を整備させられます。枷や鞭のあとは日毎に薄くなり

マダムは目を細めて眺めては喜びました。日が経つにつれ、ジーナも様子が分り、仕事にも慣れて来ました。買物等で外へ連れられる時は、やはり嵌口具、革の首輪、腰枷、そして革手錠、革足錠を嵌められ、鼻環に鼻鎖迄つけられて情けない思いですが、家の中では膝枷だけで、今迄と較べて非常に楽です。女達にからかわれ、辱かしめられるのは口惜しい事ですが、奴隷の身ですから、その位のこととは我慢せねばなりません。約三カ月の後、ジーナの髪も大分伸びて来た頃、奴隷女三号は迎えに来た官憲の手に引渡されました。

「三号！　じゃ今日でお仕舞いにしてやるわ。裁判所で御言渡しを受けに行きなさい。困ったら何時でも相談に来るんだよ」

マダムは革鞭を振って最後の鞭を五つ六つ当てました。

「……ひーっ……ひーっ……ひーっ……マダム。有難うございました。御蔭様で再び人間社会へ帰らせて頂けます……」

三号奴隷は、官憲の手で、鋼鉄の首輪、後手錠、足錠、そして嵌口具を嵌められ、鼻鎖を曳かれて嬉しそうに鎖を鳴らし乍ら去って行きました。

「六号！　お前は今日から三号の後釜だよ」右肘の鉄札を付け替えられ、受持ちの娼婦に引き渡されました。源氏名スザンヌと呼ぶ三十才位の大柄な婦人です。大きなダブルベッドがある部屋で足許にひれ伏して絶対の服従と奉仕を誓わせられました。

「だいたい様子は知っているだろうね。容赦しないから、その積りでいてよ。ちよっと、その抽出あけて御らん……」

命令のままにあけた抽出の中には、鋼鉄製の手錠、足錠、首輪、そして嵌口具や革鞭、鼻環等がおぞましく冷く光って並べてあります。

「いいかい。気が向けば何時でもそんなものを嵌めてしまうわよ。ちよっと分際を覚えておいてやるうね。その手錠お貸し……」

後へ回した両手首に久し振りに鋼鉄の冷酷ないましが喰込みます。

「こちら向いて……ちゃんと坐って。いいかい、すぐ起上って御礼を云うのよ……。そら……」

額を蹴られて後へ倒され後手錠の身をもがいて起上り坐ります。

「……あ、ありがとう……ござい……ます……」

「フ、フ、フ、フ、もっとはつきりお云い！　そら……」

何度も何度も繰返され、全身に汗をかいてしまいました。

「ホ、ホホホ……口惜しい？　さ、手錠外して上げたわよ。手向いらどう？　フ、フ、フ、フ……そう、少しは分際が分ってるのね。コーヒー持っといで……。そして、これ洗濯してよ……」

その晩から店に出されました。

夕方、女達の入浴、食事、お化粧、そして着替えに奉仕させられた後、奴隷部屋の隣りで入浴と化粧をします。婦人マネージャーに監視されて、あくどい化粧を済ませ、派手な飾りのついたピンクのズロース一枚だけ身につけ、両手に革手錠を嵌められてサロンに出ました。

広いサロンの椅子に深々と坐っているイブニング姿の女達。女奴隷達は壁際に、そっと立ちすくみました。

肉体も容貌も一きわ光るジーナには直ぐ客がつかまりました。若い船員風の男です。見も知らぬ男に体中、撫でられ、札束と交換に婦人マネージャーから手錠の鍵を受取った男を案内して担当の女の部屋の隣りの室へ行きます。

「そら、手を出しな。外してやるよ。こんなもの嵌められてさ、可哀想になあ。けど仕様ないやね」

服を脱ぐ男の手伝いをし、命じられるままに種々の奉仕を強いられ、そして、おもちやにされます。少しでも気に入らねば遠慮会釈なしにピンタを喰う悲しさ。

「さ、手を出しな……」

今迄一緒にいた男の手で革手錠を嵌められ、何年か振りで味わった柔かいベッドを惜しそうに振り返り乍ら再び婦人マネージャーに引渡され、又サロンに立ちました。明け方迄に三人の客を取り、疲れ果てた体を奴隷部屋のワラ蒲団に横になったジーナは自分の境涯に悲しくなって涙が出ました。

女囚ジーナの話 (7)

担当の女スザンヌの意地の悪さには本当に泣かされました。身の回りの用にくき使われるのは諦めています、事々に難癖をつけて苛められ、口答はおろか、言訳すら許されない口惜しさ。何かと言えば、すぐ足蹴を受け、ピンタを喰い、犬や猫同様に扱われて辱かしめられ、退屈しのぎの慰さみ物にされるのでした。それに加えてジーナが売れっ子になったので余計です。女のねたみもあって、他の女達からもひどい扱いをされます。今日も今日とて、スザンヌの部屋へ集まった三人の女達にからかわれ乍ら、革手錠を後手に嵌められ、口で雑巾を啣えて拭掃除をさせられました。

「早くおしよ！フ、フ、フ、私達これから外出するのよ。靴を磨かなきゃ駄目じゃないの。お前も連れてってやろうかなあ」

三足の靴を磨かされ、跪ずいて穿かせます。

「ホラ、此の褌を締めるのよ」

与えられた黒革の褌をつけ、錠をおろされます。

「先ず首環ね。フ、フ、フ、マネージャーには断つてあるのよ。革のじやないわよ。冷いかい？」

ついで後手錠、足錠が嵌められ、足鎖は革褌の股下の中央に吊られます。嵌口具が喰い込み、後手錠は首環にグッと吊られ、最後に鼻環がカチリと嵌まりました。口惜しくて情けなくて、思わず嗚咽します。革製の籠を背負わされます。

「ホ、ホ、ホ、どう？気分は。たまにはね、こんな風にしてやらな」と為にならないわ」

女達は小気味良さそうに眺めて嘲笑しました。鼻鎖を引っ張られ街の中を曳いて行かれた先は映画館です。見物の間、入口の脇で浅間しい姿を晒された後、商店街を曳き回され、買物をしたまま背負わされました。喫茶店へ連れ込まれ、テーブルの側で正坐させられたり、衆人環視の中で路傍に坐って何度も顔を地面に打ちつけて赦しを乞わせられたりしました。奴隷の分際というものを全身に泌みて味わさせられた後、連れ帰られて息つく暇もなく再び追い使われるのでした。

「鋼鉄の戒具の味は、どうだったの？今日位のことじゃ、あまり痕もついてないじやないの。いいかい。あんまりつけ上ると承知しないわよ」

「ハ、ハイ……御言葉、よく分りました。決して……分際を踏み外しませんから何卒、御慈悲を……」

一カ月程経った或る晩、疲れていたせいもあって、ジーナは余りにもしつこい客の要求につい口答えしてしまいました。

愛 禪 通 信

藤 沢 久 (神奈川)

小生は三十五才の男子。貴誌により六尺禪ファンの皆様の多いことを知り、うれしさの余り筆をとりました。実は小生、禪という文字を見ただけでも興奮する位の愛禪党です。

十五才の時、銭湯でとび職風の印ばんでんを脱いだ見るからに男らしい中年の人が、きりりと結んだ六尺禪の筋肉の盛り上りを見て感激。以来、今日まで純白晒の六尺禪を一日とて欠かさず愛用しています。勿論、ユル禪は大嫌い。縄のように堅くしめ股間で二度ほどねじり、強い緊縛感からくる男らしい快感を肌感じて満足しています。

かぜ一つ引くことなく、いつも精力絶倫です。

九月号の東京のK・M氏のお話、ほんとうに同感です。小生一人で六尺禪一本となり自分の手足を縛って責めてみますが、愛好の士と一しよにやれたら……と、いつも残念でたまりません。是非、お便り下さい。小生、大の字に木に縛られ(勿論六尺禪一本で)禪姿の貴兄に思う存分、責められたくて仕方がありません。そのあと赤禪、黄禪を使って強く々々しばってほしいと思います。そんな状況を想像して日夜、興奮しています。それにしても貴誌に男性の緊縛写真の胸のすくような奴をのせてほしいものです。

同じ九月号の鎌倉、S・A様あなたの記事にも小生、唯々感動しました。小生もあなたと殆

「三号！お前この頃いい気になってつけ上ってる様ね、少し叩直してやるわ」

客の訴えを聞いた婦人マネージャーは冷酷な笑いを浮べ、ひれ伏して赦しを乞うジーナに、ゴム引きの猿股を穿かせ、奴隷部屋へ引立てます。ガッキと後手錠をはめ、首を厚い木製五〇センチ角の首枷で挟み、後ろで手錠をグツと吊り上げ、足錠をはめて隅の檻の内へ追い込みます。檻の中であぐらをかかせ、首枷の前部と足鎖の中央とを鎖で結んで締付器でジリジリと締め上げ、あの苦しい海老責めの姿にした上、扉をガチャーンと閉めて行ってしまいました。次々と奴隷部屋へ帰って来る女奴隷達の恐怖と憐憫と、そして小気味良さとの混った視線を浴び乍らジーナは口から泡を吹き脂汗を全身に滴らせ、ゴム猿股に便を洩らしつつ呻き喚いて苦しみ悶え続けました。女奴隷達が全部揃った頃、婦人マネージャーが入って来ました。

「三号。苦しいかい？」

「……ウー……ウ……ウ、ハ、ハイ……もう……ウ、ウツ……」

首枷と足錠を結んだ鎖が除かれ、ジーナは地獄の苦しみから解放されました。

「……フーッ……もう……肩が……ぬけそうで……」

「フ、フ、フそうかい。じゃ今度は反対にしてやろうね」

嗚呼、赦されるのかと思っていました。そうではありません。

今度は俯向けにされ、首枷はそのままで後手錠と足錠とを背中一つにされ、逆海老です。前よりは十分、楽ですが、半時間もしますと堪え難い苦しみに呻きます。

「少し静かにおしよ。こちらが迷惑するじゃないの。呻いたって同じだよ。」

読者通信

善は急げです。勇気を出して下さい。編集部の方々禪ファンに答えての傑作をどうぞお願いします

んど同じ性格で趣味も一致し、うれしい限りです。小生も六尺禪に晒の腹巻をして、その緊縛した何ともいえぬ感じを楽しんでいます。六尺禪は、あまり巾の狭いものは緊張感に乏しく普通巾の晒が好きです。又、腹巻は五巻以上は必要で胸にも強く巻くと力がこもって男らしくてよい。又、端を巻くときははじめに六尺禪の右端の部分にとおしておき、腹巻の終りと一しよに結び、六尺禪に上め上げるようにしている。これは深呼吸吸のたびに精力が湧き、誠に気持ちよく男子の本懐を覚える次第。又、六尺禪をしめる前、腹をへこまして息をとめておくことも一つのこつです。

豊橋の角田様、あなたの御意見も嬉しく感じました。殊に「禪一本を強制させられ働かされ

る所がほしい」には同感です。小生は砂浜で六尺禪一本となり若し禪の漁師がくれば、それにまじって地曳を引かせてもらい又、砂運びの半裸のたくましい男性の人夫がトラックに群がると、我を忘れて六尺禪のまゝとび出して手伝わさせてもらう。皆が異様な目つきで小生を眺めるが、それが又、感激の極み。豊田様、おたより下さい。

小生、銭湯の混雑した男湯の大鏡の前でサッと六尺禪一本になる感じは何ともいえぬ男らしく嬉しく、又、入浴後、衆人の前でキリリと六尺の白禪をしめ上げてゆくときの感じは何ともいわず好きです。禪ファンの皆様、どうぞ小生も仲間に入れて下さい。禪ファンの時代物男責ファンの方、是非思いついてお便りを下さい。きっと幸福が

二十才そこそこの四号奴隷が呟鳴りました。全身の脂汗を絞り取られる苦しみ一夜を過ごし、漸く檻から出され身じまいして女の部屋へ行きます。

「フ、フ、フどうしたのさ。顔がゆがんでるわよ。おお、おお手首がはれ上っちゃって……。首もすりむけてるじゃないの。ホ、ホ、ホ、ホ、やられたのね。可哀想に……」

婦人マネージャーに命じられたまま女に一部始終を申し上げます。

「ホ、ホ、ホ、ホ……そりゃね、私達ならそれで通るわよ。お前は通らないの！身分の相違よ」

「……ハ、ハイ……それで……御嬢様から……鞭を半ダース……頂戴する様にと……。お願い申し上げます。お手数でございましたようけど……」

「フ、フ、フ、フ、そうお。じゃ鞭を出して……。ついでに手錠も……」女奴隷達が集ったサロンで、手錠の嵌まった両手を頭上に差上げ、両股を大きく開いて立たされ背中一つ、両尻一つずつ、両脇腹から胸にかけて一つずつ、そして内股一つずつ、計七つの革鞭を当てられ、ジーナは身をくねらせ悲鳴を上げました。

其の日は夕方迄奴隷部屋で休む事を許されましたが、日が暮れますと卑しい恥ずべき勤めに駆り出されます。入浴の際、鞭あとにしてみる湯の熱さ。鞭あとと柳すれに薬を塗り、革手錠姿も情けなく、ズロース一枚でサロンに立ちました。

「どうしたんだい？此の体は……」

顔馴染みの客がジーナの革手錠を外してやり乍ら訊ねました。

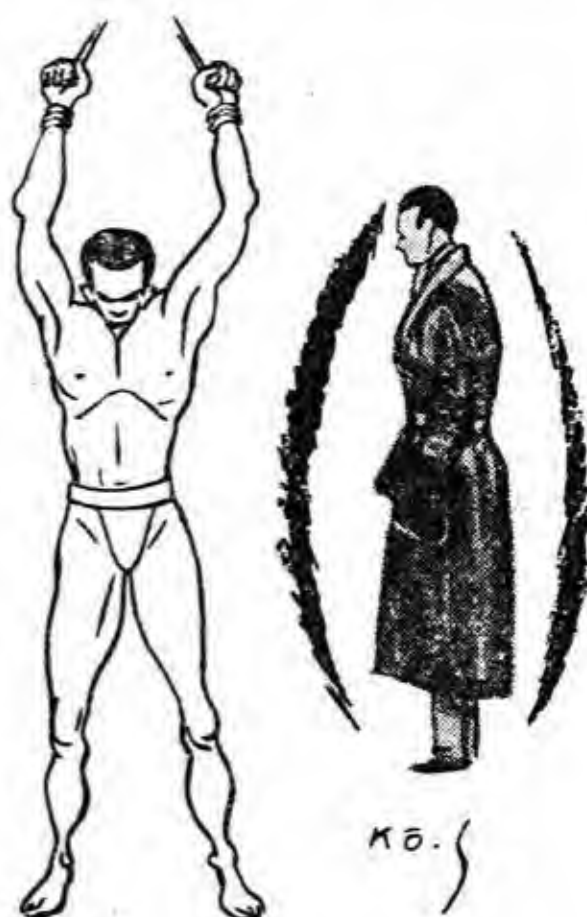
「……鉄の戒具と鞭のあと！分ってるじゃありませんの。あーあ、奴隷の身は辛いわ」

(未完)

新連載小説

狩 獵 者

(第三回)



新 佐^さ 度^ど
 川 工・画 槐^{かい}

体 操 教 師

××中学校の運動場では、初冬の陽射しをうけて、徒手体操がおこなわれていた。

体育担任の高津恭一は、号令台の上から、道路に停まっている乗用車の屋根が眩しく光るのを一度だけ見たが、その自動車^{くるま}がなんと、という名前なのかも知らなかったし、まして、どんな人物が乗っているかは関心のほかだった。

ハンドルにもたれた司慎之輔は、ランニング・シャツに、トレーニング・パンツを着け

た若い体操教師の躰を、もうさっきから飽かずに眺めている。

助手台の山科は、たばこをふかしながら、ときどき慎之輔の視線を追う、

(今度はあの先生か、かわいそうに——)

と胸のうちで呟いたが、それは、べつに、同情してのことではなかった。

終業のベルが鳴ると、慎之輔は、キイを回してエンジンをかけ、アクセルを踏みこみながら、

「二十五、六かな——。名前と住所、それに家族構成を調べるんだ」

と云った。

第六時限の体育の授業が終って、更衣室へ入った高津が、サポーター一つになったところへ、慌ただしく用務員が駆けこんできた。

「高津先生。大変です！奥さんが——」

「家内が？」

「自動車事故で、怪我をされたそうです」

「なんだって！本当か」

高津は、サポーターのままズボンをはき、ワイシャツもじかに着て、上衣を掴むと廊下にとびだした。

玄関にいったみると、サン・グラスをした

運転手ふうの男が待っていた。

「高津先生ですか？」

「そうだ。家内が怪我をしたって？」

「もうしわけありません。実は私が——」

「君が轢いたのか！」

「へえ、でも、幸い軽傷でして——」

それを聞いて、高津は、いくらか気持が鎮まったものの、妻のようすを見るまでは安心できなかった。

「あの、病院へご案内いたしますから、どうぞ、すぐ」

男に云われて、気ぜわしく靴をつっかけた高津は、灰色の小型乗用車を見て、フトどこかで見たような自動車だと思ったが、そのことは、それきりで忘れてしまった。

「こういう場合には、警察から連絡のあるものと思っていたがね」

自動車が動きだすと、高津が云った。

ハンドルを握っている杉田はヒヤリとしたが、高津は、なにも、疑念をもったわけではない。

「病院は遠いのかい？」

ふたたび高津が声をかけたときは、それから二十分あまりも経っていた。

「へえ、いえ、もうすぐで——」

男は口数少く云ったが、いかにもあいまいな答えかただった。

（いったい、妻は、どこではねられたんだらう？）

高津の脳にそんな考えがかすめたが、やっ（変だ——）と感じたのは、自動車が急に曲がって、病院らしくもない建物の門を、徐行もせずに入ったときである。

急停車のショックで、前のめりになった高津が頭をあげると、いつのまにか、自動車の外には二人の男が立っている。

「オイ、どうしたんだ。ここは、病院じゃないだろう？」

性急な高津の問いに、ふり向いた杉田は、「先生。もうじきばたいたって無駄ですぜ。」

気の毒だが、諦めたほうがいいね」と云って、サン・グラスをはずす。

「なにを云ってるんだ、君は。家内はどこにいるんだね？」

「安心しな。奥方は無事だよ」

「なんだって！じゃ、君は、嘘を云ってたのか」

「そのとおり。気のつくのがちっとばかり遅かったね」

「しかし、なんでまた——？」

「今に判るさ。とにかく、おりてもらおう」

外国には、念の入った悪戯で欺し、相手をおどろかして楽しむ、ジョークという遊びがあると聞いている。それをまねたにしては、妙に陰性だし、第一高津にそんなジョーカーは心当りがなかった。

高津がしかたなく車外にでると、二人の男に、いきなり左右から肘をはさまれた。

「なにをする！」

「こい。親分がお待ちかねだ」

山科がグイと腕をひく。

高津は、教師になってからは、腕力をふるったことはないが、逃げようとすれば逃げられる自信はあった。

だが、それは、危害を加えられそうになつてからでも遅くはない。なにも知らぬ高津は多少の好奇心もてつだって、ひとまず彼らのいうなりになってやろうと心を決めた。

警視庁刑事、速水錬太郎は三十年前、三十才で部長に昇任し、現在は八名の部下をもっている。上背のある肩巾の広い体軀は、柔道剣道とも、全国大会へ出場するほどの練達者として領させるが、渋い好みの背広姿は、部長刑事と聞いても、ちよっとピンとこな

い。眼つきの悪いのが刑事の特徴のようにいわれているが浅黒い皮膚の、やや粗野な感じの彼の貌の中で、むしろ眼だけは、人懐っこく優しかった。しかし、その眼も、ときに驚のように鋭く光るのを、少数の人々は知っていた。

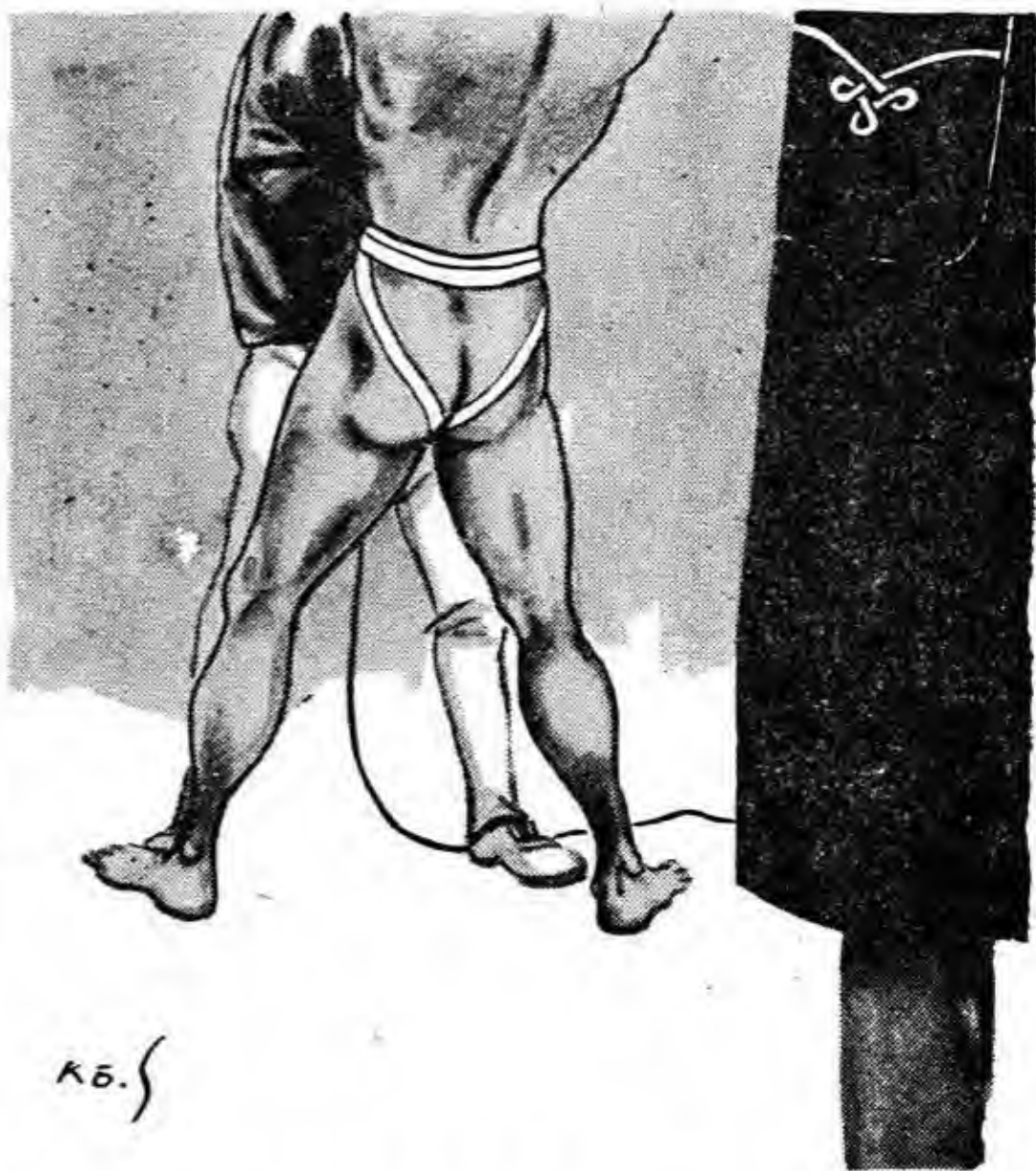
キャバレー「夜光塗料」事件は、速水刑事の担当ではなかったが、偶々別の事件の張込みで現場にいわせたので捜査本部ができて、一応、彼の手を離れてからも、脳裡から消え去ることはなかった。

被害者がやくざであるところから、仲間同士の怨恨による殺人だとみる線が有力で、

捜査のすべりだしは順調のように思えたが、浮かびあがった数名の容疑者も、クロだと断定するきめてがないままに、時日が経過していた。

速水刑事は、捜査本部とは見解の異なる考えをもっていたが、確信はなかった。

いってみれば、彼は、犯人の展覧性に拘っ



ていたのだ。ワザワザ危険を冒して死体運び、公衆の面前に晒したやりかたには、残忍さのほかに、もっとなにか複雑な心理が潜んでいるのではないか。

(俺には、どうも、やくざ同士の単純な殺人とは思えんのだが——)

今日も、速水刑事は、いきつけの銭湯の浴

槽に浸かりながら、そんなことを思った。

第二の獲物

高津恭一は、おちつかない気持で、なにかが起ころのを待っていた。

卓子にいきたなく腰かけた南が拳銃を弄びながら監視している。

緊迫感に息づまりそうになった

高津は、

「——質問してもいいか？」と云ってみた。

「かまわねえ、云ってみな」

「さっき、親分とかいっていた、

この主人は、なんて名前なんだ？」

「司慎之輔」

「司……？」

もちろん高津の交友範囲にそんな名前はない。しかし、変名ということもある。いくら考えてみても、心当りのないのは同じだったが、ジョーカーは意外な人物ほど効果があるものだ。ひよっとしたら、もう忘れていた小学校時分の友達が、俺をからかっている

気になったのかもしれない。そういえば、ずいぶんと悪戯好きな少年もいたからな——。

「なにを考えてんだ？」

南は、縞のハンカチで拳銃を磨きはじめながら、高津の顔を覗きこんだ。

「うー、イヤ、もう一つ訊くがね」

「なんだヨ？」

「司氏は、なぜ俺を誘拐したのかね」

「きまつてるさ。あんたが欲しいからヨ」

「つまり、ジョークの相手としてか」

「ジョーク？ そりゃア、なんのことだい」

「まア、いい。とにかく、早いとこ司氏に現れてもらいたいものだね。こうして焦らされるのはたまらないよ」

「先生は、てんで平気なんだナ」

「平気？ そうでもないがね、まさか、殺されるわけでもないだろう。大の男が、そうビクビクはできんさ」

「ところがね、先生。あんた、殺されるかもしれないねえんだぜ」

「なんだって？ ハハハ、そうか、君もジョークの仲間だからな。ギクリとするような冗談を真顔で云うわけだ」

「フフフ、あんた、さっきからジョーク、ジョークとわけの判らねえことばかし云ってる

が、ここへ連れこまれたらもう運のつきさ。ウチの親分は、残忍非道、鬼よりも恐ろしい人だからな」

南は、もともと荒っぽいことが好きだが、根は単純で邪気がない。しかし、慎之輔の獲物に対しては、ひどく残酷になった。彼にとって、慎之輔の愛するものは、すべて敵だった。山科や杉田が、いわば義務的に被虐者を虐げるのに、南だけは、火のような憎しみで責めに熱中した。

南は、高津の男らしい貌や、逞しい臍を、できることなら、自分の手で抹殺してしまいたかった。

南は、不意に拳銃を前にかまえて、高津の心臓に狙いをつけた。それは、わざと冗談らしく、ジェスチャーたっぷりの動作だったが引金にかかった指には、本当に力がこもっていた。

笑おうとした高津は、南の眼に殺気のようなものを感じて、ハッとした。

そのとき、司慎之輔が広間に入ってきた。銀鼠色の縁どりをした黒いサテンのガウンを着ているせいか、端正な面は、血の通っている人間かと疑うほど蒼白く見える。

高津は、慎之輔の貌から、記憶をひきだそ

うとけんめいになったが、どうしても駄目だった。

それでも、高津は、思いきり悪く、

「あんたは、もちろん、僕を知っているんだろうね？ ところが、僕には、どうしても思いだせない……」

と、半ば呟くように云った。

慎之輔は、微笑して、

「確かに俺はあんたを知っているよ。だが、つい最近、知ったばかりだ」

「……？」

「××中学で、体育の授業をしているあんたを発見したんだ」

「……！」

「ハハ、おどろいたようだね。あんたは、さしずめ、昔の友人かなにかのジョークにひっかかったとでも思ったらしいが、残念ながらその推測ははずされたわけさ」

「よく判らんが、つまり、あんたは、なにか用があつて、僕をここへ連れてきたんだな」

「そのとおり」

「それなら、別の方法もあったんじゃないのか」

「穏かにおいでを願うというわけか。だが、それには時間が必要だ。俺は生来、気が短いん

でね、てっとり早く、非常手段をとったんだよ」

「それは、まあ、いい。ところで、用というのはなんだ？」

「あんたは先生だ。ものわかりがいいだろうから、話そう。俺はサディストさ。気に入った男を、思いのままに責めるのが趣味でね。困った病気だが、なおしようがない。俺の眼についたのが、あんたの不運だった。男らしく諦めてもらうんだね」

高津は当惑したように眼をしばたいた。彼の脳が理解できるのは、「サディスト」という言葉の意味だけだった。

「南、先生を地下室へご案内しな」

そう云った慎之輔の声で、高津は、はじめて身の危険を感じた。

「オイ、立ちな。サッサと歩くんだ」

拳銃の先で背中を突かれ、しぶしぶながら歩きだした高津は、なんとかして逃げだす隙をみつけようと神経をとがらせたが、油断から時機を失した悔いが、次第に絶望を濃くしていくだけだった。

地下室のヒヤリとした冷たさに、高津は微かに身顫いした。

「オイ、裸になんな」

そういわれて、高津はさすがにためらったが、南の拳銃を恨めしそうに見ると、諦めて上衣を脱いだ。

慎之輔は、ガウンのポケットに両手をつこんで、ジッと高津を見つめている。

山科と杉田もおりてきていた。

ワイシャツを脱ると、健康そうに陽灼けした高津の上半身がむきだしになった。学生時代「吊り環」と「鉄棒」が得意だっただけに肩から胸にかけての筋肉の隆起は、とくに見事だった。

「お次はズボン。早くしな」

急かたてられて、高津は、今度こそ本当に困惑した。ズボンの下には、サポーターしかないのだ。

「ズボンは勘弁してくれないか？」

「男のくせに恥かしいのか」

「イヤ、サポーターしかつけてないんだ」

「そんなことは知っちゃいねえよ。脱げつつたら脱ぎゃいいんだイ」

「しかし……」

サポーターは元来、下着とは違うから、それだけではいかにもぐあいが悪い。

「まだグズグズしているのか。脱がなきゃむりにも剥いでやるぜ」

「しかたがない。脱ぐよ」

高津は、怒りを洩えた声で云ってベルトをはずした。

「まだまだ、そいつも脱っちまうんだ」

「馬鹿云え！」

高津が思わず前を押える。

「ちえッ、せわのかかる野郎だ」

焦れた南が手をのばそうとすると、

「待て」

と慎之輔が制した。

「それはいいだろう。先生だからナ」

ゆっくりと後へまわった慎之輔の視線を、痛いほど背面に感じながらも、高津は、最少限度に軀を被うものが残されてホッとした。もしパンツだったら、それを許されたかどうかは疑問だから、こうなってみると、サポーターのままであったことが、かえってよかったようなものだった。

電 流 責 め

南の手に拳銃がある限り、高津は、どこまでも、いうなりになるよりしかたがない。

控室から第一拷問室へ入ると、杉田が、三メートルぐらいのロープの両端を、それぞれに、高津の左右の手首に括りつける。それか

ら、天井の滑車からさがった鉤にロープをかけ、高津の手が万才の恰好になるまでひきあげた。

寒さのためか、高津は、躰が小刻みに顫えるのを止めることができなかった。

「顫えてるな。恐いのか？」

慎之輔が、からかうように云う。

「いや、寒いだけだ」

「そうか。じゃいますぐ暖めてやろう。電気だな」

高津はアルジェリアの兵士が、電流による残酷な拷問をうけたことを、なにかの本で読んだのを思いだして、ゾツとした。

はたして、杉田が準備室から持ちだしてきたのは、幾巻きかの電線だった。

高津は「勘弁してくれ」と云いたいのを、やっとながまんしていた。いまさら哀願したところで、ききいれられる筈もなかったし、嗜虐趣味を充たすためだけなら、拷問とはいっても、いわば遊びに属するものだろう。電流とは気味のいいものではないが、生命に危険のないほどの弱い電流なら、なんとか堪えられそうだ。

思えば、なんとも奇妙なはめにおちこんだものだが、もうこうなったら、なりゆきに委

せるしかないと覚悟してしまおうと、案外、冷静にはなれた。

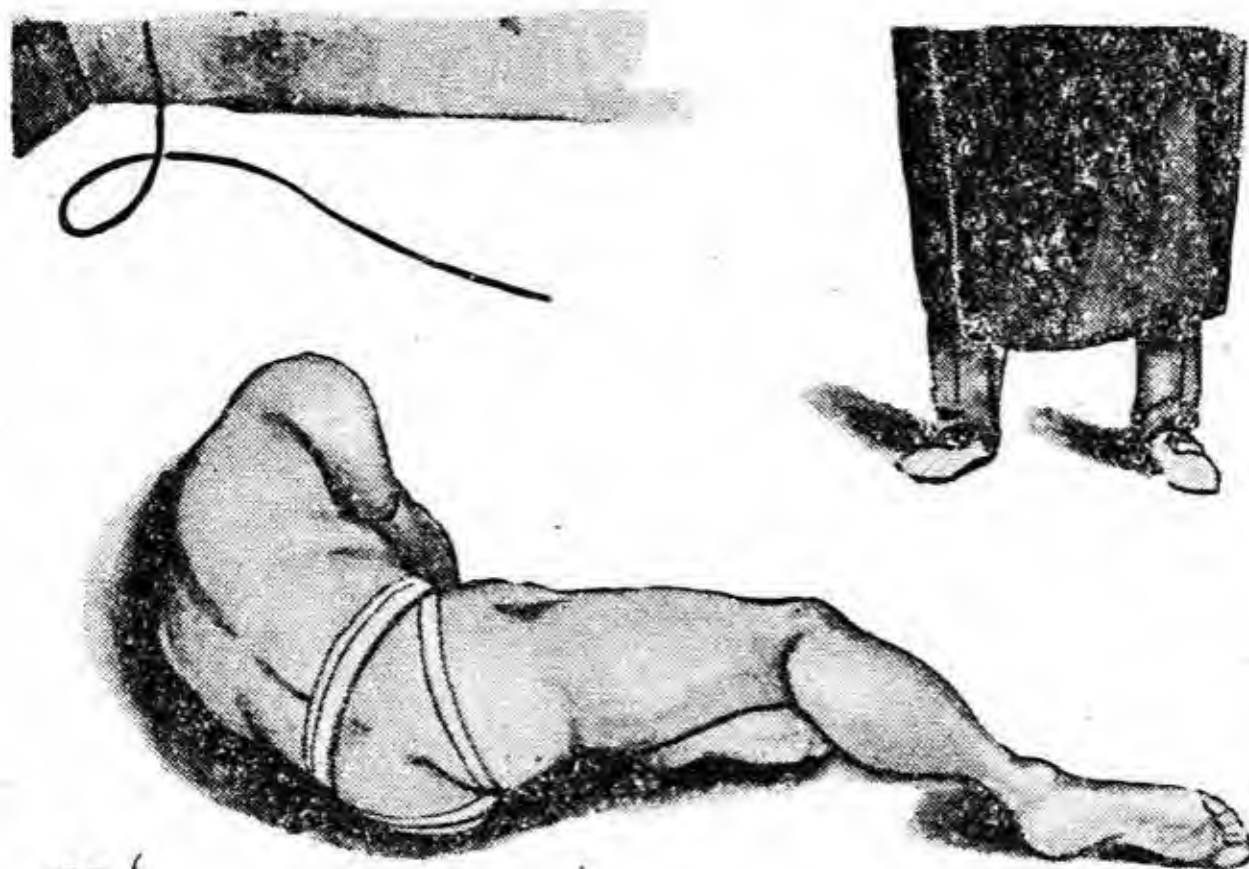
しかし、この屈辱は赦せない。司とかいう白哲の仮面紳士め、必ず人権侵害で告訴してやるぞ。

勃然と怒りを表した高津の顔は、いかにも不敵な面がまえに見えた。

「ホウ、意外と度胸がいいんだナ。先生でも体操教師となりやア頼もしいや。その姿を、あなたの生徒たちに見せてやりたいよ」

慎之輔が愉しげに云い、そのまに、プラグを壁のコンセントに差しこんで、杉田は、用意のできたことを告げた。

杉田が手にしているのは、ガス・ライターに似たもので、絶縁物質でできた柄からコードが続いている。柄から先は、三センチぐらいの細い金属になっていて、その部分に電流が通じているらしい。



杉田が近よると、高津は眼をつぶったが、とたんに「あッ」と叫んだ。

杉田は、高津の腹に当てた金属棒をすぐに離すと、脇の下につけ、次は股、そして臀部と、二、三秒ずつ接触させては、手当り次第に場所を変えていった。

そのたびに、高津は、軀を硬直させ、「うッ」「うッ」と唇を噛んでいたが、それも半分は恐怖心からで、電流そのものは、かなり弱く、その気になれば、黙って堪えていられるものだった。だが、いくら低圧電流でも、間断ないショックが続くと、全身が自分のものでなくなるような不快感で、ついには堪えきれなくなる。もし、それが長時間におよぶならば、あるいは発狂してしまうかもしれない。

「あああ、も、もう、やめてくれ！頼む、助けてくれ、助けてくれえ……」

突然、高津は、身をふりしぼった。

「ハハハハ、こんなのは子供だましさ。これから、本格的な電流責めだ」

「なんだと？！まだやるのか！もうよしてくれ。俺は、あんたの玩具じゃないんだ」

なんともやりきれぬ責苦から、やっと解放されて、ホッと息をついたのもつかのまだった。高津は憤然として喚いたが、その顔はすぐに泣き顔になった。

「救してくれ、頼む……」

「先生が、そんな顔をしちゃアみつともないな。なアに、恐がることは、ありゃアしねえよ。高圧電流を通すわけじゃない。命に別状はないってモンだ。いっぺんに殺したんじゃ楽しみが少なえからナ」

慎之輔は、そう云って山科の手許を見る。

山科は二本の電線の裸にした端の部分で、高津の腕と脚へ、別々に巻きつけた。

尋問のための拷問なら、自白することで助かるみちはある。だが、高津の場合は、逃れるすがまだったくないのだ。

山科の指がスイッチにかかる。

次の瞬間、鋭い悲鳴が起こり、高津の軀は跳ねあがった。

数秒で電源は断られたが、百ボルトの放電は、高津の五体をひき裂き、電撃の去ったあとも、意識は朦朧としていた。

ふたたびスイッチが入られる。

「ぎゃあーッ！」

人間ばなれのした絶叫をあげ、吊られたロープを中心にして、まるできりもみするよう苦悶した高津は、放電が終ると、痴呆みたように開けた口から、ダラダラと涎を垂らした。

山科は、無表情で機械のようにスイッチを

操作する。

高津は、もう、電気仕掛で叫んだり動いたりしているようなものだった。放電は、十秒ぐらいの間隔で繰り返されたが、電流が断たれて、再開までのあいだは、死んだようにブランとしていた。

慎之輔が、中止のサインをだしたのは、高津の軀に、筋肉の弛緩が歴然と現れはじめたときだった。

鉤からはずされた高津は、冷たい床に崩れたまま身動もしない。

「南。サポーターをかえてやれ。俺ので、新しいやつがあった筈だ」

スポーツをやらぬ慎之輔が、サポーターをもっているのには理由がある。彼は、拷問執行にあたっては、必ず下着の下にサポーターをつけることにしていたのだ。

汚れたサポーターをはずされても、高津はすでに、羞恥を感じなくなっていた。

「みんな、部屋へひきあげる。一時間後に、またここへ集まるんだ」

慎之輔の命令で、山科たちは第一拷問室をでた。

「親分は残るのかな——？」

階段をあがりながら、南が独り言のように

眩く。

そういえば、木島のときも拷問から処刑まで何時間かの空白があった。あのときも、もしかしたら、慎之輔は寢室から独りで監禁室へおりていたのかもしれない。

「オイ、南、なにをボヤボヤしてんだ。早くあがってこい」

われしらず立ち止まっていた南は、山科に上から囁鳴られて、妙に狼狽すると、

「大丈夫かな、親分一人で」と弁解するように云った。

「心配いらねえよ。あの先生は半死半生だ。一時間ぐらいのあいだ、身動きもできねえ

さ」

口笛でも吹く調子の杉田の言葉に、南は、「畜生……」と低く呻いたが、それは、山科にも杉田にも聞こえなかった。

処刑のときがきた。

泣き喚く高津の口に、ボロ布が押しこまれ猿轡で塞がれる。後手に縛って、仰向けに床へ転がした高津の軀を南が押さえつけ、杉田が、両脚をむりにあげさせる。そうして、山科は、裸電線を、高津の直腸へ深く挿入した。

尻から電線を垂らした高津は、柱に縛りつけられ、山科が、もう一本の電線をその頸に巻きつけると、それで準備は完了した。

悦唐雨ざらし

あとは、鉋を押すだけだ。

「親分。サポーターをかえてやりますか？」

高津の股間を見ながら、南が訊くと、

「その必要はない。そのままのほうが、電流が通りやすいからな」

慎之輔は、わざと高津に聞かせるように云った。

高津は、とめどなく流れでる涙や脂汗で、ほとんど全身を濡らしていた。拷問で疲労困憊しているとはいえ、外見上にはなんの変化もなく、体操で鍛えた逞しい体軀は、それが瞬時にして死体になるとは、信じられぬ美しさだった。

(以下次号)

天星社代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13)印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せっかん)

3枚1組 二五〇円

寢室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

悦唐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

行 燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円



秀緒の待って いるもの

藤山秀緒 文と画

○
秀緒は、いま、乗馬ズボン姿に身を固め、乗馬服姿の沢山のフォトや、奇クに囲まれて姿見に向い、頬を染めて吾が姿のくねり悶える有様を、じっと見つめています。

モーリン・オハラが長靴をふみしめて立つそばには、高千穂ひづるが馬上からほゝえみ、高倉みゆきが白い乗馬ズボンの股を割って拳銃をかまえた隣には、グレイス・ケリーが、乗馬ズボンのポケットへ手を入れて考えこんでいます。

拙い切腹画が散り、乗馬ズボンがひろげられ、長靴が倒れ、足のふみ場もない一室の鍵は、砦のような堅固さで秀緒の秘密を守ってくれるのです。

○
オールスターゲームの終りに、最優秀選手の張本さんが、オートバイを貰ったとき、私の双眼鏡は焼きつくようにある一点を凝視しておりました。

真紅のヘルメット、真紅の革ジャンパー、革ズボン、編上長靴に身を固めた同性の姿を

みとめたからでした。

私は此の時ほど、特別席に感謝したことはありませんでした。双眼鏡は、苦もなく此の勇ましい女ドライバの革づくめの服装を、大きくく捉えてくれたのです。

オトキチ・クラブとかの女性の方という。その女ドライバが、張本さんに乗せて、オートバイを駆ったとき、秀緒のストラックスは汗ばみ、双眼鏡を持つ手は激しくふるえておりました。

あゝ、この姿で、腹を！

そう思ったとき、私は、思わず、うっつ、と口走ってしまいました。

周囲の人は、きつと、張本さんのファンと思ったことでしょう。でも、恥しくて、意味もなくせきこんだりして紛らわそうと必死になりました。

新聞に、そのシーンがのるかと思っただけでしたが、勇ましい女ドライバーをのせたものはとうとう見当りませんでした。

革の男装は、サド、マゾ、フェチの極致と私は思っています。四馬孝さまのすばらしい筆で、あの女ドライバーを描いていたと聞いたら……。こんな希いに身を灼く私です。

○

終戦時、満洲で、看護婦の切腹に立会ったと云われ、探偵までつけて私に通信をもとめられたS氏のお便りによれば、乗馬ズボンこそ穿かないが、看護婦の正装（冬服）に身を固め、前ボタンを外して肌を寛げ、介錯を断って腹かき切った河村さんという婦長の死

は、私の割腹描写と殆ど同じようだったそうです。

S氏は、これをもとにして、乗馬ズボンシリーズを書いてくれ、と云れます。

でも、いま迄のものと、あまりに似すぎていたので、かえって構想がまとまりにくいのです。

たとえば、突立てた瞬間、彼女は陶醉に眼も輝き、オウツと云う突立てる気合につづいて、悩ましげに、ううっ……。と云った。とS氏のお手紙に書かれています。

制服の肩を激しく上下させつゝ、彼女は、「うっ、うっ……」と刃を右へ引廻していましたが、この時、脱糞したらしく、異臭がたちこめ、多量のためにスカートを伝うので、甚しく憐れだったそうです。

河村婦長は、切りつゝ是に気づき、恥しい、恥しいと身悶えしつゝ、力尽きて、あと一息のところまで俯伏せに倒れ、ウーッ、ウーッと絶叫、スカートの裾を乱してのたうち回り紺の制服は血まみれとなり、腸をつかみ出すつもりか、左手を傷口まで持って行くが、その度に体がすくんで手は傷口へ入らず、のたうつ度に刃の突込まれたあたりから、血が床へつたわる凄惨さ。

恥しい、恥しい、と呻きの間に繰返しつゝ、血と汚物の中を這い回る姿は、S氏にとっては、いま思い出すと、激しい興奮にかられる光景だったそうです。

原因は、過度の責任感からで、いまになって思えば、若い士官だったS氏に河村婦長が愛情を感じ、敗戦で、遂げられぬ恋と思いつめたとき、引責の形で、憧れの君の前で自決を強行したのではないか、とのことでした。

中尉殿の目の前で死ななくとも、ゼツタイに何処かで自決してみせる。と云うので、やむなくその死を見届けることになり、S氏はその時から、切腹に激しい興味を抱くようになられたそうです。奇クに私の女腹切シリーズがのっているのを最近発見され、やむにやまれぬ気持ちから住所をしらべた。とのことです。河村婦長は二十九才（満か数え年か不明）とのこと、御両親は奉天に居られたとか聞きました。この題材は「脱糞」という、ヤマ場があるのですが、乗馬ズボンを穿かせてしまえば、その光景は迫力が減りますし、また、このようなお気の毒な様子を、フィクションにして弄ぶことは、亡くなられた方にわるいと思うので、この題材で書くことは諦め、S氏へお詫び旁々、同好の皆様へ御報告



して、河村婦長の御冥福をおいのりしたいと思うのです。

○

U夫人の、切腹フォトは、御主人の外遊中に、セルフタイマーで写されたとか、血は、ココアをといて使い、乗馬ズボン一着を穿きつぶす決心で、一週間にわたって凡ゆるポーズを写され（奇クのシリーズをもとにして）自分で現像、引伸しもされたと云う労作ですが、サングラスをかけているので表情がよく出ていないのです。お返事は差上げておきましたけれど、もしかすると、同じものを奇クへお送りになるかもしれないので、あれは私ではないことを申添えておきます。

○

一月号「或る女のカルテ」のさしえ、杉原虹児様と思いますが、すばらしいです。題字カットの、トレンチコートでフードをかぶり、斜後向きに立ったポーズが、哀婉なプロローグを奏で、次の頁にある片膝ついた正面の身構えが、物凄い迫力をみせています。ああ、あの表情、妖しいプレイに憑かれた女の、かなしい一念が、踏みひらいた乗馬ズボンのヒダや、肩のこわばった様子、くぼんで、思いつめた美貌の、そこはかといかげりにくっ

きりと描き出され、ヒロインの激しい息遣いが、いまにもきこえて来るように思われます。

私の拙い作品の中で「飛行服姿の女腹切」「乗馬ズボンの女腹切」「秀緒の生活雑感」と、杉原様の絵は此の三つにしかございせんが、私の作品のすべてに、杉原様がいつて下さったら、いまま少し、私の拙い文章も引立たせていただけたのではないかといつも悔まれてなりません。何度が筆を折ろうとした秀緒にとって、今度の挿絵はすばらしいお年玉でございました。

○

絹川文代さんの全裸切腹のフォトがあるそうですが、これは、同じ女性の立場として、抵抗を感じます。絹川さんの、あの美しい、り、しい顔だけは、乗馬服を着せてみたいように思います。衣服はまわっていても、ポーズと表情さえ豊かなら、迫力は自ら湧くものでしょう。

絹川さんの乗馬服切腹フォトに期待したいものです。

○

川路竜子主演の映画「燃える上海」をテレビで見ました。川島芳子をヒロインにした映画で、川路竜子さんの乗馬ズボン姿や、背広

姿は、妖しい魅力に溢れていました。

でも、私は、高倉みゆきさんのような、女性的な雰囲気の方が好きです。やはり私は、「男」として女性を見るからでしょうか。なよくと、花恥しい若き乙女が、男のよな乗馬ズボンに長ぐつを穿いて、じっとその肌ざわりをたのしむ……と云ったフェティシズムの幻想に、秀緒は限りない興奮を感じてしまうのです。

美しい……。

そうです。その美しい乙女が、自分から進んで、死の苦しみにも挑む姿。なまなましく、そして熱っぽい秀緒の割腹描写！

このような呻きの連続が、何を意味しているのか、秀緒は知っている……。

そのヒロインが、美しく、官能的であればあるほど、秀緒の心は昂ぶり、筆持つ手に力がこもって行くのです。

私のような、下手な文章では、とても多数の方々に女腹切の三昧境に御案内出来るとは思えませんが、だからといって、私が筆を折ってしまえば、奇クからこの種のもの姿を消してしまうのではないかと不安でなりません。

一時の全盛時代には、沢山の寄稿家が居ら

れたのに、いまは私と法谷様、それに二、三の方がおいでになるだけです。

奇クが、以前企画なされた「切腹画帖」が申込僅少のために中止となり、それを境にして切腹記事が減ったことは、本当に残念ではありません。

でも、私の確信では、あの頃とは違い、奇クの購読範囲も旧に復しているのですし、ファンは増しこそすれ、減っている筈はありません。しかも、切腹だけは断然、奇クが先輩ですから、目先のサディズムばかりを追わずに、切腹ファンの増加に力をそぐべきではないでしょうか。

たとえば、いままで、私ばかりでなく、切腹記事には、挿絵らしいものは数えるほどしかつけていただけだったし、その絵さえも私の、グロテスクな苦悶の描写を、和らげて美しい興奮を漲らせてくれるような作品は、一、二の程度を出ておりません。

これでは、女腹切は、汚いもの、グロテスクなものとして読み飛ばされてしま

う他はありません。

外国でハラキリがブームを起こしそうな形勢の時、本家の奇クが、理解を示さないというのは惜しいことです。

永い間かゝってマイナスを作って来たようなものです。どうぞ此の後、腹切りの記事をつづけられるのでしたら中途半端な、お座なりな扱い方をせず、本気で人気挽回策を考えて下さい。私なりに考えた人気挽回策を書いてみます。お役に立てば嬉しくございます。

- ① 挿絵を杉原虹児氏にすること
 - ② 実験的に、グラビア一頁全面大に美しいモデルの切腹フォトをのせること。
- (出来れば、絹川文代さんあたりに、



あられもないごわくした飛行服か軍服、長ぐつを穿かせ、空想を誘うような魅惑的なポーズ)

- ③ 時代物を依頼執筆させること。(男装物は秀緒が書きつづけます)
- ④ 切腹ショウの企画
- ⑤ 切腹特集号の企画
- ⑥ 切腹史の連載
- ⑦ 女剣劇への働きかけ
- ⑧ 切腹物反対の投書に必要以上の神経を使わないこと

このうち④の企画が具体的に立ち、実行の日がきまれば、私も、サングラスと、レインコートのフードをかぶったまゝと云う条件が容れられれば参加させていたゞき、苦悶の実技をお目にかけるようになるかもしれません。

たゞし、舞台の上で、たゞ一回だけ、レインコート、乗馬服、乗馬ズボンの前を寛げ、短刀で十文字腹を切り、乳房をつかんで付け根を折り、倒れるシーンをお見せするにとゞめます。座談会やインタ

ビューもお断りします。

車で、御指定の処へ突然現れ、腹を切り、そして消えるのです。

でも、それは、女腹切りの人氣が、いまのようでは望めないかもしれません。

また、編集部に、切腹と、フエチに理解の



毎号貴誌の多色刷の表紙、楽しく拝見しています。全く休刊前の本誌を思い出させ吾々マニアには、一つの変化と進歩とを感じさせます。読者欄の中には復刊号のような白表紙で表紙にかかる費用を内容の充実の方へ回しては如何かという意見もありました。私も勿論、表紙よりも内容本位という説には賛成ですけれど、編集者に見れば一つの進歩を表紙の多色刷に求めたという努力は認めるべきでしょう。

次号の作品発表予定は是非毎月カコミ記事として出して下さい。又最近のKKは読者層を広くとり入れ、それぞれの傾向と嗜好をうまく調和させている点に注目しています。私

ある方を置かれることも大切だと思います。奇クにあき足らず、遙々尾行したり、探偵を頼んでまで私を励まして下さるファンの方々が有ることを思えば、企画次第では、他誌の追随をゆるさぬ性心理学の分野が手をひろげて待っているように思えてなりません。

輝やかしい一九六一年の門出に当って、秀緒の待っているものの中から、その一つからでも実現して下さったら、秀緒はどんなに嬉しいことでしょう。どうか、秀緒のこの切なる願いをかなえてやって下さいませ。

(おわり)

金色マニアの願い

岡 本

敬(東京)

自身他人の求める傾向も良く理解できて良い事だと思っています。私は本来、S及びコピー能動にあり、それらを適当に昇華処理して只今のところ、アブの妖しい世界に満足しております。

既に以前の号で発表したと思いますが、私の妻がMであり、私の唯一のフェテッシュが金色マニア(四馬孝氏がコルセットと皮革の光沢にフェテッシュを持っていることに共通点を持っている)であります。それ故、レザーフエテッシュの青森のS民と同様な傾向であると存じますが、本邦で金色マニアは小生と妻しかないのではないかと考えています。コピーロの一部としては糞尿の類ではなく、金

歯にたまった歯垢なり、口臭なりにエキサイトします。

二、三、金色マニアの告白物を書きましたがまだどこにも投稿していません。読みかえすとどうも自信がなくて、その中、若し編集部の方で、これならと思われるのがあれば投稿しましょう。只、写真なら相当数ネガが保存してあります。(勿論Yと見られるようなものは写しません) ローソク、竹、しぼりは一世紀昔の感があり、私には拘束感のある皮のコルセットや金製の鎖、金鎖類による束縛の方がより近代的なセンスを認めます。

巻頭のグラビヤ口絵の実写は殆ど縛りですが、これはしぼりマニアの多いことを物語っ

ているのでしよう。縛りも結構なのですが、今一步進んでピカピカ光る金の首輪とか二の腕にはまる腕輪、胴輪、足輪、それに鼻に通す鼻輪を強調したら一層精彩を放ってくるのではないかと存じます。クリスターにしても、別に特写をせずとも文中に実写写真を入れた方が遙かに効果的であると思います。無理であれば私一人の希望故、敢て申しませんが、旧号当時の佐治浩介、門田奈子の両氏は一時期か問題があったようですが、アブとしての執筆はすぐれているので、そのような事に拘泥せず載せるべきでしょう。原氏、天泥氏、森本氏の投稿も発表すべきと存じます。吾々はマニア同志しか理解できない存在ですのでこうした方を事件とは無関係に一つの価値として取上げられん事を切望します。

十一月号に於て特に興味深く拝読したものを挙げますと、佐治麻造氏の「宇宙のどこかで」です。(挿画は四馬孝氏) 新鮮な魅力と変った表現法や表による刑具の分類と各級の囚人のつけられる戒具など、大変複

雑でしたが吾々には魅力的なものでした。又外誌(ビサーやエキストアティキュ)から引用の写真もS並にレザー・フェティッシュにとっては、大層魅力的でした。あれと緊縛写真の差は認められるのでしよう。

短文ではありますが、一二頁の「奴隷娘(黒奴被虐の一コマ)」ルーキー・赤沢氏のものは、短いながら中々迫力がありますし、カットも今迄に見なかった金属器具のマテリアルが画かれ新鮮に感じました。時代物の腰元の責は、もう魅力はありません。ミサイル

時代にふさわしい金属刑具の責、拷問責めなどの方が、きっと読者は期待して受け入れることでしよう。時代物、いわゆるチョンマゲ物、和服の責めは他の大衆雑誌にも広く見られます。KKも、これから新しく脱皮して変化がほしいところです。但し読者通信は貴重ですので今後はどんどん増頁してほしいと存じます。表紙裏の画は全然無意味です。何か海外の珍しいフォートが欲しいところです。次に特集記事としては、週刊誌に良く見る異常者の犯罪をKKなみのタッチで見つめた

記事が欲しいと思います。実話をKKの目を通して取り上げることです。但し、殺人狂なども早やアブの領分ではなく精神的な病理に入りますから論外です。アブ・センスとは変った美の探究であり、あくまで理性の上に立っての特殊な分野の開拓でなければなりません。あくまでも反社会的な行動とは一線を劃すことは言を俟ちません。

人間として多少のアブ心理を持たない者は一人もありません。それを正直に発表し当のアブマニアもそれによって昇華され、且つKK誌も文献誌として貴重な存在になってくると思います。



中国残酷秘史

蝸^{かつ}洞^{どう}王^{おう}嗜^し虐^{ぎゃく}録^{ろく}

塔婆十郎
淹れい子画

1

その夜も蝸洞王は、熊姫と化した碧花と衾を共にして、麻葉のような恍惚の夢をむさぼっていた。

と——遠慮がちに、扉を叩く音がした。蝸洞王は、もの憂くまぶたをひらいた。

「誰だ、かまわぬ、はいれ」

静かに扉をひらき、頭を下げて入ってきたのは、狡猾なる一の参謀、李梵忠だった。

「夜中、ご無礼つかまつります。——じつはただ今、城門前に、銀蛇姫とか申す旅の女芸人が参りまして、殿に珍らしい舞を献上いたしたいと、申しておるのですが……」

「銀蛇姫だとうなんだ、そいつは？」

「ちかごろ蝸洞王さまのご盛名をきき、とくに王さまに捧げ奉つる、蛇踊りとか申す踊りをよくするそうで……。踊りはともかく、美しい女です……」

美しい女、という語句に、とくに力をいれて李梵忠はいった。「そうか。よし、城内に入れろ」

美女ときいて、蝸洞王の心がうごいた。旅の女芸人とあれば、異国的な情趣もあろう。そういえば、ここしばらく蝸洞王の寵愛は熊姫だけにそそがれて、ひさしく他の女には眼をくれなかったのである。

蝸洞王が、夢呆宮殿と名づけた広間へ、案内の兵士に導かれて、銀蛇姫と名乗る女が、うすものの裾をなびかせて入ってきた。



なるほど若く、美形であった。

沈魚落雁、唇月閉花の形容にふさわしく、旅芸人らしく額のあたりに陽焼けはあるが、眉のあたり、鼻すじ、ひきしまった唇に、気

品すら感じられる娘であった。

「お目通りかないまして、うれしくぞんじあげます」

雲彩と花朵模様の刺繍をほどこした絹布の雲肩を妖しくなびかせて、銀蛇姫は蜷洞王に一礼した。その笑顔の艶やかさ。色っぽさ。さすが色ごのみの蜷洞王の身体が、ぶるぶるとふるえた。たちまち、ねむけも吹きとぶ。

「うむ。さっそく踊りをはじめろ」

蜷洞王は、ひげだらけの顔をくずしていった。

「かしこまりました」

金鈴をふるうような声でこたえと、銀蛇姫は楽の音につれて踊りだした。小さな唇をひらき、美音を発して歌い、そして踊る手足のかるやかさ。

紅のもすそに露しつとりと、

臍脂はほんのり枝に咲き

花のいのちは短かいけれど

怨みますまい吹く風を……

いよいよしなやかな手の舞い、足の踏み、まことに優美可憐な身のこなしだった。歌いながら、くねくねと、さながら蛇体のように屈伸する四肢は、蜷洞王をはじめ見物の一座を魅了する。

舞いながら女は、とみるまに七宝の帯に手をか

け、するすると解いた。身ぶりにつれてつぎつぎに衣裳を脱ぎずて、素肌になると、巧みに羽扇で隠しながら舞いつづける。

白い、というよりは銀色の肌であった。それが、しめりけを帯び、灯火に映えてぬらりと光る。不思議な美しさに、一座は声もなくとよめいた。

「なるほど、銀蛇姫とは、よくも申しましたな」

李梵忠が、膝をたたいて蝸洞王をふり仰いだ。

「うむ……」

蝸洞王は、この妖美あふれる舞踊に、息をのみ、盃を忘れて見惚れていた。

素肌の踊りは円柱に抱きつき、床の上を這いくねった。さながら本物の白蛇か銀蛇が木の幹から枝に巻きつき、地を這いまわることくであった。

銀蛇姫の瞳が妖しく光って、蝸洞王の顔を凝視した。そして、ふたたび歌いだした。

蛇の呪いと女の恨み

風が吹いても消えるまい

花が散っても忘れまい

憎い仇をうつまでは……

呪文のように低く、感情のこもった歌いぶりであった。

舞踊は高潮に達し、銀蛇姫は広間の四隅に点じられている灯火をつぎつぎに吹き消していった。周囲が暗くなるにつれて、肌の銀色はさらに増して、燐光に似た不気味な光りを放ちはじめた。

と——このときである。

「待て、女！」

ふいに、鋭い声で李梵忠がいった。いま最高潮の歌と舞踏の中止を命じたのである。

せつかくの感興をそがれた蝸洞王は、いぶかりと不満の表情を、李梵忠にむけた。

だが、梵忠はかまわずに、突き刺すような視線をもって立ちあがり、銀蛇姫の前へ、つかつかとあゆみ寄った。

「やい、女。お前のいまの歌、そして踊り、ともに呪いの心があらわれているとみた。憎しみのひびきに溢れている。おのれ、わが王に對して、叛意ある女とみた！」

語勢鋭い参謀の詰問に、銀蛇姫の顔色が、かすかに変じた。が、すぐにたちなおり、

「ほほほほ！」と笑った。

「お戯れはおやめ下さいまし。わたくしめがなんでそのような、大それた不遜の心を抱いておりましょう」

平然と、李梵忠を見返した。

「だまれ、女。うぬはなにやつだ、すなおに申せ！」

李梵忠の顔面が、赤くふくれた。旅の女芸人に、馬鹿にされたと思ったのだ。

2

「おい、兵隊たち、この女のからだをよく調べてみる。ぐずぐずするな！」

口をあげ、涎をながして蛇踊りを眺めていた兵士たちに、李梵忠

の叱声がとんだ。

「ははッ」

四、五人の兵士たちが、とびあがるように立って、銀蛇姫をとり囲んだ。手を取り、足をおさえた。

「あれ、なにをなさいます！」

女の表情が硬直した。兵士たちの手をふり払い、逃げようとした。もがいたとき、女のからだから、ポトリと床に落ちたものがあった。短刀である。

素裸で踊っていた女の、どこにそんな刃物が隠されていたのか。よほど巧みに肌の内側に隠しながら踊っていたにちがいない。

これを見て蝸洞王は、目玉をぎよろつかせて動揺した。

「殿、ごらんなさりませ」

梵忠が、おのれの眼力を誇るように、鼻たかだかといった。

逆に、短刀を見られた銀蛇姫の顔色が、さつと青くなった。

「こ、これは旅ぐらしの女芸人が、身を守るための懐刀。けっして意あつてのものではございません」

弁明したが、梵忠の疑心は晴れなかった。のみならず、ふてぶてしいとも思える女の態度に、いっそうの疑惑を抱いた。

「何者かの秘命を受けて、わが王のおいのちを狙ったに相違あるまい、どうだ！」

「め、めっそうもございません」

「泥を吐かねば、痛い目をみせても吐かせてみせようぞ」

梵忠は、その許可を得る意味で、蝸洞王をふり仰いだ。

「うむ」

蝸洞王は、ひげだらけの顎をひいてうなずいた。

もしこの銀蛇姫が、まことに誰かの秘命を受けての女刺客であっても、また、そうでなく、ただの女芸人としての守り刀であったとしても、これだけの美女を責めるのは、たしかに興味あることにはちがいない。

それは蝸洞王の趣味と完全に一致した。

「よし、この女を責めあげろ」

王の許可を得て、梵忠は勢いたった。

嗜虐王の胸中を、すでに察している梵忠だった。

「あれ、おゆるし、おゆるしのほどを！」

さけんで平伏したが、無駄であった。

わずかに腰の周囲をうす絹でまとっただけの銀蛇姫のからだは、たちまち床の上に押さえつけられた。

女をねじ伏せ、縄で縛りあげる仕事は、馬賊あがりの兵士どもが、もっとも得意とするところだった。銀色に光る柔肌に、縄が襲いかかった。そのしなやかな両腕を、思いきり背後にねじあげて、びしびしと縛りあげた。

女は肩をゆすり、眉をつりあげて抵抗の気構えをみせたが、あらくれ男の腕力の前にはむなしかった。へし折られるような乱暴な力で、またたく間にうしろ手に縛りあげられていくのだ。

ろうたけた美貌の、その柳眉のあたりに、苦痛の縦皺が寄った。

苦痛よりも、羞恥のあらわれかも知れなかった。

形よく、ひかえめにふくらんでいる乳房の上下へ、二重三重に縄がくいこんだ。縄がくびれこんで、乳房がぶっくりと苦しげに盛りあがった。

「立て！」

兵士に縄尻をひかれ、女はよろよろと立ちあがった。縄尻を乱暴にひかれたために、背中の手首が、肩のあたりにまでひきあげられた。女の白くほそい十本の指が、苦痛を訴えるように、とじたりひらいたりした。が、やがて二つの固い拳をつくった。

「おお、みごとだな」

蝸洞王が、眼をみはった。

縄にきびしくしめあげられ、きりきりと苦しむ美女の蛇肌。たしかに、この嗜虐王の眼からみれば、みごとであった。

肌ぜんたいが、泣きもだえていた。どんなに美しく巧みな舞踊よりも、蝸洞王の心を疼かせるのだ。

「責めてみる。この女の泣き顔がみたい。ただし、殺さぬていどにやれ。殺すには惜しい女だからな」

舌なめずりをするような顔で、蝸洞王がいった。この夜中にとびこんできた、思いもよらぬ美しい女芸人を責めあげる興味に、早くも胸をわくわくとはずませていたのだ。

嗜虐王の視線が、遠いものをみるようにほそくなって、銀蛇姫の髪の毛のさきから、裳足の踵までをなめおろした。しなやかなまる



みをみせている肩から胸、胸から胴、腰から腿への線。この線が、やがてもだえて、くずれる柔肌は、波のようにあらい息をつくことだろう。

酒焼けに赤い蝸洞王の咽喉が、妖しい期待に、ぐびりと鳴った。

3

「――殿。この女の拷問には、れいの、あの道具を使ったら、いかがでございます？」

李梵忠が、狐のような笑みをうかべていった。

「うむ、なるほど、あれをな……。よし、おもしろかろう。試してみるのがよい」

子供のように好奇を面上にあらわして、蝸洞王がいった。

れいの道具とは、ちかごろ梵忠が考案し、そしてみずから監督して作らせた奇怪残忍な責め台であった。その道具が、ただちにこの広間の中央に運びだされた。蝸洞王の眼の前である。

不気味な形をしていた。一見しただけで、その用途を知らぬ者にも、肌粟を生ぜしめる迫力のある姿をしていた。

四方の片隅に長い脚がついていて、食卓か寝台のように見えるが、ただの寝台とちがうのは、表面の四隅に、巨大な昆虫の触角のように、ほそい縦木や横木が、がっちりと組みこまれていることだった。

台の脇腹にあたる箇所には、数本の小さな把手が取り付けられてあり、把手から歯車へ、さらにべつの歯車へと巧妙に、精密に噛み合わされて通じていた。

「さあ、女をこの責め台にくくりつけろ」

梵忠が、得意を満面に溢れさせて、部下たちに命令した。苦心の作品の実験である。

「ははッ」

ふたたび縄尻がひかれ、女の肩が小突かれた。よろめきながら、

銀蛇姫は責め台の前へひきたてられてきた。みじめな姿だった。わずかうす絹の布一枚が、腰にとどまって、あと身につけているものは、胸から腕にくいこんでいる数条の縄だけだった。

「おゆるし下さい。わたくしにはなんの罪もありません。どうかおゆるしを！」

ただそれだけの言葉を、髪をふり乱してくりかえした。哀願だった。

「よし、もう一度きくぞ。お前は誰に頼まれて、この蝸洞城内に入りこみ、わが殿を刺しにきたのだ。隣国の周王か。まさか、お前一人の怨恨ではあるまい」

李梵忠がいった。

「けっして左様な大それたことなど――。この懐刀は、なんども申したとおり、わたくしの守り刀で……」

女の返答は同じだった。

「そうか……。よし、それでは、台の上できこう。それ、くくりつけろ！」

梵忠は顎をしゃくった。

「ああッー！」

数本の手が、銀蛇姫のからだにかかった。うしろ手に縛られたまま、女は台の上にのせられた。仰向けにされた。白い咽喉から悲痛な声がふきあがった。

恥しい姿だった。蛙のようにすべすべした白い腹が天井にむいてひくひくとせわしくあえいだ。

二人の兵士が、女の両足首を、台の端に立っている小さな杭のよな柱に、かたく縛りつけた。寸分のゆるみもなく、左右をべつべ

つにぎっちりとかくくりつけた。

「なにをするのです！」

女は必死に顔を起こし、縛られた自分の両足首を、くやしげにみつめた。女の上半身にも、縄がかけられた。咽喉にも、胸の隆起の上にも、くびれた胴のまわりにも……。

数条の縄が、白い肌にむごたらしい黒さで噛みこんだ。蜘蛛の巣に捕われた蝶の恰好に似ていた。肉感的な、白蝶だった。

縄に巻かれて、もう身動きも抵抗もなかった。

「よし、縛り終えたら、お前たちはそこをどけ。あとの操作は、わしやる」

梵忠がいった。つかつかと、台の前へあゆみ寄った。

神に捧げるいけにえ物のように、仰向けにくくりつけられている銀蛇姫の顔を、真上からのぞきこむように見おろし、ニヤリと笑った。

「どうだ、女。おそろしいか。だが、ごわがるのは、まだ早い。これからだ。おれがこの把手をつかみ、まわしたときにこそ、この責め台のほんとうのおそろしさがわかるのだ」

女の瞳孔がひらき、恐怖のために茶褐色に光った。なにかを訴えようと口をうごかしたが、声にはならなかった。

梵忠の右手が、台の脇腹に鍵型に突き出ている把手の一つを握った。力をこめると、それをぐるぐるとまわしはじめた。

蝸洞王をはじめ一座の男どもは、息をつめて梵忠の動作に注目した。

キシキシキシ！……

小さな音が、不気味にはじまった。木と木がこすれる音だった。

木製の歯車が回転し、それがべつの歯車と噛み合う音だった。

と同時に、あろうことか、銀蛇姫の左右の足首を縛りつけた柱が、徐々にひらきはじめたのだ。

「あッ、あッ、あーッ！」

女は痛切な悲鳴をあげた。これは苦痛よりも、羞恥だった。

いかに肌をあらわに踊る芸人でも、縛られて自由のきかないからだを、むりやりに裂かれるのは、羞恥であり、屈辱にはちがいないかった。

蝸洞王が身をのりだした。

キシキシキシ！……

キシキシキシ！……

歯車は台の裏側で、なおもいやなきしみ音をたてた。梵忠の右手は、風車のように忙しく把手をまわしつづけた。

三寸、四寸、五寸と、左右の足首を縛った柱は、のろのろとひらいた。うす絹の腰布がかすかな音をたてて破れた。さらに一尺、一尺五寸と、間隔を増すのだ。銀蛇姫の咽喉が悲鳴をしゃくりあげた。三尺も離れたら、どういう光景を現出するのか。

そして、そのとおりになったのだ。

銀蛇姫は、犬のように赤い舌を、苦悶にゆがんだ歯のあいだからみせて泣いた。

大広間いっぱい、声のないどよめきが揺れた。感嘆のためいきが、熱気を帯びてたちこめた。

——うふふふ、どうやら成功のようだな。

李梵忠は胸中でつぶやいた。この責め台が王の氣にいれば、また自分の成績があがり、恩賞がもらえる。そう思えば、把手をまわす

手にも、自然と力がこもるのだ。額からしみだす汗が、梵忠の眼のなかに流れこんだ。いまの梵忠には、汗を拭くひまも惜しかった。

4

この責め台の仕掛けは、ただ足をひらかせるだけではなかった。梵忠は、つぎに台の左端にある把手を握りしめた。一呼吸したあと、それを、再びぐるぐるとまわしはじめた。

銀蛇姫の唇がふるえ、せつない悲鳴があらたにふきあがった。こんどは腰の下にあたる部分が、もともと持ちあがりはじめたのだ。腰だけが、せりあがっていくのだった。

「う、う、う、！」

唇を噛み、眼をとして、銀蛇姫はこの責め苦を耐えた。長い黒髪はざんばらに乱れてのたうち、肌からは無念の汗が、ふつふつとにじみでた。

キシキシキシ！……

いやなきしみ音とともに、腰だけが高く、頭部も肩も、それに両足も残したまま、腰部だけが高く、せりあがっていくのだ。女のからだが、極端な弓なりになった。半円を描いた白い橋になった。

腹部の皮膚が、はり裂けるほど突っぱり、腸がひきちぎれるかと思えばかりの苦しさ。

「うふ、うふ、うふふふ！」

蝸洞王が、その赤黒い大きな唇から、いやしい笑い声を洩らした。上機嫌のしるしだった。

歯車はなおもきしみ、残酷破廉恥な見世物は、さらに陰惨な展開をした。

こんどは、右足だけが高くあがった。胴体と直角になり、さらに折れ曲がるほどの急角度にもなった。つづいて左足も垂直にのびあがり、まるでふざけているように左右の足が宙にのびたり縮んだりした。

まるで人形だった。自分の意志是一片もなく、すべては台の下に装置されたからくり仕掛けによって動かされるのだった。

幼児が人形をもてあそび、意志のない手足をつかんで曲げたりのびしたり踏みについたり、しまいには、もぎれるほどに振りまわす情景に似ていた。

人形とちがうのは、台上の犠牲者が生きた女であることだった。

縄目の間の肌が、恐怖と苦痛にけいれんし、鼻孔や歯の間から、はげしい息を吐きだしていた。

キシキシキシ！……

歯車の噛み合いが急速な音をたてた。

すると、両足首がいちどきに宙にはねあがった。腰のうすものが風に吹かれる轢のようにひるがえった。二本の白い脚の柱が直立した。

「あああーッ！」

台の上で、女からだは逆さ吊りに似た形になった。悲鳴までが逆流する。全身の血が頭に下がってくるのだ。そのまま、しばらくは放っておかれる。女の顔が、朱を浴びたように赤くなった。鼻の穴から血が流れだすのではないかと思われるほどの苦しさ。

と思うと、いきなり頭の下台だけが、ぐんとせりあがって、上半身が極度にはね起きた。そしてつぎには、自分の腿の間に顔を突っこむほどの勢いで、前のめりに倒れ伏すのだった。

すべては、巧妙なからくり仕掛けだった。

この責め台にくくりつけられた哀れな犠牲者の、すみからすみまでを、自由自在にむきあらわすことができるのだ。

李梵忠が、ひと息ついた。額からしたたる汗を、てのひらでぬぐった。

責め台の実験は、ひとまず終了したのだ。成功だった。

「よし。つぎには、女を俯伏せにして縛りつけろ」

梵忠が命じた。部下たちが、その命令をただちに実行に移した。うずくまる白い獣のように、

銀蛇姫のからだは、俯伏せにされて台上にくくりつけられた。ただし、左右の腕は背中に縛り合わせたままだった。

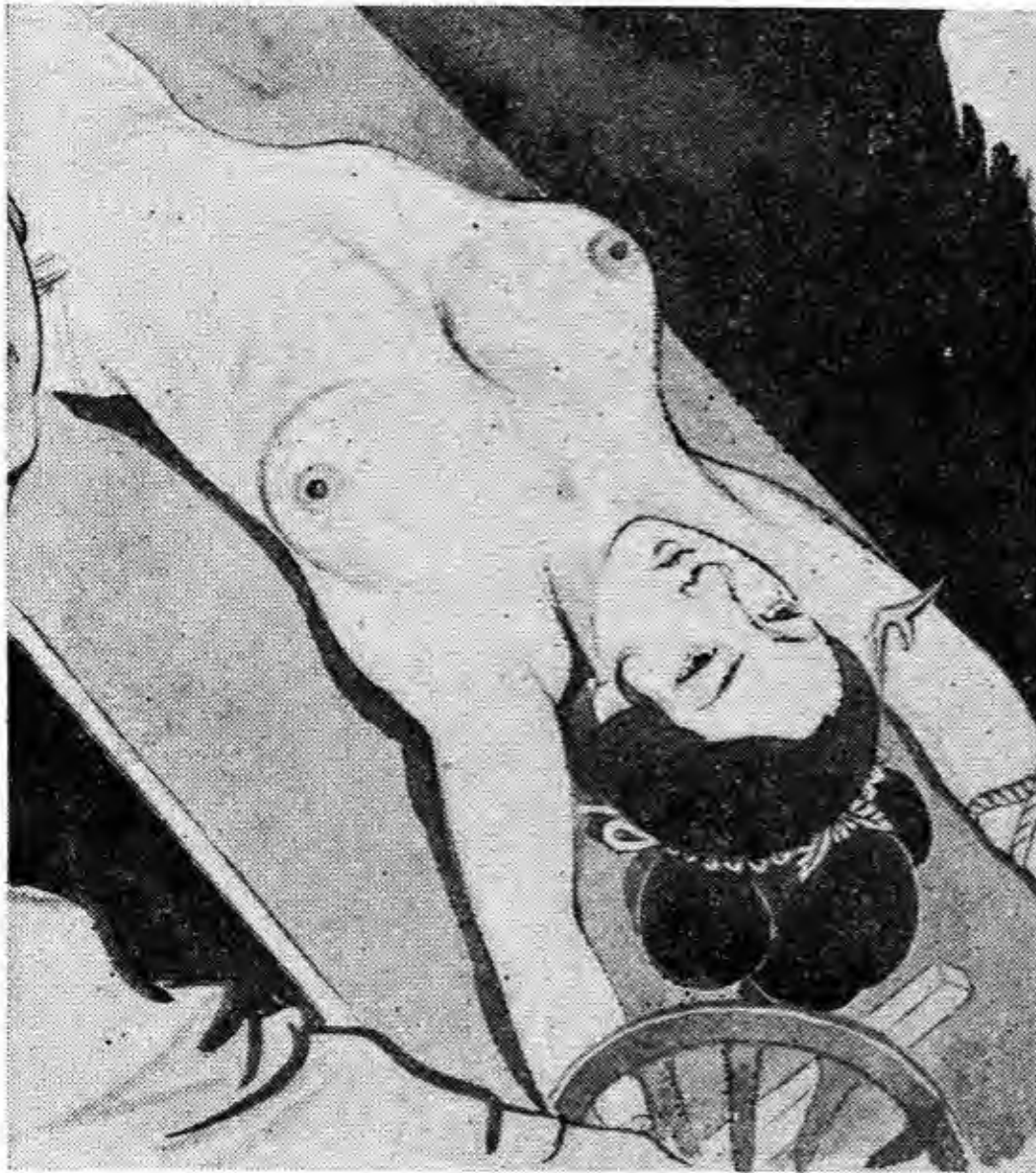
梵忠の右手が、急激に把手を回転させた。

俯伏せにされている女の、腰だけがまるく白い小山のように、こんもりと高くせりあがった。とみるや、

「答をもってこい」

梵忠がいった。なるほど、女のこのむざんな姿態は、尻を答打つには、絶好のものだった。

長い竹べらに、丹念に皮紐を巻きつけた答が、梵忠の前に差



しだされた。梵忠はその答を、丁重な姿勢で蝸洞王の前に捧げた。

「——殿、いかがでございますか？」

「いや——」と、蝸洞王がこたえた。

「梵忠、お前が打て。おれは酒を飲みながら楽しむことにしよう」
答打ちの労働に汗をかくよりも、今宵は苦痛にのたうつ女体を、じっくりと眺めたい嗜虐の心であった。

「ははッ、それではわたくしめに……ありがたきしあわせ」

卑屈に頭をさげて礼を述べると、梵忠は肩を怒らせて答を握りなおした。

5

答は赤黒い色に光っていた。

過去に数名の、いや数十数百の女の肌を打った答であった。赤黒いのは、それらの女の肌を叩き傷つけ、裂いたときの血に汚れているからである。悲鳴と、うめきと、呪いと、憎悪の聲がこもっている答であった。

身構えと、梵忠は答をふりあげた。

高くつきでた銀蛇姫の尻をめがけて、鋭く打ちおろした。

音だけをきけば、小気味のよい、妙な音ともきこえた。しかし、こ

の光景を眼にすれば、思わず顔をそむけたくなる陰惨な答刑の場であった。

梵忠の手首から腕、肩にかけて、異様な快感が走った。手ごたえだった。やわらかく、いかにも若い女の素肌らしく、むっちりとした弾力があつた。

「ひいッ！」

短い悲鳴が、この場の熱気を鋭く切り裂いた。固く縛りつけてあるはずの女の全身が、ギクンとけいれんし、のけぞった。

白くまるく、ふくよかな小山に、一条の紫色の道がついた。たちまちにしみつき浮きあがった答痕だった。その答痕は、みるまに生き物のように、むくむくとうごめくように腫れあがった。

「それ、もう一ついくぞ！」

答が風を切った。若い女の柔肌を打つ凄惨な音が、広間にひびいた。さしも頑丈にできているはずの責め台が、ガタガタと揺れて鳴った。

あっけにとられたような静けさが、一座を支配した。みんな見惚れているのだ。だらしなく口をあけている者もいた。

白い小山に、二筋の道が走った。その道は血を吸いあげて赤紫色にふくれあがった。

「う、う、うーッ！」

銀蛇姫は、口のなかで悲鳴を噛み殺しているらしかった。むなし



い努力だった。

この強烈な答を素肌にくらって、うめきも洩らさぬ者は、人間ではなからう。馬でも泣くにちがいない。いなないて狂ったように走りださるう。

だが、手足を縛りつけられた女は、一尺たりとも逃げることはできなかった。

答はつづけざまに鳴った。びしびしと打ちすえた。女の身体は、縄のかかっている部分を残して波のようにくねった。手足をもぎとられた一匹の巨大な虫のように、くねくねと、肌に皺を寄せてもがいた。

やがて、肩から背から尻から腿から、血がふきだした。答痕が重なり交叉したところからは、肉まで裂けて血があふれた。

いまはもう、李梵忠も蝸洞王も、この拷問本来の目的を忘れていた。

女が、この国を狙う敵方の刺客かも知れないという疑心は、もう遠くに去っていた。

嗜虐の興奮だけが、この男たちの全身をしびれさせていた。

汗みどろになりながら、梵忠はなおも銀蛇姫を打ちつづけた。憑かれてるように答をふるった。

女の悲鳴が、次第に低くなっていった。やがて、肩と咽喉をかすかにけいれんさせるだけになった。半死半生なのである。

「待て、梵忠、もうよい。そのへんでゆるしてやれ」

蝸洞王が、ハッと我にかえり、あわてて制した。このままいったら、死んでしまう。殺してしまつては、なんにもならぬ。

「ははッ」

梵忠は答をおろした。さすがにこの男も疲れたらしく、肩で呼吸していた。

「なにもあわてることはないのだ。この女をこのまま城内にとどめておいて、ゆっくりと口を割らせればよいのだ。じわじわとな。そのほうが、おれにとつても楽しみがある。うふふふ……」

蝸洞王は、満足げに笑った。それから、そばにひかえている、他の部下にむかつて命令した。

「この女の傷を手当てしてやれ。傷口に薬を塗ってやれ」

6

それから、七日たった。

銀蛇姫が肌に受けた数十条の笞の傷も、どうやらふさがった。寝たきりだったのが、歩けるようになった。

とみるや、待ちかねていた蝸洞王は、さっそく自分の寝所へ、銀蛇姫をつれてこさせたのである。

「うむ。銀蛇姫とは、よく申したな。なるほど、お前の肌はひどくつめたい。まさしく蛇女だ。わははは！」

蝸洞王の腕が、早くも銀蛇姫の肩を抱き寄せている。

「このつめたい肌を、殿のお熱い血潮で、燃えたぎらせてくださいませ」

銀蛇姫の小さな唇があえいだ。瞳の色には憎悪も怨恨もなかつ

た。残酷な拷問が、この女を屈従せしめ得たのであろうか。

「ふふふ、可愛いことをいう……」

絹の裳を、女の肩からすべり落として、蝸洞王は満悦だった。

このとき、この部屋の一隅に眼をやった銀蛇姫が、ふと軽い悲鳴をあげた。

「あれッ、あそこになにやら、おそろしげなものが……」

「あれか。おどろくことはない。あれはな、おれの自慢の熊姫だ。鎖につなぎ、檻へ入っておる。安心しろ。お前に噛みついたりはせぬ」

「熊姫？」

銀蛇姫は、いぶかりの表情をした。

「もとは易王の娘の碧花だ。おれの意に従わぬものだから、からだじゅうに熊毛を植えてあんな姿にしてやった。お前の蛇肌も珍らしいが、あの熊肌も珍奇だろう、わははは！」

その高笑いに、檻のなかの碧花が、うめき声をあげて暴れた。

「みろ、熊でもあのように嫉妬する。わははは！」

「あれがちかごろ、この花袋園の町で噂に高い、熊姫までございますか。さてもおそろしい、むごいことを……」

銀蛇姫の眼が、濡れて光った。

「さあ、こっちを向け。望みどおり、この蝸洞王の熱いなさけで、お前のつめたい蛇肌をとろけさせてやろう」

ほそい胴をつかむ毛むくじゃらな腕に、あらあらしい力がこもった。

銀蛇姫は、無言で紅い唇をさしだした。陶然として、蝸洞王はむさばるようにその唇を吸った。

ひげだらけの咽喉が、ごくりとうごいた。

と——蝸洞王の腕の力が、きゆうに、だらりと抜け落ちた。みるみる四肢から力が失せて、女体を放した。

そのまま蝸洞王は、ぐったりと寝台の上に横たわった。口から泡をふき、瞼の上が二、三度けいれんした。が、そのまま眼をひらくことはできずに、蝸洞王は雷のような高いびきとともに眠りこんだ。

「ふふふ……」

と、銀蛇姫が笑った。女は、口のなかに強烈な眠り薬をふくんでいたのだ。それを蝸洞王が、思いきり吸いこんだのである。

蝸洞王を眠らせた銀蛇姫は、鋭い視線を周囲に払った。扉の外には、番兵が張り番をしている。気どられたら最後だった。

この強烈な眠り薬は、あの激烈な拷問の際も、女の身体の内側に秘めて隠しとおしたものである。

銀蛇姫は、注意ぶかく寝台から足をおろした。一隅に置いてある熊姫の檻へ、そっと近づいていった。

檻のなかには、気の狂った碧花が、首輪をはめられたまま、四つに這っていた。

「お姉さま！」

と銀蛇姫は声をかけた。おさえた声だが悲痛な叫びだった。

「お姉さま、わたくしです、妹の玉華です、玉華ですよ！」

檻に手をかけ、銀蛇姫は必死にゆすった。

熊姫の碧花は、にぶい眼の色で妹の顔をみつめた。

だが、狂った人獣には、妹がわからなかったのである。うつろな視線を、きよときよと動かすばかりであった。

7

「お姉さま！」

むせびながら、玉華は檻のなかに手をさしこみ、碧花の手を握りしめた。その手の甲にまで黒い熊毛が生えていた。

「ヒヒヒヒ！」

と、碧花が笑いだした。狂笑だった。

「ヒヒヒッ、お殿さま、今夜はなぜ抱いて下さりませぬ。碧花はさびしうございますよ、ねえ、お殿さま」

玉華の手首を握りかえし、左右にふるのだった。妹と蝸洞王の区別すらつかないのだ。

「おなさない、お姉上さま。このようなおそろしいお姿に変わり果てた上に、お気まで狂われたのですか。……一年前、蝸洞王の追手をのがれたわたくしは、諸国を歩きまわり、数々の辛苦の末に、お父上の徳を知る人々のお力を得て、やっとこの故郷へもどってきたのです。兵を挙げて蝸洞王を倒し、悪政に苦しむ町の人たちを救う時節が、やっときたというのに、お姉さまはこのようなむごいお姿に……」

血を吐くような言葉とともに、玉華の眼から、ハラハラと熱い涙がこぼれた。

旅芸人の踊り子に化け、敵状を探ぐりに入った城内であった。李梵忠に見とがめられて短刀を発見され、すさまじい拷問の苦痛と屈辱を耐え忍んだ末に、やっと入ることができた蝸洞王の私室。

ここで、このように醜悪な姉の狂態を発見しようとは……。

悲憤きわまった玉華の熱涙は、熊姫のさしだすてのひらの上に、

ポタポタとしたたり落ちた。

不思議そうな表情で、自分のてのひらに溜まる涙を、じっと見つめていた熊姫が、そのとき、ハッと人間の眼の色をとりもどした。

「——妹……玉華の……」

碧花の唇が、かすかにうごいた。玉華の耳に、たしかにその言葉がきこえた。

「お姉さま、おわかりになりましたか！」

思わず、玉華は我を忘れて大声になった。

同時に、この部屋の扉が外から叩かれた。

「殿、殿、いかがでござりますかな、蛇女の味は？……えへへ……」

扉のむこうで、李梵忠のいやらしい声がした。

玉華は、ぎくりとして立ちあがった。檻の前を離れると、飛鳥のようなすばやさで、寝台に眠る蝸洞王の横にもぐりこんだ。こうしていれば、参謀とても近寄れない。

いま正体を見破られては過去の苦心は水泡に帰してしまうのだ。

玉華は、蝸洞王の胸にとりすがり、息を殺した。

李梵忠の足音が、扉の前から去っていく。玉華は安堵し、冷汗がどっと背すじを伝って流れた。蝸洞王は、涎を流しながら、まだ眠りこけている。

手もとに刃物さえあれば、あの短刀さえあれば、たったいまこの悪虐の王を刺し殺して、父上の仇を討とうものを！……

蝸洞王の首に手をかけても、華の白い指では、どうにもならなかった。馬賊王の咽喉は、あまりにもふとく、たくましく、玉華の指は細く、しなやかすぎた。しめ殺す前に、憎い仇は眼をさますだろ

う。

あまりのくやしさに、玉華は狂いそうだった。はやる心を、やっとのことでおさえた。

悪政に苦しむ花袋関の人民三万余の運命もまた、いま玉華の掌中にあるのだ。軽はずみはゆるされなかった。

その翌朝——

銀蛇姫の姿は、すでに城中から消え去っていた。

姉の身を案じつつも、危険を察して夜の明けきらぬうちに脱出した玉華だった。

が、それよりも重大な事件の突発に、蝸洞城は、ひっくり返るような大騒ぎになった。

蝸洞王が寝床のなかで、口から真っ赤な血を吐いて死んでいたのだ。その横に、熊姫の碧花も口からどっぷりと血を流して息絶えていた。

李梵忠が調べて、その奇怪な事実には愕然とした。

朝、めざめとともに、いつものように熊姫を檻から出し、抱き寄せた蝸洞王の舌を、奇怪にも熊姫が噛み切ってしまったのである。

そして熊姫もまた、自分の舌を噛み切って自害したのであった。

熊姫の口中からは、蝸洞王の舌が発見された。

「どうしたことだ、これは！」

李梵忠は、呆然としてさげんだ。

——妹の玉華が、熱涙を流して訴えたあのとき、碧花は正気をとりのどしたのだった。

そして、父易王の仇敵に復讐すべく、敢然として蝸洞王の舌を噛

最近の縛り映画から

東 山 映 史

最近は大映、第二東映に女優の縛りシーンが多くなった。

大映の旺巻は角田喜久雄原作の「妖花伝」だ。加茂良子、阿井美千子、三田登喜子ら美女が美しい縛りシーンを見せる。

「競艶八剣伝」の美川純子の縛り拷問シーンと多いが、今度の「妖花伝」では加茂良子が長襦袢一枚の半裸体で縛られ鞭打たれるという凄まじいシーンを見せる。

財宝の在り場所を示したお守札から、お京（加茂）お浦（三田）の姉妹が、その行方を白状せよと責められる。SKDできたえた加茂良子が、じっと肌を見つめ縛られるのだ。阿井美千子の女賊、犬兼と捕えられる。

第二東映では、同じ角田喜久雄の「将棋大名」で中里阿津子のお千代が尾上鯉之助らの悪人一味に捕えられ猿ぐつわをはめられて本堂に縛りつけられる。その危機一髪

伏見扇太郎が救いにくる。

また「百万両秘帖」でも中里阿津子の桔梗姫が追われ、縛られて乱暴されようとする。この所、縛られナンバー一だ。千原しのぶらの旅芸人十名ほどが二、三人ずつ縛られるのが見もので綺麗だった。

東映の正月作品、沢村納升の「若殿千両肌」では青山京子のお幸が捕えられるシーンが楽しみだ。

鶴田浩二、美空ひばりの「月影一刀流」では徳川を親の仇とねらう藤田佳子の系耶が捕えられ柱にしばりつけられる。彼等の人質になったり美女は苦勞する。

第二東映の時代劇「冷たき暴力」でも青山京子が縛られる。

正月作品、大友柳太朗の「むつつり右門の南蛮鯨」大川橋蔵の「若様侍捕物帖」で、しばりシーンがないのは、淋しい。

み切ったのである。さらにまた、汚れに汚れたおのれの身を恥じてみずから生命を絶ったのであった。

哀れにも壮烈な最期であった。

突然に城主を失い、うろたえて士気衰微した蝸洞王の匪賊たちは、玉華のひきいる一軍の兵に攻めこまれると、たちまち敗北し、城を捨てて逃走した。

花袋関の町に、ふたたび春がよみがえったのである。

平和をとりもどした鵬遊山のふもと、沈花の池のはとりに、やがて小さな庵が建てられた。その庵のなかに、父と姉の冥福を祈るために、若く美しい一人の尼僧が住みついた。

そして、彼女が老尼となり、そのみずみずしい肉体が、枯木のように朽ち果てるまで、日夜読経に明け暮れたということである。

(終)

八伝言板V田沼醜男の『マゾヒズム天国』は次号四月号では「アマゾンに捧ぐ」「同じ人種ではなかった」「児玉明子の大臀筋」「オリンピック」五月号では「オナニズム論」「神と奴隷との距離」「A・ヘップバーン」「小学生について」の掲載を予定しています。



——かえるばら——ものがたり——

蛙 腹 物 語

羽 村 京 子

杉 原 虹 児・画

第四章 U 子

オ
Oさんの蛙腹遍歴は、あちこちで、小さな波紋をひきおこしていた。一つは「K……」誌にのったプレグナント・ヌード—Pregnant (妊娠した) nude——にたいして、一、三

の反響があったことである。もう一つは、M市の旅館のおかみが、早速つぎの獲物を見つけて来たことで、その女がU子だった。U子はM市のストリップ劇場の踊り子で、若く、大柄で、ポリュウムのあるからだ、大胆なアクトが、観客の間に人気があった。

Oさんも何回か舞台の上で踊る彼女を見たことがあった。顔はそれほど美人というわけでもなかったが、グラマーとかキングサイズとかいう形容のびったりする、ピチピチした肉体を誇示することが、たのしくてたまらないといったような、そういう娘だった。

十月も下旬になったある日のこと、——「今晚ちょっとかわったショウをすることになってるんですが、だんなさん、ごらんになりますか。」

と、おかみが聞いた。

「ほう、……なんだい？」

おかみは妙な笑い方をして、「それが、だんなさんの真似みたいですけど、お腹の大きい女のショウというのは、どうかと思いましてね。」

と云う。Oさんは苦笑して、

「へえ、……そいつはぜひ見たいね。」

と答えると、おかみは聞きもしないのに、

U子のことをいろいろと話しはじめた。

「何でも、高等学校のときに男ができたのが、親に知れましてね、ひどく叱られたというんですが、勝手にさっさと学校をやめて、家を出てしまったらしいんで、……ストリップに出るようになったのも、はだかになるから使っ

てみてくれ、と自分から云って来て、平気でからだを見せたそうですよ。まったく、このごろの女の子は、あたしたちのときとちがって、はだかになることくらい、何とも思っちゃいないんですね。……」

その夜のショウは、やはり八帖の間で、真中にしきぶとんが一枚、明るいライトの中に、まっ白いシーツをかけて敷いてある両側に、三、四人の客がすわっていた。やがて、たくましいからだの、ちょっと苦み走った、いい顔をした若い男が入って来て、テープをかける。U子は、薄いピンクのネグリジェを着て、シーツの上に静かにあおむけに寝た。こんもりと盛り上った腹が、呼吸をするたびに、ゆっくりと大きくなったり、小さくなったりしている。テープが回りはじめた。

——「……妊娠中の夫婦関係は、最後の四週間、すなわち臨月をのぞいては、禁止されていますが、つぎのような理由から、十分に注意しておこなうことが必要であります。まず、……」

つまり、てい、いい性医学講座といった式のもので、一通り説明がおわると、音楽がはじまり、それにつれて女は、上体をおこしはじめ、やがて男が女の衣裳を脱がせてしまう。

女は、ネグリジェの下に、何もつけていない。まるくふくれ上った大きな腹があらわれて、目の前に立っていた。

音楽のテンポが早くなると、女は観客ににっこりと笑いかけながら、ゆっくり、腰をグラインドしはじめた。孕んだ大きな腹が、奇妙にかたちをかえながら、ゆっくりとゆれる。妊婦のストリップである。客席から、ほほう、という感嘆の声がおこる。

「八カ月ですよ。」

と、おかみがOさんに耳うちした。

女の踊りはますます大胆になってきた。

テープの解説にしたがって、はじまってから三十分ぐらいで、ショウがおわった。

「……これで第一部をおわります。第二部では、彼女の直腸の内容物をすっかり出しておくことが必要ですので、しばらく休憩いたします。」

テープが切れると、女は、右手をにぎったまま前に出して、いたずらっぽい笑顔を客の一人一人にむけた。ちょっと首をかしげてみせてから、握った手の指をおもむろに開く。いつの間に手に入れたのか、イチジク浣腸が一個、手のひらの上にのっていた。ぐるりと

見わたして、女の眼がOさんの上にとまると、女はOさんの手をとって、それをおしつけるようにして握らせた。

第二部がおわると、観客はざわざわと帰り支度をはじめた。

「面白いものを見ましたよ。腹ぼての女も、ちょっとグロだが、わるくないですな。……それにしても、ここのおかみは、ずい分、物好きですね。」

と、客の一人がOさんに話しかけた。

その晩、ショウのあとで、U子はOさんの部屋にやって来た。おかみがすっかり話してしまったらしく、U子はOさんのことをよく知っていた。

「何カ月ぐらいまで、ストリップをやっていたの？」

「五カ月目の途中までよ。……だって、お乳が黒くなるでしょ。お腹だって大きいのが分っちゃうし。お腹のふくれた子が出てるっていうんで、面白がってわざわざ見に来て、いやらしいヤジをとばすお客さんがあったりして、やめさせられちゃったのよ。」

「わしも見に行けばよかったな。……ところで結婚はするんだろう？」

「うん、……でもあたし、まだ十九でしょ。親にもまだ云ってないし。……」

U子は急に、ゆううつそうな顔をしてみせた。

あくる朝、Oさんは、おかみに、

「こんなのは、どうだい？劇場の方で話にのれば、シナリオぐらい、わしが書いてもいいぜ。」

と云って、つぎのように書いた一枚の紙片を見せた。

「必見！ 本邦最初の妊婦のストリップ

全裸の孕み女が登場する

妊娠八カ月ショウ

女のポンポン腹全十三景」

おかみは笑って、

「駄目ですよ。商売人がそんな話にのるもんですか。」

と云って、とり合わない。

「なるほど、そういうもんかな。」

Oさんは、冗談ともつかずに切りだした自分の提案を、てれくさそうに破りすてた。

U子の予定日は一月一日ということなので、OさんはU子のお産に立ち会うことは断念しなければならなかった。まさか、いくら何でも、正月早々から家をあけるわけには行

かなかったからである。その代り、——というわけでもないが、からだをしばらくせたり、写真をとらせたりする点では、U子は大いにOさんを満足させた。ただ、そういうときに、いつも男がついて来た。どういふつもり

か分らないが、かならずついて来て、OさんがU子をしばったり、写真にとったりするのを、自分もてつだうのである。自分の目の前で、身重の女房が他人にそういうことをされるのを、何とも思っていないらしい男の態度に、Oさんは何となくいい気持がしなかった。また、女も女で、男にしむけられているのかも知れないが、平気でそんな風にさせる、そういう神経がOさんには分らなかった。

いよいよ臨月になると、Oさんは、かねてから一度やってみたいと思っていた、妊婦の逆さ吊りを、やらせてはくれまいか、と話をもち出した。男は案外簡単に承諾したが、これには、さすがのU子もちょっとしりこみした。

「大丈夫かしら？」

と、自分の、まんまるくふくれ上った臨月腹を見つめながら、U子がしぶっていると、男がひきとって、

「なあに、ちょっとの間だからな、何でもな

いじゃないか。いいだろ？……な？」

と、なだめるように云う。

「いや、無理にとはいわないんだよ。」

と、Oさんが云ったが、男はさかんに、U子にやらせようと思っているらしく、帰りぎわにU子にきこえないように、

「何とか承知させてみせますから、まかしといて下さい。」

と、Oさんにささやいた。

どういふふうに云いくるめたのか、おどしつけたのか知らないが、U子はOさんの申し出を承諾した。

「この前に話したこと、考えてくれたかね。」

「ええ、いいわ。あたし、やることにしたわ。」

U子はすでに覚悟しているらしく云った。

話がきまると、男は、かねて用意していたらしい計画を話した。それは、Oさんの考えよりずっと大がかりなものだったが、Oさんは思いきってその計画にのることにした。

その計画というのは、真夜中に劇場を借りて、ステージの上に、U子を高く逆さにするすというもので、Oさんから、また、そのほかにも二、三の好事家をよんで、相当額の謝礼金を引き出そうと考えていることは、明らかだった。男は、劇場に顔がきくから、と

いい、十二月二十六日の夜なら、あいているから使わせてくれるように話がついている、といった。

当日の夜、十二時も近くなつてから、Oさんが劇場に入ると、客席ががらんだうのステージの上に、何人かの男が、手わけして働いていた。ライトをつけ、あかあかと照明された舞台の中央に、ハシゴがおりてあり、その上に、ごろんと荷物のように毛布にくるまって、U子がおおむけに寝ていた。ハシゴの両端には、上から垂れ下った綱がむすびつけてあり、もう一本垂れ下った綱が、毛布の下にかくれている。それはU子のからだにつないであるらしかった。

「さあ、はじめますよ。」

という声で、二本の綱がピンと張って、ハシゴが、U子をのせたまま、ゆっくりもち上りはじめる。幕を上げる滑車をつかっているのだろう。ぐらつかないように下で二人の男がささえて、少しずつもちあげて行く。二メートルばかりの高さまであがると、きやたつを二つつかつて、その上にハシゴをのせ、両端の綱をはずして毛布をとりのける。——さるぐつわをかけ、うしろ手にしぼられた、腹の大きなU子の体が、がんにがらめに縄をか

けられてあらわれる。

もう一つの綱がひかれると、U子の脚が、ぐっと空中にあがった。みるみる脚が垂直になる。足首がひっぱられているのだが、ひざと腰にも縄をかけて、力が平均に行くようにしてあるらしい。

いよいよハシゴをはずす段になる。二人の男がきやたつにのぼり、下から二人でささえて、片方ずつ、ゆっくりとはずす。U子のからだがぐらりとゆれて、孕んだ女は、頭を下に、完全に宙吊りになった。きやたつの男が、ぐいぐいと縄をしめ直す。真逆様に吊られた女は、もう一度ぐいと引かれて、五十七センチばかり上にあがる。

「三分間！ 三分間たったなら、おろしますから、写真をとる方は早くして下さい」

臨月の腹が、上と下を縄にしめつけられて、大きくとび出している。うしろ手に合わされた手首から腰へ、そしてひざに、さらに足首のところで、むすび目をこしらえた縄がぴーんと張って、臨月の妊婦の重みを支えていた。縄も痛いにちがいないが、逆さ吊りの苦痛も一通りではないらしく、スポットライトの光の中で大きな腹が苦しそうに波打っている。三分間たって下におろされたとき、U子は

まっさおになつて、口もきけないくらいだった。いつもは元気な彼女が、ひどくぐったりとしてしまっていた。いそいでいましめを解き、さるぐつわをはずして、注射をする。

「大丈夫かな？」

と、Oさんが聞くと、男も自信なさそうだった。が、とにかく、

「大丈夫でしょう、……あとのことはこちらでしますから、……」

と云うので、Oさんはそのまま宿にかえた。前の晩がおそかったので、翌朝は十分に寝坊したOさんは、朝昼兼帯の食事を取りながら、おかみから、U子があれからそのまま陣痛がおこつて、今病院にいる、という話をきいた。逆さ吊りなどという、ああいう無理なことをしたのが、からだにこたえたのにちがいはなかった。Oさんは、約束の金にいくらか余分を加えると、それをおかみにあずけて、早々に宿をひきはらった。

さいわいに、Oさんはおかみにも自分の住所を知らせてなかったから、その後あとをひくような心配はなかった。しかし、それと同時に、U子がどうなったか、それもまったく聞かぬすががなわけである。それにしてもとにかく妊婦の逆さ吊りは大成功だった。

「K……」誌の何月号かに、（読者O氏の提供による）という、臨月の妊婦の逆さ吊りの写真がのっている。一枚は、映写室からロングでとったもので、逆さ吊りの孕み女がライトに照らされて、白く宙にうかび上っているもの、もう一枚は、上の方から見おろして、大きな腹を中心にアップでとった、なまなましい写真である。OさんがU子にそれを送ってやったことは、いうまでもない。

——ところで、この話には後日譚がある。

Oさんの「臨月の妊婦の逆さ吊り」の写真が「K……」誌にのってから半年ばかりたつて、当夜Oさんと一しょに客の一人であったH氏が同じ「K……」誌に寄稿した文章の中で、Oさんは、U子のその後の情況についていくらか知ることができた。それによると、U子は子供を産むとまもなく、正式に男と結婚して、親のもとにかえり、今は幸福にくらしているという。子供がうまれたことをきっかけに、男も以前の生活をあらため、U子の両親も折れて、二人で家業をつぐことになったのだという。Oさんは、いかにもヤクザに見えたあの男にも、やはりそういうところがあつたのか、と不思議に思ったが、なるほど、人の親になるということは、そういうふう

人の心をかえるものかも知れない。しかも、もしあの「逆さ吊り」の事件がなかったならば、場合によっては、こうしたことが起らなかったかも知れないのである。二人の名誉を重んじて、H氏の文には、彼等の現在の居どころを注意ぶかくかくしてあつたが、Oさんは、何かほっと救われたような気持ちになつて、彼等の前途を祝福したのである。

第五章 E 子

正月になった。U子の写真を整理して、そのうち数枚を「K……」誌に送ってしまったと、Oさんの空想はふたたびあたらしい冒険へとめぐって行った。OさんはM市を避けて、久しぶりでS市に行ってみることにした。冬から春にかけて、温泉地の閑散なシーズンがあとずれる。

「まあ、ずい分お見限りでしたこと。」

おかみは愛想よくOさんを迎えた。Oさんは昨年の乱行をいささか恥ずかしく思っていたのだが、ちっとも、そういうそぶりを感じさせないところは、さすがである。

おかみは二人きりになると、共犯者だけが見せる、あの特別な顔つきにかえって、

「Y先生がね、Oさんにお見せしたいものが

あるって、前々からお話がありましたのよ」と、謎めかして云った。Y先生というのは例の医者のことである。

「へえ、……いったい何だろうね。」

「めずらしい患者さんがあるから、Oさんに見せたいって、……でも、もう大分前のことですから、一度電話できいてみますわ。」

電話をかけると、Y先生の方から旅館にやってくるOさんに会ってくれた。四十年配の精悍そうな男だった。半ば好奇心もてたつて、Oさんを見にきたのかも知れなかった。たしかに精神病理学の対象になるからなと、Oさんは内心苦笑した。

問題のめずらしい患者というのは、E子とって、この町のボスの愛人、平たくいえば、二号だった。妊娠の初期からY先生にかかっていたが、妊娠の後半期になると、羊水過多症の症状がおこり、月が進むにつれてひどくなって、今では毎週二——三リットルもの水を、腹に針をさしてとっているが、またすぐたまってしまふのだという。羊水過多症というのは、現代の医学では原因のよく分らない病気で、羊水がやたらに多くなり、子宮はいちじるしく球状になって、息ぐるしく、むくみなどが出来やすい。軽いのはちょいちょい

あるが、E子のようにひどいものははじめて見た、と医者は云った。Oさんに知らせようと思ったが、方法が分らないので、そのうちにうまれてしまったら残念だと思っていたが、今ちょうど九カ月で、間に合ってよかった、こういうのは大い、予定より早く出てしまうのだが、E子の場合は、何とか十カ月までもちそうだ、というのである。その翌日が、E子の水をとってもらいに来る日だから最初は東京からえらい先生が来たということにして、一度見せてもらうことにきめた。

あくる日になって、Oさんが行くと、しばらく応接間で待たされてから、診察室に通された。色の白い小柄な女が、着物の前をほだけて椅子にすわっていた。顔がすこしむくんで、元気のなさそうな顔色をしてはいるが、丸顔で目の大きな、愛くるしい顔だちである。Y先生がもっともらしくOさんを紹介して、女に着物を脱ぐように云った。

女のからだを見て、Oさんは思わずあつ、と目をみはった。からだが小さいために、余計そう見えるのかも知れないが、腹だけがおそろしく大きかった。皮膚がキンキンに張りつめて、腹はほとんど完全な球に近かった。いまにもち切れそうにまん丸くふくれあが

った腹に、青ぐろい静脈がくつきりとうかび出ている。Oさんがこれまでに見たどの妊婦の腹よりも、確実に一まわりは大きかった。女の本性がそうさせるのか、大きな乳房を、女は無意識的に手でおおってかくしている。

針を入れて羊水をとり出す作業を、落ちつかない気持でしまいまで見ながら、医者のふりをするの、Oさんは冷汗をかいていた。三リットルばかり水をぬくと、女の顔色は生氣をとりもどし、目立ってらしくようになった。腹帯を巻き、着物をなおして、女があいさつをして出て行ったあとで、Oさんがハンカチで汗をぬぐいながら、

「いやあ、医者のまねをするのも、らくじゃありませんなあ。」

と云うと、医者は、さもゆかいそうに、声をたてて笑った。

Oさんが宿にかえって、どてらに着かえていると、おかみがあがって来た。

「はなれの方にE子さんが待っています。」と云う。Oさんはおどろいて、

「何だって？……どういふわけですか……」

と聞くと、おかみはにやっと笑って、

「承知なんですよ」

と云ったが、気がついて、

「おや、ご存知なかったんですか？」と、おかしように口をおさえた。

「先ほどはどうも」

E子はちよつとつむいてから、頭をあげると、かわいらしい笑顔を見せた。胸高に帯をしめて、前がはだけそうになるのを、手でおさえている。

「お医者さんでないことは、はじめから知ってたんです」

「やれやれ、とんだお芝居だったなあ。」

と、Oさんが云うと、女たちは声をあげて笑った。

いろいろ話しているうちに、OさんはだんだんE子の立場がのみて来た。E子のだんなのWには、子供がなかったので、Wはせひ子供をひきとりたいと思い細君に話した。せまい町のことなので、E子とW氏との関係を、かくしておくわけには行かなかった。細君は激怒し、つぎのような条件でなら子供をひきとると云った。一つは、WとE子との関係を今後きっぱりとたち切ること。もう一つは、胎児をE子の腹の中で十分に育てて、帝王切開によって腹の子をとり出すこと。羊水過多症で苦しいので、すこしでも早く早産させて、らくになりたいのだが、そういうわけ

でできないのだ、ということだった。心配なのは、奇型児の場合に羊水過多症になりやすいということ、Y先生は、そういうことはない、というが、もしそういう子供が生まれたら、どうしようかと思っている、と云った。

「それで、きみはその条件をのんだの？」

「ええ、……だって、子供のことを考えたら、そうするよりほかはありませんわ。」

E子はいきなりめたように云う。子供だけが主で、母体はどうなってもいいという考えなのだ。Wの細君という女の非人間的な感情が、むき出しになっている思いだった。しかもこうなると、男なんていくじのないもので、体面とか世間態とかいうものばかり考えて、E子にたいして、一かけらの愛情があるとも思えない、と、くやしそうに云った。わたしはとにかく云うとおりになるが、今ではWへの気持はすっかりかわってしまった、ということだった。

「それで、きみは、このわしも、軽べつしているというわけかね」

Oさんは聞きにくいことをきいてみた。

「でも、……Oさんはいい人だって、おかみさんが云いましたから」



とE子は、ちょっとはにかんで答えた。

E子の腹部はますます大きくなった。羊水をとる前などには、腹がカンカンになって、見ているだけでも苦しそうだった。二月に入ると、一度に五リットルも水をとることがあった。それでも、二、三日もたつと、またもとのようにカンカンになってしまふ。OさんはE子に同情し、見ているのがつらかった。

そのくせ、Oさんは、そういうE子の腹を、せつせと写真にとっていた。

E子の入院は二月二十日、手術は、予定日より一週間早い二十二日ときまった。OさんはY先生にたのみこんで、手術室の天井裏から、E子の手術を見せてもらうことにした。そこからだと、手術の邪魔にもならず、上からすっかり手術室のまようを見ることができ

る。天井板に四角い穴をあけて、透明なガラスをはめ、数カ所から下をのぞけるようにした。いよいよ手術の当日になった。夜おそくなつてから、E子は手術室に入った。Oさんが天井裏にあがって、小さい窓から下を見ると、あかあかと電灯をつけて昼のように明るくした部屋の中に、E子が革具で手術台にしばりつけられていた。照明はOさんのからだの下にあるらしい。麻酔されて意識がないらしく、蛙のようにあおむけに、四肢をひろげてひっくりかえって、死んだようにうごかない。まったく、これから解剖される蛙を見るかのようなだった。Oさんの希望で、しばらく羊水をぬいていないので、腹がパンパンに張り切っている。その腹のまん中に、内側がとび出してボタンのようになった臍がついている。Oさんは、カチャカチャと器具のふれる音がきこえるような気がした。いそがしく立ち働いている三人の看護婦に、Y先生がゴムの手袋をはめ、メスを手にもって、何かと指示している。

——とつぜん、手術室の扉がパタンと開いて、頭から黒いショールをかぶった和服の女が中に入って来た。みんながそちらの方を見て、顔色をかえて立ちすくんだ。

女はショールをはねのけると、ぐるりと見まわしてから、看護婦たちの方をむいた。すぐ下で話しているのだが、女の高い声が、まるで遠くからのようにきこえる。

「わたしは、この女の腹の子の父親の妻です。あなたたちには何もしやあしません。……Y先生！」

と、向きなおって、

「わたしは、自分がどうなってもいいと思っているから、何をするか分りませんよ。わたしの云うとおりにして下さい。」

と命令した。Oさんはギョッとした。女の手には小さなピストルがにぎられているのに気がついたからである。

女は医者に近よって、何事か熱心に話しかけた。声が小さいのでOさんにはきこえない。医者のひたいに、大粒の汗がたらたらと流れ落ちた。何かしきりに云いあらそっているようである。何を話しているのだろうか。W夫人は一体何をここにやって来たのだろうか。E子に害を加えることはないだろうか。降りて行くかとも思ったが、相手はピストルをもっている。Oさんは、じりじりした。しかし、それよりも、Oさんの眼は、下で起こっている事実に見つめられていた。

やがて医者はあきらめたように、こっくりとうなずくと、女がうしろにさがった。

「さあ、そのばか大きくふくれたお腹をたち割って、料理をはじめのよ」

と、女が命令した。医者は、しぶしぶ看護婦たちをうながして、E子の腹にメスをあてた。臍を左によけて、すーっと一気にメスが走った。ぶつぶつと血がふき出てくる。そこで、医者の手が、一瞬ひるんだ。何事がおこるのだろうか。

「お臍をとってしまったのよ。分らないの？」

女がかん高い声で叱咤した。仕方なく医者が、臍の右側にもメスを入れはじめた。（あつ、いけない！）Oさんは思わず目をそむけた。

皮膚、白い皮下脂肪、赤ぐろい筋肉、ふたたび白い腹膜と、だんだん深く切りすすんで行く。臍を中心に、二センチぐらいのはばで細長い肉片が、皮をつけたまま、ほこりと切りとられた。腹膜まで切開してしまうと、ピカピカ光る金属製の器具を腹の中につっこんで、ぐいと左右に切り口をひろげる。

ここまできると、Oさんは落ちつきをとりもどして、下の光景を熱心にながめていた。E子のいのちに別条があるようなことはある

まい、女の復しゅうはもうすんだのだ、とOさんは安心した。

胎児がとり出された。ギャア、ギャアという産ぶ声。看護婦たちがいそがしく処置をする。W夫人が何か看護婦と話している。べつにかわったことはないらしく、帝王切開によって、一つの新しい生命が地上に生れたのだ。

子宮が縫い合わされて、器具がひきぬかれたとき、とつぜん、ふたたび異常な事態がおこった。W夫人が目をぎらぎらさせて、手術台に近づいたのだ。おそい顔だった。医者が立ちはだかつて、彼女をさえぎった。

「この女の腸をつかみ出してやる！」

この不愉快なちん入者に、医者は今度は本当に怒ったらしい。ピストルをつきつけられ、かまわず熱心に何やら説得している。結局、女の方が折れて、うしろにひきさがった。何事がおこるか手汗をにぎっている。Oさんの真下で、洗腸の用意がはじまった。医者は看護婦にふたたびE子の腹をあけさせ、挿管が抜けないように、腹の中に手をつっこんで、直腸の下端をひもでしばった。胃の上端も、液が食道を通って、口から出ないために、器具ではさんだ。腹を開いたままで、腸

に水を流そうというのらしい。やがて、ゴム球をおさえて、液体が送りこまれはじめると、腸管がぶくぶくとふくらんで、腹の中からあらわれてきた。腸間膜でつながっているの、すっかりからだの外には出てしまわないが、切り口を大きくおしひろげて、つぎからつぎに、むくりむくりとはみ出して来る。蛙の腹がさけて、はらわたが無残にはみ出た有様を想像すればよい。おびただしい腸が、開かれた腹一ぱいにおし出されて、何十匹もの蛇がもつれ合っているように見える。最後に胃ぶくろがふくらんで、腹の中からぐーっと上って来る。まさに生体解剖である。

「もうたくさん、やめて！」

さすがにW夫人が、まっさおになって叫んだ。

医者はだまって挿管^{カニユーレ}をはずすと、ていねいに手で腸をしごいて、水をすっかりきれいに出してしまい、前の順序とは逆に、腹膜、腹筋、皮膚、とE子の腹をもとのように縫合した。左右の切り口がぴたりと合って、ちよっと見ると臍がなくなっただけに気がつかないのに、Oさんは感心した。

W夫人が命令するようにいった。「そのお臍をちょうだい。もらって帰るわ。」

Wに食べさせてやるのよ。」

E子の臍のついた肉片を、看護婦が新聞紙につつんで渡すと、彼女はほんとにピストルをほうり投げた。

「おもちゃのピストルよ。Y先生。」

と、ヒステリックにいった、ボタンと戸をあけて出て行った。看護婦の一人が産衣にくるんだ赤ん坊を抱いて、そのあとを追った。

あくる朝、Oさんが医者のところへ行ってみると、E子は非常な高熱を出して苦しんでいるから、会わない方がいいだろうと云われた。Y先生は、昨夜のことですっかりくさって、元気がなかった。看護婦が出て行くと、立ち上って、Oさんについてこいと云う。Oさんがだまってついて行くと、廊下のつきあたりの小さい部屋の前に立って、鍵をとり出して扉をあけた。物置のようになっていた雑然とした部屋の片すみに、昨夜W夫人について子供を抱いて出た若い看護婦が、白い制服のまま、さるぐつわをかまされ、両手をうしろにくくられて、椅子にしばりつけられていた。Oさんがおどろいてみると、「こいつが、Wの女房の手引きをしたんですよ。」

と、いまいまして、そうに云った。

「おい、おまえもはらわたをひきずり出してやろうか。生きたままでさかなのように料理することだって、出来るんだぞ」

それから、Oさんに向きなあって、

「すこしいためつけてやりますか?」

と、医者が云うので、

「いつかカメラ雑誌で読んだんですが、腹に穴をあけて空気を入れて、内臓の写真を撮るんだそうですね」

と、Oさんが聞くと、

「ええ、写真をとるんでなければ、穴をあけなくたって出来ますよ。不妊検査をするのに、ラップ管を通してみるでしょう? 腹腔に空気を入れてふくらませるだけなら、わけはないですよ。ひとつ高圧浣腸でもしてやりますか?」

と、自分のつまらない冗談を、おもしろそうに笑いとばした。

女のおびえた眼が、敵意をこめて、二人をにらみつけていた。Oさんは、不意に、思い切りこの女を、いじめてみたい衝動にかられた。猫がねずみをなぶるように、無茶苦茶になぶってやりたいと思った。Oさんは頭がカッ、カッとしてくるように感じた。しかしそ

のとき、衝動の強さが、逆に、Oさんに理性をとりもどさせた。(わしは今、何をしようとしているのだ?) という反省が、からくもOさんを抑制し、思いとどまらせた。おびえている女、この女をいたぶることによって、どんな成果がえられるというのだ、もうたくさんではないか? それにY先生の立場だって、考えてやらなくちゃいけない。Oさんは、悪夢をはらいのけるような気持で、きっぱりと云った。

「いや、罪なことはやめておきましょう。これ以上ばかなことをするのは無駄ですよ。はなしてやりましょう」

Y先生がうなずいた。

Oさんは、ふと、E子の手術場の光景を思いうかべて、Y先生はサドの傾向を



持っているのではないか、と思った。

第六章 結 末

S市からかえったOさんは、過去一年あまりの間にとった妊婦のヌードをおさめた十冊近くのアルバムをながめながら、その間におこったいろんなできごとを思い出していた。

お金のためには、妊娠したからだを、写真にとらせることを承知しながら、最後までOさんにうちとけず、冷たい表情で見くだすようにしていたA子。しいたげられた家畜のように、自分がみじめだという意識さえもち合わせないで、おとなしくおもちやになったI子。無軌道な生活をたのしいものと思ひこみ、人間の尊厳をすてることに、むしろよろこびをすら感じているようにみえたU子。そのU子にも、自分で自分の運命をきりひらいて行こうとする、ひどく楽観的な一種の情熱があり、I子には、いじけたかたちでしか表現できないにしても、他人に自分を同一化しようとする、いじらしいまでの心のやさしさがあった。

それぞれ特徴のある女たちの性格が、Oさんにはなつかしかった。いずれも、現代のそうぞうしい社会の異常な刺戟の、いわば被害者であるといつてよかった。何か正常でないも

のが、彼女たちに共通していた。E子はどうかろう、とOさんは考えた。彼女については、まだその印象があまりにもなまなましく、一つの抽象的なイメージにまとめることはできなかった。どうしようもなかったにしても自分の見ている前でおこったことに、Oさんが責任をまねがれることができない、ということとは、大きなショックだった。帰りぎわにおかみが、近いうちにぜひ一度来てくれ、といやに念をおして云ったことを思い出して、Oさんは、三月になったら、今度こそは何のめあてもなく、ただゆっくり温泉につかるために、一度S市に行ってみようと思った。

過去十三カ月の「妊婦狩り」のために、Oさんは借します金をつかったつもりだが、資金はまだかなり残っていた。しかし、もうこれくらいがちょうど潮どきではないか、とOさんは考えるようになっていた。そこで、E子のみまいを兼ねて、OさんはS市をおとすれた。ところが、そこには、思いがけないことがまちもうけていた。

「今度は、本当にゆっくり遊びに来たよ。」と云うOさんに、おかみがいつになくまじめな顔で、いきなり、

「Oさん、E子さんと結婚なさる気もちはあ

りませんか？」

と聞いたからだ。Oさんは、まったく不意うちをくらって、びっくりした。

「えっ、冗談云っちゃいけないよ。……だって、わしは……」

「年がちがいすぎるっておっしゃるんですよ。でもE子さんは承知してるんですよ」

「……」

「だから、どうなんですか？本当にE子さんをお嫁にもらって下さる気はないんですか？」

「そりゃあ、ないこともないがね。……まあ考えてみよう。」

Oさんは年がいもなく、胸がわくわくしてその夜は眠れなかった。E子は、実際の年令より若くみえるが、実はあれで二十六になっており、WだってOさんより年上だったのだといわれて、Oさんは、自分の年令の半分ではない彼女と、あたらしく人生をやりなおしてみようという勇気が、次第にわきおこってくるのを感じた。Oさんは心をきめた。

E子の経過は、あんなことがあったにしては、思ったより良好で、三月中には退院できるようにになった。E子のからだの回復のこともあるので、四月は準備期間として、五月の

ゴールデン・ウィークがすんだら、形式ばかりの式をあげて届出をすませ、一週間程度の新婚旅行にでかけることになっていた。それまでは、E子は温泉で療養かたがた、S子のおかみのところで厄介になることにした。

そのようなある日、縁がわで日なたぼっこをしながら、E子がOさんに云った。

「ねえ、わたしなんかと結婚して、後悔しない？ チビで、ファニー・フェースで、おまけにお臍がないのよ。」

「後悔なんかしないさ。蛙のような腹をした女ばかり追っかけて、やっと見つけたのが、きみだよ。蛙にお臍はないものね」

と、Oさんが答えると、いきなりE子が、「いじわる！」

と叫んで、顔をおおった。見ると、しゃくりあげて泣いている。Oさんはあわてて、

「わしがわるかったよ。冗談なんか云って。ごめん、ごめん」

と、あやまった。しばらくすると、E子は気分をとりなおして、笑顔をみせた。

「わたしこそ、泣いたりしてごめんなさい。……でも、わたしがなぜ、あなたと結婚する気になったか、わかる？」

「さあ、……分らんね」

「わたしね、Y先生から聞いたの、あのWの奥さんのスパイになった看護婦のことよ。そのとき、わたしは、あなたが本当は、けっして自分の欲望のために、他人をおもちゃにするような人じゃない、と思ったの。……だからわたし、あなたに蛙だなんていわれると、本当にかなしいと思うの」

しかしOさんの心は、すこし別のことを考えていた。——OさんがE子の腹を蛙のようだったのは、それを讃美して云っているのだ。手術のきずあとが一本たてに走っている、臍のないE子の腹を、Oさんはまだ見たことがなかった。新婚旅行に行ったら、それを見ることができる。そうすれば彼女も、Oさんのことばを理解するようになるだろう。

結婚したら、E子にアルバムを見せてやる。その中には、E子の、腹一面にあふれ出した腸がうつっている写真もいくつかあるはずだ。はらわたまですっかりさらけ出して見せた彼女が、臍のない腹を見せるのを、何のはずかしがる理由があろう。同時にOさんは、E子の臍のない腹がふくらんで、一本の線がまるい腹をたてに一筋走っているところを想像した。帝王切開のあとは、三年ぐらい待たなければ、子宮が十分に癒着しないので、その間は妊娠をされた方がよい、という医者のお告を思い出しながら、Oさんは今からひそかに、そのときのことをたのしみにしているのである。

(完)

別冊奇譚クラブ

目下発売中

特価 150円 (送料24円)

創刊号

「告白・手記・体験」特集

四馬孝・画

リクエスト画廊 16葉

緊縛写真

グラビア希望写真集

五十一葉

本文

告白、手記、体験 28項目

第二集

「松井籟子作品集」特集

サティスチック口絵

滝れい子画「狐灯」画集

北原純子画「淫火」画集

グラビア口絵

須川令子被縛独演集

本文

長篇サド小説「淫火」

中篇サド小説「狐灯」